



Acronis Backup & Recovery 11.5

Update 2

コマンド ライン リファレンス

適用されるエディション

- | | |
|---|--|
| <input checked="" type="checkbox"/> Advanced Server | <input checked="" type="checkbox"/> Server for Windows |
| <input checked="" type="checkbox"/> Virtual Edition | <input checked="" type="checkbox"/> Server for Linux |
| <input checked="" type="checkbox"/> Advanced Server SBS Edition | <input checked="" type="checkbox"/> Workstation |
| <input checked="" type="checkbox"/> Advanced Workstation | |
| <input checked="" type="checkbox"/> Microsoft Exchange Server の場合 | |
| <input checked="" type="checkbox"/> Microsoft SQL Server(シングルパス)の場合 | |
| <input checked="" type="checkbox"/> Microsoft Active Directory(シングルパス)の場合 | |

著作権情報

Copyright © Acronis International GmbH, 2002-2013. All rights reserved.

「Acronis」および「Acronis セキュア ゾーン」は、Acronis International GmbH の登録商標です。

「Acronis Compute with Confidence」、「Acronis Startup Recovery Manager」、「Acronis Active Restore」、および Acronis ロゴは、Acronis International GmbH の商標です。

Linux は、Linus Torvalds の登録商標です。

VMware および VMware Ready は、VMware, Inc. の米国ならびにその他の地域における商標または登録商標です。

Windows および MS-DOS は、Microsoft Corporation の登録商標です。

ここに記載されているその他すべての商標および著作権は、それぞれの権利所有者に帰属します。

著作権所有者の明示的な許可なく本ドキュメントの実質的な修正版を配布することは禁止されています。

著作権所有者からの事前の許可がない限り、いかなる形態（紙媒体など）であっても商業目的で本ドキュメントまたはその派生物を配布することは禁止されています。

ドキュメントは、「現状のまま」で提供され、商品性に対する黙示的保証、特定の目的に対する適合性、権利を侵害していないことなどを含む明示的または黙示的な条件、言明、および保証に関する責任を負いません（免責条項の範囲が法的に無効と見なす場合を除く）。

本ソフトウェアまたはサービスにサードパーティのコードが付属している場合があります。サードパーティのライセンス条項の詳細については、ルート インストール ディレクトリにある license.txt ファイルをご参照ください。本ソフトウェアまたはサービスと共に使用するサードパーティ コードおよび関連するライセンス条項の最新の一覧については、<http://kb.acronis.com/content/7696> をご参照ください。

Acronis の特許取得済みの技術

この製品で使用されている技術は、以下の特許の対象です。米国特許 # 7,047,380、米国特許 # 7,246,211、米国特許 # 7,318,135、米国特許 # 7,366,859、米国特許 # 7,636,824、米国特許 # 7,831,789、米国特許 # 7,886,120、米国特許 # 7,934,064、米国特許 # 7,949,635、米国特許 # 7,979,690、米国特許 # 8,069,320、米国特許 # 8,073,815、米国特許 # 8,074,035。

目次

1 コマンドライン ユーティリティの概要	7
1.1 インストール	7
1.2 下位互換性およびアップグレード	8
1.3 構文	9
1.4 ローカル管理、リモート管理、および集中管理	10
1.5 アンインストール	12
1.6 略称の一覧	13
2 コマンド	14
2.1 サービスによるコマンド	14
2.1.1 ディスク、ファイル、仮想コンピュータのバックアップ	14
2.1.2 アプリケーションのバックアップ	17
2.2 help	19
2.3 バックアップと復元	20
2.3.1 ディスクとボリューム	20
2.3.2 ファイル	26
2.3.3 仮想コンピュータ	29
2.3.4 Microsoft Exchange	34
2.3.5 Microsoft SQL	40
2.3.6 Microsoft Active Directory	42
2.4 アーカイブおよびバックアップの操作	43
2.4.1 アーカイブ	43
2.4.2 バックアップ	47
2.4.3 マウント	55
2.4.4 SQL データベースのマウント	57
2.5 Acronis セキュア ゾーンの操作	59
2.5.1 create asz	59
2.5.2 resize asz	59
2.5.3 cleanup asz	60
2.5.4 delete asz_files	61
2.5.5 delete asz	61
2.6 Acronis Startup Recovery Manager の操作	62
2.6.1 activate asrm	62
2.6.2 deactivate asrm	62
2.7 テープの操作	63
2.7.1 list tape_libraries	63
2.7.2 list tape_slots	63
2.7.3 inventory tape	64
2.8 格納域の操作	65
2.8.1 validate vault	65
2.8.2 格納域のカタログ化	65
2.9 ディスクの操作	66
2.9.1 ディスクのクローン作成	66
2.10 管理の操作	67
2.10.1 情報の収集	67

2.10.2	計画	69
2.10.3	タスク	73
2.10.4	ライセンス	75
3	パラメータ	76
3.1	物理コンピュータへのアクセス	76
3.1.1	host	76
3.1.2	service	76
3.1.3	address	76
3.2	仮想コンピュータ	77
3.2.1	仮想コンピュータへのアクセス	77
3.2.2	新しい仮想コンピュータ	78
3.3	アプリケーションへのアクセス	79
3.3.1	exchange_credentials	79
3.3.2	インスタンス	79
3.3.3	items	80
3.3.4	Exchange データの指定	81
3.3.5	SQL データの指定	82
3.3.6	SQL Server インスタンスへのアクセス	82
3.4	場所	83
3.4.1	loc	83
3.4.2	arc	83
3.4.3	backup	85
3.4.4	target	85
3.4.5	target_arc	87
3.4.6	mailbox_location	87
3.5	ディスクとボリューム	88
3.5.1	disk	88
3.5.2	nt_signature	88
3.5.3	volume	89
3.5.4	start	91
3.5.5	size	91
3.5.6	mbr_disk	91
3.5.7	target_mbr_disk	92
3.6	バックアップ パラメータ	92
3.6.1	application_aware	92
3.6.2	backuptype	92
3.6.3	cleanup	92
3.6.4	コメント	93
3.6.5	copy_only	93
3.6.6	exclude	93
3.6.7	express	95
3.6.8	fixed_drive	95
3.6.9	ignore_app_errors	96
3.6.10	include	96
3.6.11	mssql_truncate_logs	96
3.6.12	plain_archive	97
3.6.13	raw	98
3.6.14	バックアップ オプション	98
3.7	復元パラメータ	105
3.7.1	autorename	105
3.7.2	database	105
3.7.3	database_location	106
3.7.4	database_state	106
3.7.5	destination_database	107

3.7.6	destination_instance	107
3.7.7	disk_location	108
3.7.8	exclude	108
3.7.9	ext2_3	109
3.7.10	fat16_32	109
3.7.11	file	109
3.7.12	log_location	109
3.7.13	original_date	109
3.7.14	outlookmachine	110
3.7.15	overwrite	110
3.7.16	pit	111
3.7.17	power_on	111
3.7.18	preserve_mbr	111
3.7.19	recover_absolute_path	111
3.7.20	recovery_point	112
3.7.21	target_disk	113
3.7.22	target_volume	113
3.7.23	type	114
3.7.24	use_all_space	114
3.8	マウント パラメータ	115
3.8.1	rw	115
3.8.2	letter	115
3.8.3	mount_point	115
3.9	Acronis セキュア ゾーンのパラメータ	116
3.9.1	asz_size	116
3.10	フィルタ処理	116
3.10.1	content_path	117
3.10.2	content_type	117
3.10.3	filter_available_for_backup	118
3.10.4	filter_date	118
3.10.5	filter_edition	118
3.10.6	filter_guid	119
3.10.7	filter_host	119
3.10.8	filter_library	119
3.10.9	filter_machines	119
3.10.10	filter_name	119
3.10.11	filter_state	120
3.10.12	filter_status	120
3.10.13	filter_type	120
3.10.14	filter_user	121
3.10.15	filter_version	121
3.11	テープ管理パラメータ	121
3.11.1	assign2free	121
3.11.2	ライブラリ	121
3.11.3	モード	122
3.11.4	slots	122
3.12	一般的なパラメータ	123
3.12.1	credentials	123
3.12.2	エラー処理	123
3.12.3	file_params	124
3.12.4	force_yes	124
3.12.5	id 124	
3.12.6	log	124
3.12.7	log_format	124
3.12.8	network_speed	125
3.12.9	oss_numbers	125
3.12.10	output	126

3.12.11 password.....	126
3.12.12 process_priority.....	126
3.12.13 progress	127
3.12.14 reboot.....	127
3.12.15 silent_mode.....	128
3.12.16 use_registry_defaults	128
4 使用例	128
4.1 バックアップと復元	128
4.1.1 ディスクとボリューム	128
4.1.2 ファイル	132
4.1.3 仮想コンピュータ	133
4.1.4 Microsoft Exchange	135
4.1.5 Microsoft SQL	137
4.1.6 Microsoft Active Directory.....	138
4.2 アーカイブおよびバックアップの操作	138
4.2.1 アーカイブ	138
4.2.2 バックアップ.....	140
4.2.3 マウント.....	142
4.2.4 SQL データベースのマウント.....	142
4.3 Acronis セキュア ゾーンの操作	143
4.4 Acronis Startup Recovery Manager の操作.....	144
4.5 テープの操作.....	144
4.6 格納域の操作.....	145
4.7 ディスクの操作	146
4.8 管理の操作	146
4.8.1 情報の収集.....	146
4.8.2 計画	147
4.8.3 タスク	148
4.8.4 ライセンス	148
4.9 バックアップする論理ボリュームおよび MD デバイスの選択	148
4.10 Linux での cron サービスを使用したバックアップのスケジュール	149
5 古いコマンドライン構文と新しいコマンドライン構文の比較.....	150
6 acronis_encrypt ユーティリティ.....	151

注意: お住まいの地域によっては Acronis Backup & Recovery Online を使用できない場合があります。
 詳細については、「<http://www.acronis.co.jp/my/backup-recovery-online/>」を参照してください。

1 コマンドライン ユーティリティの概要

Acronis Backup & Recovery 11.5 は、`acrocmd` ユーティリティでコマンドライン インターフェイスをサポートします。

旧 Acronis 製品で使用されていた `trueimagecmd` ユーティリティとは異なり、`acrocmd` にはコマンドを物理的に実行するツールは含まれていません。Acronis Backup & Recovery 11.5 コンポーネント(エージェント、ストレージ ノード、および管理サーバー)へのコマンドライン インターフェイスを提供するだけです。

Windows コンピュータまたは Linux コンピュータにインストールすれば、`acrocmd` ユーティリティを任意のフォルダまたはディレクトリから実行することができます。このユーティリティは、Linux ベースおよび PE ベースのブータブル メディアいずれから操作する場合でも使用できます。

1.1 インストール

Acronis Backup & Recovery 11.5 のスタンドアロン エディション

Acronis Backup & Recovery 11.5 のスタンドアロン エディションをインストールした場合は、コマンドライン ユーティリティがすでにコンピュータにインストールされています。このコンピュータのローカル管理のみ使用可能です。つまり、このコンピュータに対するコマンドまたはスクリプトはローカルでのみ実行できます。

集中管理が可能なエディション

Acronis Backup & Recovery 11.5 の アドバンスド エディション を使用すると、Acronis Backup & Recovery 11.5 エージェントがインストールされている任意のコンピュータのローカル管理、リモート管理、および集中管理『10ページ』を実行することができます。

管理コンソールの場合と同じように、操作を行う(コマンドまたはスクリプトを実行する)コンピュータにコマンドライン ユーティリティをインストールします。Windows または Linux コンピュータを使用できます。コマンドライン ユーティリティを使用すると、Linux を 実行しているコンピュータから Windows を管理することも、その逆も可能です。

インストール手順

Linux では、コマンドライン ユーティリティは、デフォルトで管理コンソールまたはエージェント for Linux と共にインストールされます。

Windows では、セットアップ ファイルから個別のコンポーネントとしてユーティリティをインストールします。インストーラでこのコンポーネントにアクセスするには、**[Acronis コンポーネントを手動で選択し、インストール処理をカスタマイズする]** チェック ボックスを オンにします。または、対応する .msi ファイルを取り出して実行することができます。

.msi ファイルからコマンドライン ユーティリティをインストールするには

1. Acronis Backup & Recovery 11.5 のセットアップ ファイルを実行します。
2. **[インストール ファイルの取り出し]** をクリックします。
3. **AcronisCommandLineTool.msi** ファイルに対応するチェック ボックスをオンにします。
4. ファイルの取り出し先のフォルダを指定します。

5. **[取り出し]** をクリックします。
6. ファイルが正常に取り出されたら、**[完了]** をクリックします。
7. **AcronisCommandLineTool.msi** ファイルが取り出されたフォルダに移動し、ファイルを起動します。
8. 画面に表示されるインストール ウィザードの指示に従ってください。

インストール パス

デフォルトのインストール パスは次のとおりです。

- **%ProgramFiles%¥Acronis¥CommandLineTool**(32 ビット Windows の場合)
- **%ProgramFiles(x86)%¥Acronis¥CommandLineTool**(64 ビット Windows の場合)
- **/usr/lib/Acronis/CommandLineTool**(Linux の場合)

1.2 下位互換性およびアップグレード

Acronis Backup & Recovery 10 からのコマンドライン ユーティリティのアップグレード

Acronis Backup & Recovery 10 のスタンドアロン エディションから Acronis Backup & Recovery 11.5 にアップグレードする場合、コマンドライン ユーティリティをアップグレードする追加の操作は不要です。

集中管理を使用してエディションをアップグレードすると、エージェントがインストールされているすべてのコンピュータで、ソフトウェアによってコマンドライン ユーティリティがインストールされます。追加の操作は不要です。

下位互換性

Acronis Backup & Recovery 11.5 コマンドライン ユーティリティは、Acronis Backup & Recovery 10 コマンドライン ユーティリティと下位互換性があります。古い構文を引き続き使用することができます。`trueimagecmd` の代わりに `acrocmd` と入力するだけで使用できます。

既存のスクリプトの使用を継続するには、スクリプトを編集して `trueimagecmd` を `acrocmd` に置き換えます。スクリプトに `trueimagecmd` ユーティリティへのパスが含まれている場合は、`acrocmd` ユーティリティのパスに置き換えます。他のすべてのパラメータおよび値はそのままにします。

`acrocmd` に切り替える前に、すべての製品コンポーネントがアップグレードされたことを確認してください。Acronis Backup & Recovery 10 は `acrocmd` をサポートしていません。`acrocmd`

古い構文と新しい構文をスクリプト内で組み合わせて使用できますが、コマンド文字列では組み合わせることはできません。新しいスクリプトを作成する場合は、新しい構文を使用することをお勧めします。

古い構文を使用した場合でも、ログやコマンドの出力は新しい形式で表示されます。

バックアップ ファイル名の拡張子

バックアップ コマンドでの `/filename` パラメータの動作は、Acronis Backup & Recovery 10 と Acronis Backup & Recovery 11.5 で少々異なります。Acronis Backup & Recovery 10 では、

バックアップ ファイルの拡張子はパラメータ値で指定したものと完全に一致しますが、これとは異なり Acronis Backup & Recovery 11.5 では、*.tib 拡張子がこの値に付加されます。

たとえば、次のようになります。

- Acronis Backup & Recovery 10 で `/filename:<パス>my_backup.bak` と指定した場合、バックアップ ファイル名は `my_backup.bak` になります。
- Acronis Backup & Recovery 11.5 では、`/filename:<パス>my_backup.bak` と指定した場合、バックアップ ファイル名は `my_backup.bak.tib` になります。しかし、`/filename:<パス>my_backup.tib` と指定した場合、バックアップ ファイル名も `my_backup.tib` になります。

1.3 構文

`acrocmd` は、次の構文で使います。

```
acrocmd <コマンド> --<パラメータ 1>=<値の一覧 1> ... --<パラメータ N>=<値の一覧 N>
```

表記規則

コマンドおよびパラメータの説明では、次の特別な表記規則を使います。

- 山括弧(<>)に囲まれた項目: ユーザーが入力する必要がある情報です。例: <IP アドレスまたはホスト名>
- 大括弧({})に囲まれた項目、パイプ(|)で区切られた選択肢: ユーザーが 1 つのみ選択する必要がある選択肢です。例: {on|off}。

パラメータ値

一部のパラメータでは、1 つの値のみを指定する必要があります。そのような値の説明は単数形で記述されています。たとえば、`--arc=<アーカイブ名>`と表記されている場合は、このパラメータで 1 つのアーカイブ名のみを指定します。

一部のパラメータでは、1 つ以上の値を入力することができます。そのような値の説明は複数形で記述されています。たとえば、`--volume=<ボリューム番号>`と表記されている場合は、このパラメータでボリューム番号の一覧を指定することができます。

区切り文字

パラメータの名前および値の一覧は、等号またはスペース文字で区切られます。値の一覧内の値は、カンマまたはスペース文字によって区切られます。

例:

```
acrocmd backup disk --disk=1,2
acrocmd backup disk --disk=1 2
acrocmd backup disk --disk 1,2
acrocmd backup disk --disk 1 2
```

カンマおよび空白文字を含むパラメータ値を囲む

一般的な表現	例
"<空白文字を含む値>"	<code>--include="C:¥my documents"</code>
¥"<カンマを含む値>¥"	<code>--include=¥"E:¥Employees (A,B) ¥"</code>

```
"¥"<空白文字とカンマを含む値>¥""
```

```
--include="¥"D:¥my photos¥my wife, my kids and  
me¥""
```

入力パラメータを含むファイル

`acrocmd` では入力パラメータを含むファイルを使用できます。入力パラメータ ファイルの内容がコマンドラインでパラメータと連結されます。

たとえば、次のコマンドがあります。

```
acrocmd backup disk -f params.txt
```

ここでファイル **params.txt** の内容は次のとおりです。

```
--disk=1 --loc=e:¥my_backups --arc=archive123
```

これは次のコマンドと同じです。

```
acrocmd backup disk --disk=1 --loc=e:¥my_backups --arc=archive123
```

1.4 ローカル管理、リモート管理、および集中管理

Acronis Backup & Recovery 11.5 の アドバンスド エディション を使用すると、Acronis Backup & Recovery 11.5 エージェントがインストールされている任意のコンピュータの ローカル管理、リモート管理、および集中管理を実行することができます。

ローカル管理

ローカル管理の場合は、Acronis Backup & Recovery 11.5 エージェントがインストールされているコンピュータにコマンドライン ユーティリティをインストールします。操作は、ログオンに使用したユーザー アカウントで実行されます。

例

ローカル コンピュータのすべてのディスクを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
acrocmd list disks
```

リモート管理

リモート管理の場合は、操作を行う(コマンドまたはスクリプトを実行する)コンピュータにコマンドライン ユーティリティをインストールします。

コマンドで次の項目を指定します。

- Acronis Backup & Recovery 11.5 エージェントがインストールされているリモート コンピュータの IP アドレスまたはホスト名 (`--host`)
- そのコンピュータにアクセスするためのログイン情報(ユーザー名とパスワードのペア)

ログイン情報として指定するユーザーは、そのコンピュータ上で Acronis Remote Users セキュリティ グループのメンバになっている必要があります。操作はこのユーザー アカウントで実行されます。

例

リモート コンピュータのすべてのディスクを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
acrocmd list disks --host=<IP アドレスまたはホスト名> --credentials=<ユーザー名>,<パスワード>
```

集中管理

コンピュータ上でのコマンド

Acronis Backup & Recovery 11.5 管理サーバーを介して、管理サーバーの管理者のログイン情報を使用し、任意の登録済みのコンピュータを管理することができます。各リモート コンピュータのログイン情報は必要ありません。

いくつかのコマンドで、複数のコンピュータのアドレスをカンマで区切って指定することができます。操作は、指定したすべてのコンピュータ上で順番に実行されます。

コマンドで次の項目を指定します。

- Acronis Backup & Recovery 11.5 エージェントがインストールされているコンピュータの IP アドレスまたはホスト名 (`--address`)
- 管理サーバーの IP アドレスまたはホスト名 (`--host`)
- 管理サーバー サービスの名前 (`--service=ams`)
- 管理サーバーにアクセスするためのログイン情報

ログイン情報として指定するユーザーは、管理サーバー上で Acronis Centralized Admins セキュリティ グループのメンバになっている必要があります。異なるコンピュータ上でコマンドライン ユーティリティを実行している場合、そのユーザーは、管理サーバー上で Acronis Remote Users セキュリティ グループのメンバにもなる必要があります。

そのコンピュータ上での操作は、そのコンピュータ上で実行されているエージェント サービスのアカウント (Acronis Agent User アカウント) で実行されます。

例

管理サーバーを介してコンピュータのすべてのディスクを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
acrocmd list disks --host=<ams ホスト名> --credentials=<ユーザー名>,<パスワード>  
--service=ams --address=<IP アドレスまたはホスト名>
```

管理サーバー上でのコマンド

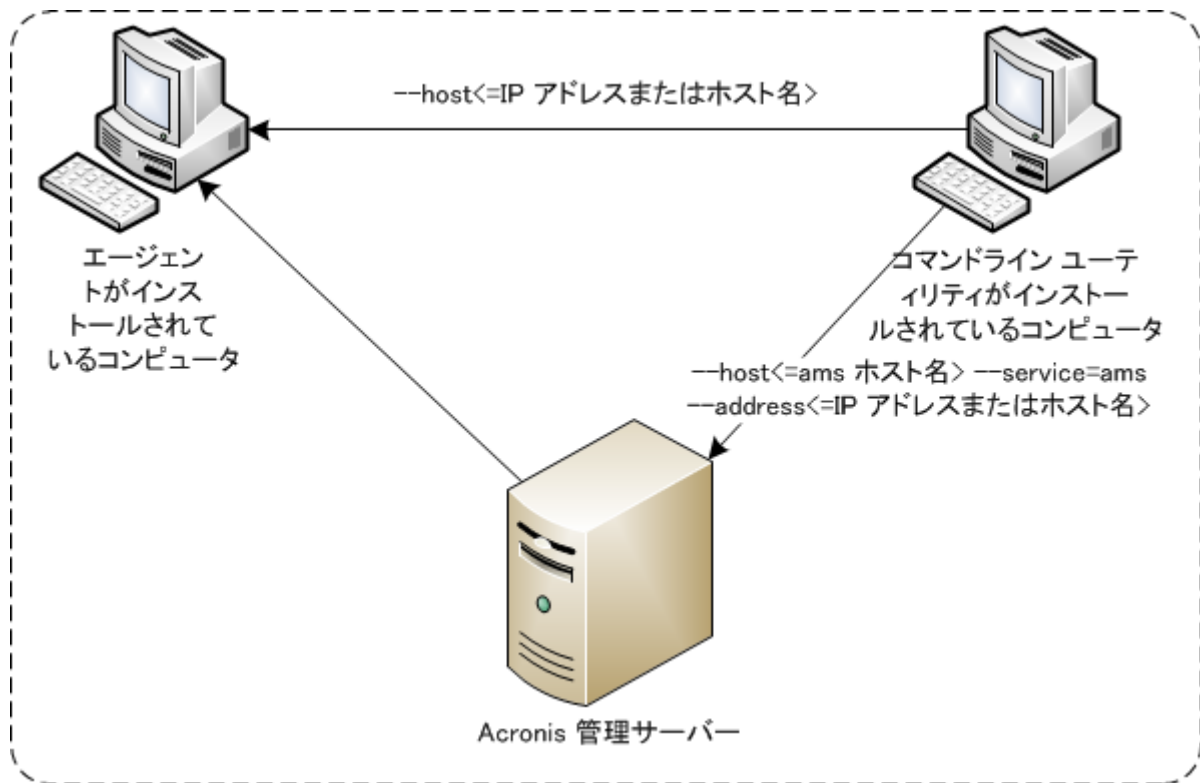
管理サーバー自体で実行できるコマンドがあります。

例

管理サーバーの現在のアクティビティを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
acrocmd list activities --host=<ams ホスト名> --credentials=<ユーザー名>,<パスワード>  
--service=ams
```

下の図は、管理対象のコンピュータに直接アクセスするか Acronis Backup & Recovery 11.5 管理サーバー経由でアクセスするためのオプションを示しています。



管理対象のコンピュータへのアクセスのオプション

1.5 アンインストール

Linux でのアンインストール

Linux でコマンドライン ユーティリティをアンインストールするには、次のコマンドを実行します。

```
# cd /usr/lib/Acronis/CommandLineTool/uninstall
# ./uninstall
```

無人モードでコマンドライン ユーティリティをアンインストールするには、`./uninstall` コマンドを `-a` パラメータで実行します。

Windows でのアンインストール

[スタート] -> [すべてのプログラム] -> [Acronis] -> [Acronis Backup & Recovery 11.5 のアンインストール] をクリックして、Acronis Backup & Recovery 11.5 をアンインストールすると、すべての製品コンポーネントと共にコマンドライン ユーティリティがアンインストールされます。

製品とは別にコマンドライン ユーティリティをアンインストールするには

1. Acronis Backup & Recovery 11.5 のセットアップ ファイルを実行します。
2. [インストール ファイルの取り出し] をクリックします。
3. **AcronisCommandLineTool.msi** ファイルに対応するチェック ボックスをオンにします。
4. ファイルの取り出し先のフォルダを指定します。

5. **[取り出し]** をクリックします。
6. ファイルが正常に取り出されたら、**[閉じる]** をクリックします。
7. 次のコマンドを実行します。

```
msiexec /uninstall <パス>%AcronisCommandLineTool.msi /qb
```

<パス> は、ファイルを取り出したフォルダです。

集中管理が可能なエディションの場合は、セットアップ ファイルからコマンドライン ユーティリティをアンインストールすることもできます。アンインストールするには、Acronis Backup & Recovery 11.5 セットアップ ファイルを実行し、**[Acronis Backup & Recovery 11.5 のインストール]** をクリックし、**[変更]** をクリックして、コマンドライン ユーティリティの名前の横にあるチェック ボックスをオフにします。

1.6 略称の一覧

このドキュメントでは次の略称を使用します。

AMS: Acronis Backup & Recovery 11.5 管理サーバーおよびそのコンポーネントのサービスです。

MMS: Acronis Managed Machine Service、Acronis エージェントがインストールされているコンピュータで実行されるサービスです。

ASN: Acronis Backup & Recovery 11.5 ストレージ ノードおよびそのコンポーネントのサービスです。

エージェント for ESX(i): Acronis Backup & Recovery 11.5 エージェント for VMware vSphere ESX(i) です。

2 コマンド

このセクションでは、サポートされているコマンドおよび対応するパラメータを示します。

コマンドライン ユーティリティを使用する際、`help` 『19ページ』 コマンドを使用して、サポートされているコマンドに関する情報を表示することができます。

2.1 サービスによるコマンド

2.1.1 ディスク、ファイル、仮想コンピュータのバックアップ

次の表は、Acronis サービスで実行可能なコマンドを示しています。Acronis サービスへの接続方法については、`--service` 『76ページ』 コマンドの説明を参照してください。

コマンド	AMS	MMS				ASN
		エージェント for Windows	エージェント for Linux	エージェント for ESX(i) または Hyper-V	ブータブルメディア	
バックアップと復元						
list disks『20ページ』		+	+	+	+	
backup disk『20ページ』		+	+	+	+	
recover disk『22ページ』		+	+	+	+	
recover mbr『24ページ』		+	+	+	+	
recover lvm_structure『25ページ』					Linuxベース	
backup file『26ページ』		+	+		+	
recover file『28ページ』		+	+	+	+	
list vmserver『29ページ』	+			+		
list vms『30ページ』	+			+		
backup vm『30ページ』	+			+		
recover vm『32ページ』	+	+(vm ファイルの作成)	+(vm ファイルの作成)	+(サーバーに vm を作成)		
アーカイブおよびバックアップの操作						
list archives『43ページ』	+	+	+	+	+	+
export archive『44ページ』	+	+	+	+	+	+

コマンド	AMS	MMS				ASN
		エージェント for Windows	エージェント for Linux	エージェント for ESX(i) または Hyper-V	ブータブル メディア	
validate archive 『45ページ 』	+	+	+	+	+	+
catalog archive 『46ページ 』	+	+	+	+ エージェント for ESX(i) (VA) を除く		+
delete archive 『47ページ 』	+	+	+	+	+	+
list backups 『47ページ 』	+	+	+	+	+	+
list content 『48ページ 』	+	+	+	+	+	+
validate backup 『49ページ 』	+	+	+	+	+	+
catalog backup 『49ページ 』	+	+	+	+ エージェント for ESX(i) (VA) を除く		+
export backup 『50ページ 』	+	+	+	+	+	+
replicate backup 『51ページ 』	+	+	+	+	+	+
convert full 『52ページ 』	+	+	+	+	+	+
consolidate backup 『53ページ 』	+	+	+	+	+	
delete backup 『54ページ 』	+	+	+	+	+	+
list mounts 『55ページ 』		+	+		+	
mount 『55ページ 』		+	+		+	
umount 『56ページ 』		+	+		+	
Acronis セキュア ゾーンの操作						
create asz 『59ページ 』		+	+		+	
resize asz 『59ページ 』		+	+		+	
cleanup asz 『60ページ 』		+	+		+	
delete asz_files 『61ページ 』		+	+		+	
delete asz 『61ページ 』		+	+		+	
Acronis Startup Recovery Manager の操作						
activate asrm 『62ページ 』		+	+		+	

コマンド	AMS	MMS				ASN
		エージェント for Windows	エージェント for Linux	エージェント for ESX(i) または Hyper-V	ブータブル メディア	
<code>deactivate asrm</code> 『62ページ 』		+	+		+	
テープの操作						
<code>list tape_libraries</code> 『63ページ 』		+	+			+
<code>list tape_slots</code> 『63ページ 』		+	+			+
<code>inventory tape</code> 『64ページ 』		+	+			+
格納域の操作						
<code>validate vault</code> 『65ページ 』	+	+	+	+	+	+
<code>catalog vault</code> 『65ページ 』	+	+	+	+ エージェント for ESX(i) (VA) を除く		+
ディスクの操作						
<code>clone disk</code> 『66ページ 』		+	+		+	
管理の操作						
<code>get log</code> 『67ページ 』	+	+	+	+	+	+
<code>list activities</code> 『68ページ 』	+	+	+	+		+
<code>sysinfo</code> 『69ページ 』	+	+	+	+	+	+
<code>list plans</code> 『69ページ 』	+	+	+	+		
<code>delete plan</code> 『70ページ 』	+	+	+	+		
<code>export plan</code> 『70ページ 』	+	+	+	+		
<code>import plan</code> 『71ページ 』	+	+	+	+		
<code>disable plan</code> 『72ページ 』	+	+	+	+		
<code>enable plan</code> 『72ページ 』	+	+	+	+		
<code>list tasks</code> 『73ページ 』	+	+	+	+		
<code>run task</code> 『73ページ 』	+	+	+	+		
<code>stop task</code> 『74ページ 』	+	+	+	+		
<code>delete task</code> 『74ページ 』	+	+	+	+		
<code>list licenses</code> 『75ページ 』		+	+	+	+	

* AMS サービスはそれ自体ではこれらのコマンドを実行しません。このサービスは、エージェント for ESX(i) またはエージェント for Hyper-V のどちらがコマンドを実行するかを定義し、対応する MMS にコマンドを送信するだけです。

2.1.2 アプリケーションのバックアップ

次の表は、Acronis サービスで実行可能なコマンドを示しています。Acronis サービスへの接続方法については、`--service` 『76ページ』 コマンドの説明を参照してください。

コマンド	AMS	MMS				ASN
		エージェント for Exchange	エージェント for SQL(シングルパス)*	エージェント for Active Directory(シングルパス)*	予約済み	
バックアップと復元						
list exchange_databases 『34ページ 』		+				
list exchange_mailboxes 『34ページ 』		+				
backup exchange_database 『35ページ 』		+				
backup exchange_mailbox 『36ページ 』		+				
recover exchange_database 『37ページ 』		+				
recover exchange_mailbox 『39ページ 』		+				
list mssql_instances 『40 ページ 』			+			
list mssql_databases 『40 ページ 』			+			
backup disk 『20ページ 』			+	+		
recover mssql_database 『41ページ 』			+			
recover ad_database 『42ページ 』				+		
アーカイブおよびバックアップの操作						
list archives 『43ページ 』	+	+	+	+		+
export archive 『44ページ 』	+	+	+	+		+
validate archive 『45ページ 』	+	+	+	+		+

コマンド	AMS	MMS				ASN
		エージェント for Exchange	エージェント for SQL(シングルパス)*	エージェント for Active Directory(シングルパス)*	予約済み	
catalog archive 『46ページ』	+	+	+	+		+
delete archive 『47ページ』	+	+	+	+		+
list backups 『47ページ』	+	+	+	+		+
list content 『48ページ』	+	+	+	+		+
validate backup 『49ページ』	+	+	+	+		+
catalog backup 『49ページ』	+	+	+	+		+
export backup 『50ページ』	+	+	+	+		+
replicate backup 『51ページ』	+	+	+	+		+
delete backup 『54ページ』	+	+	+	+		+
list mssql_mounts 『57ページ』			+			
mount mssql_database 『57 ページ』			+			
umount mssql_database 『58ページ』			+			
テープの操作						
list tape_libraries 『63 ページ』		+	+	+		+
list tape_slots 『63ページ』		+	+	+		+
inventory tape 『64ページ』		+	+	+		+
格納域の操作						
validate vault 『65ページ』	+	+	+	+		+
catalog vault 『65ページ』	+	+	+	+		+
管理の操作						
get log 『67ページ』	+	+	+	+		+
list activities 『68ページ』	+	+	+	+		+
sysinfo 『69ページ』	+	+	+	+		+

コマンド	AMS	MMS				ASN
		エージェント for Exchange	エージェント for SQL(シングルパス)*	エージェント for Active Directory(シングルパス)*	予約済み	
<code>list plans</code> 『69ページ』	+	+	+	+		
<code>delete plan</code> 『70ページ』	+	+	+	+		
<code>export plan</code> 『70ページ』	+	+	+	+		
<code>import plan</code> 『71ページ』	+	+	+	+		
<code>disable plan</code> 『72ページ』	+	+	+	+		
<code>enable plan</code> 『72ページ』	+	+	+	+		
<code>list tasks</code> 『73ページ』	+	+	+	+		
<code>run task</code> 『73ページ』	+	+	+	+		
<code>stop task</code> 『74ページ』	+	+	+	+		
<code>delete task</code> 『74ページ』	+	+	+	+		
<code>list licenses</code> 『75ページ』		+	+	+		

* このエージェントは、エージェント for Windows 『14ページ』 で実行できるすべてのコマンドを実行することもできます。

** トランザクション ログ バックアップをエクスポートすると、バックアップ チェーン全体のデータ(完全データベース バックアップと、選択した時点を含む、それ以降の一連のトランザクション ログ バックアップ)が、単一のバックアップにコピーされます。* トランザクション ログ ファイルは復元中にデータベースに適用されます。

メールボックスの増分バックアップをエクスポートする場合、バックアップ チェーン(完全バックアップ、および選択した増分バックアップを含む、それ以降のメールボックスの増分バックアップ)のデータが 1 つのバックアップに統合されます。

*** 依存関係のないバックアップの削除に制限はありません。依存関係のあるバックアップを、従属バックアップとは別に単独で削除することはできません。

2.2 help

このコマンドにより、サポートされているコマンドに関する情報が提供されます。

- 「`acrocmd help`」と入力すると、使用可能なすべてのコマンドの一覧が表示されます。
- `acrocmd help <テキストの一部>` を入力すると、指定した文字列で始まるすべてのコマンドの一覧が表示されます。
たとえば、「`acrocmd help ba`」と入力すると、`backup disk`, `backup file` などのコマンドが一覧表示されます。
- 「`acrocmd help <完全コマンド名>`」と入力すると、このコマンドに関する情報が表示されます。
たとえば、「`acrocmd help backup disk`」と入力すると、`backup disk` コマンドに関する情報が表示されます。

2.3 バックアップと復元

2.3.1 ディスクとボリューム

このセクションに記載されているコマンドは、エージェント for Windows またはエージェント for Linux がインストールされているコンピュータで実行できます。

2.3.1.1 list disks

使用可能なディスク グループ、ディスク、ボリューム、および未割り当て領域を一覧表示します。

例 『128ページ 』

パラメータ

`--oss_numbers={true|false}` 『125ページ 』

測定単位

`--size_measure={s|kb|mb|gb}`

ディスクとボリュームのサイズの単位です。指定しない場合は、値は `mb` になります。

`--start_measure={s|kb|mb|gb}`

ボリュームのオフセットの単位です。指定しない場合は、値は `mb` になります。

一般的なパラメータ

`--log=<フル パス>` 『124ページ 』

`--log_format={structured|unstructured}` 『124ページ 』

`--output={formatted|raw}` 『126ページ 』

`{-f|--file_params}=<フル ローカル パス>` 『124ページ 』

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

`--host=<IP アドレスまたはホスト名>` 『76ページ 』

`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted>` 『123ページ 』

`--address=<IP アドレスまたはホスト名>` 『76ページ 』

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

`--service={mms|ams}` 『76ページ 』

仮想コンピュータへのアクセス(Virtual Edition のみ)

`{--vmid=<仮想コンピュータ ID>|--vmname=<仮想コンピュータ名>|--vmconfig=<パス>}`
『77ページ 』

2.3.1.2 backup disk

指定したディスクまたはボリュームのバックアップを作成します。`--disk` パラメータまたは `--volume` パラメータのどちらも指定しない場合は、コンピュータ全体がバックアップされます。

シングルパスのディスクとアプリケーションのバックアップを実行する場合(つまり、`--application_aware` パラメータを指定する場合)は、コンピュータ全体をバックアップするこ

とを強くお勧めします。それ以外の場合は、アプリケーション データのバックアップが不完全になります。

例 『128ページ 』

パラメータ

バックアップの対象

```
--disk=<ディスク番号> 『88ページ 』  
--volume=<ボリューム番号> 『89ページ 』  
--oss_numbers={true|false} 『125ページ 』  
--exclude_hidden 『93ページ 』  
--exclude_mask=<マスク> 『93ページ 』  
--exclude_names=<名> 『93ページ 』  
--exclude_system 『93ページ 』
```

バックアップの保存先

```
--loc=<パス> 『83ページ 』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ 』  
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ 』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ 』
```

バックアップ方法

```
--archive_comment=<コメント> 『93ページ 』  
--backup_comment=<コメント> 『93ページ 』  
--backuptype={full|incremental|differential} 『92ページ 』  
--cleanup 『92ページ 』  
--fixed_drive 『95ページ 』  
--plain_archive 『97ページ 』  
--raw 『98ページ 』
```

シングルパス バックアップ

```
--application_aware 『92ページ 』  
--ignore_app_errors 『96ページ 』  
--mssql_truncate_logs 『96ページ 』
```

バックアップ オプション

```
--cataloging={full|fast} 『98ページ 』  
--compression={none|normal|high|max} 『100ページ 』  
--encryption={none|aes128|aes192|aes256} 『100ページ 』  
--fast 『100ページ 』  
--force_yes 『124ページ 』  
--hdd_speed=<速度>{kb|p} 『100ページ 』  
--ignore_bad_sectors 『101ページ 』  
--multi_volume_snapshot={true|false} 『102ページ 』  
--network_speed=<速度>{kb|p} 『125ページ 』  
--post_cmd=<コマンド> 『102ページ 』  
--pre_cmd=<コマンド> 『102ページ 』
```

```
--process_priority={low|normal|high} 『126ページ』
--reboot_after 『127ページ』
--retry_count=<試行回数> 『123ページ』
--retry_delay=<遅延> 『123ページ』
--silent_mode={on|off} 『128ページ』
--split=<サイズ> 『103ページ』
--use_registry_defaults 『128ページ』
--use_vss={none|auto|software_auto|software|hardware|acronis|native}
『104ページ』
--vss_full_backup 『104ページ』
```

テープ管理オプション

```
--tape_eject_successful 『103ページ』
--tape_full_empty 『103ページ』
--tape_overwrite 『103ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
--progress 『127ページ』
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.1.3 recover disk

指定したディスクまたはボリュームを復元します。

ディスクの MBR も常に一緒に復元されます。ボリュームを復元するとき、`--mbr_disk` および `--target_mbr_disk` パラメータを使用しない限り、MBR は復元されません。

例 『128ページ』

パラメータ

復元元

```
--loc=<パス> 『83ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』
```

```
--disk=<ディスク番号> 『88ページ』  
--nt_signature={auto|new|backup|existing} 『88ページ』  
--volume=<ボリューム番号> 『89ページ』  
--oss_numbers={true|false} 『125ページ』  
--mbr_disk=<ディスク番号> 『91ページ』
```

復元先

```
--target_disk=<ディスク番号> 『113ページ』  
--target_volume=<ボリューム番号> 『113ページ』
```

ディスクの復元

--target_disk パラメータが指定されている場合、--disk パラメータで指定された各ディスクが --target_disk パラメータで指定された各ディスクに復元されます。たとえば、「--disk=1,2 --target_disk=3,4」と入力した場合、ディスク 1 ~ 3 およびディスク 2 ~ 4 が復元されます。--disk パラメータと --target_disk パラメータの数値が異なる場合、コマンドは失敗します。

--target_disk パラメータが指定されていない場合、--disk パラメータで指定されたディスクが自動的にターゲット コンピュータのディスクにマップされます。マッピングが成功しない場合、コマンドは失敗します。

ボリュームの復元

--target_volume パラメータが指定されている場合、--volume パラメータで指定された各ボリュームが --target_volume パラメータで指定された各ボリュームに復元されます。たとえば、「--volume=3-1,3-2 --target_volume=1-1,1-2」と入力した場合、ボリューム 3-1 がボリューム 1-1 に復元され、ボリューム 3-2 がボリューム 1-2 に復元されます。--volume パラメータと --target_volume パラメータの数値が異なる場合、コマンドは失敗します。

--target_volume パラメータを指定せず、--target_disk パラメータを指定した場合、--volume パラメータで指定したすべてのボリュームが、指定したディスク上の適切なサイズの最初の未割り当て領域に復元されます。適切なサイズの未割り当て領域が見つからない場合は、コマンドが失敗します。複数のボリュームを復元する場合でも、指定できるターゲット ディスクは、1 つのみです。

--target_volume パラメータまたは --target_disk パラメータのどちらも指定しない場合、--volume パラメータで指定したボリュームが自動的にターゲット コンピュータのディスクにもマップされます。マッピングが成功しない場合、コマンドは失敗します。

```
--start=<オフセット>{s|kb|mb|gb} 『91ページ』  
--size=<ボリューム サイズ>{s|kb|mb|gb} 『91ページ』  
--target_mbr_disk=<ディスク番号> 『92ページ』
```

復元方法

```
--fat16_32 『109ページ』  
--ext2_3 『109ページ』  
--preserve_mbr 『111ページ』  
--type={active|primary|logical} 『114ページ』  
--use_all_space 『114ページ』  
--active_restore
```

このパラメータを指定した場合、Acronis アクティブ リストアテクノロジーが有効になります。

復元オプション

```
--force_yes 『124ページ』  
--reboot 『127ページ』  
--reboot_after 『127ページ』  
--retry_count=<試行回数> 『123ページ』  
--retry_delay=<遅延> 『123ページ』  
--silent_mode={on|off} 『128ページ』  
--use_registry_defaults 『128ページ』
```

Acronis ユニバーサル リストアのパラメータ

```
--ur_driver=<INF ファイル名>
```

Acronis ユニバーサル リストアの使用と、インストールする大容量記憶装置のドライバを指定します。

```
--ur_path=<search folder>
```

Acronis Universal Restore の使用と、ドライバの保存先へのパスを指定します。

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
--progress 『127ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディション のみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.1.4 recover mbr

ディスクまたはボリュームのバックアップから MBR を復元します。

バックアップされたのと同じコンピュータで MBR を修復するには、このコマンドを使用します。別のハードウェアに移行するときは、`recover disk` 『22ページ』 コマンドを `--disk` パラメータ (MBR は自動的に復元されます) または `--volume`、`--mbr_disk`、および `--target_mbr_disk` パラメータを使用します。

例 『128ページ』

パラメータ

復元元

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』
```



```
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』  
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』  
--disk=<ディスク番号> 『88ページ』
```

復元先

```
--target_disk=<disk number> 『113ページ』
```

復元オプション

```
--force_yes 『124ページ』  
--reboot 『127ページ』  
--reboot_after 『127ページ』  
--retry_count=<試行回数> 『123ページ』  
--retry_delay=<遅延> 『123ページ』  
--silent_mode={on|off} 『128ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.1.5 recover lvm_structure

バックアップされたシステム内のものと同じ論理ボリューム構造を、指定したコンピュータ上に作成します。論理ボリューム構造が異なる、または論理ボリュームがないコンピュータに対して、Linux システムおよびそのソフトウェア RAID または LVM 構造を復元する場合、このコマンドを使用します。

指定したコンピュータは、Linux ベースのブータブル メディアで起動する必要があります。コマンドを実行する前に、コンピュータに、復元元のディスク以上の容量を持つディスクがあることを確認してください。このコマンドを実行してから、`recover disk` 『22ページ』 コマンドを実行します。次に、各ボリュームを復元先コンピュータ内の対応するボリュームに復元します。

注意: このコマンドを実行すると、コンピュータの現在のボリューム構造は、アーカイブに保存されたボリューム構造に置き換えられます。これにより、コンピュータのハード ディスクの一部またはすべてに現在保存されているデータが消去されます。

例 『128ページ』

パラメータ

復元元

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』  
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』
```

復元オプション

```
--force_yes 『124ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
--progress 『127ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
```

2.3.2 ファイル

このセクションに記載されているコマンドは、エージェント for Windows またはエージェント for Linux がインストールされているコンピュータで実行できます。

2.3.2.1 backup file

指定したファイルとフォルダのバックアップを作成します。

例 『132ページ』

パラメータ

バックアップの対象

```
--include=<パス> 『96ページ』  
--exclude_hidden 『93ページ』  
--exclude_mask=<マスク> 『93ページ』  
--exclude_names=<名> 『93ページ』  
--exclude_system 『93ページ』
```

バックアップの保存先

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』
```

バックアップ方法

```
--archive_comment=<コメント> 『93ページ』  
--backup_comment=<コメント> 『93ページ』  
--backuptype={full|incremental|differential} 『92ページ』  
--cleanup 『92ページ』  
--fixed_drive 『95ページ』  
--plain_archive 『97ページ』
```

バックアップ オプション

```
--cataloging={full|fast} 『98ページ』  
--compression={none|normal|high|max} 『100ページ』  
--encryption={none|aes128|aes192|aes256} 『100ページ』  
--force_yes 『124ページ』  
--hdd_speed=<速度>{kb|p} 『100ページ』  
--ignore_bad_sectors 『101ページ』  
--multi_volume_snapshot={true|false} 『102ページ』  
--network_speed=<速度>{kb|p} 『125ページ』  
--post_cmd=<コマンド> 『102ページ』  
--pre_cmd=<コマンド> 『102ページ』  
--process_priority={low|normal|high} 『126ページ』  
--reboot_after 『127ページ』  
--retry_count=<試行回数> 『123ページ』  
--retry_delay=<遅延> 『123ページ』  
--silent_mode={on|off} 『128ページ』  
--snapshot={always|possible|none} 『103ページ』  
--split=<サイズ> 『103ページ』  
--use_registry_defaults 『128ページ』  
--use_vss={none|auto|software_auto|software|hardware|acronis|native}  
『104ページ』
```

テープ管理オプション

```
--tape_eject_successful 『103ページ』  
--tape_full_empty 『103ページ』  
--tape_overwrite 『103ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
--progress 『127ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ 』
```

2.3.2.2 recover file

ファイルレベルまたはディスクレベルのバックアップからファイルとフォルダを復元します。

例 『132ページ 』

パラメータ

復元元

```
--loc=<パス> 『83ページ 』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ 』  
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ 』  
--password=<パスワード>,<encrypted> 『126ページ 』  
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ 』  
--file=<パス> 『109ページ 』  
--exclude=<ファイル、フォルダ、マスク> 『108ページ 』
```

復元先

```
--target=<パス> 『85ページ 』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ 』
```

復元方法

```
--overwrite={always|older|never} 『110ページ 』  
--recover_absolute_path 『111ページ 』  
--recover_security={true|false}
```

このパラメータは、Windows ファイルのファイルレベル バックアップから復元した場合にのみ有効です。この値が、`true` の場合またはパラメータを指定しない場合、ファイルの NTFS アクセス許可とファイル自体が復元されます。それ以外の場合、ファイルは、復元先のフォルダから NTFS アクセス許可を継承します。

```
--original_date 『109ページ 』
```

復元オプション

```
--force_yes 『124ページ 』  
--reboot 『127ページ 』  
--reboot_after 『127ページ 』  
--retry_count=<試行回数> 『123ページ 』  
--retry_delay=<遅延> 『123ページ 』  
--silent_mode={on|off} 『128ページ 』  
--use_registry_defaults 『128ページ 』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ 』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ 』  
--output={formatted|raw} 『126ページ 』
```

```
--progress 『127ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.3 仮想コンピュータ

このセクションで説明したコマンドは、エージェント for ESX(i) またはエージェント for Hyper-V がインストールされている場合のみ、Acronis Backup & Recovery 11.5 Virtual Edition で使用できます(これは `recover vm` 『32ページ』 コマンドには該当しません)。

2.3.3.1 list vmserver

指定された管理サーバー上に存在するかエージェント for ESX(i) でアクセス可能な仮想サーバーおよびサーバー クラスタを一覧表示します。

例 『133ページ』

パラメータ

```
--filter_guid=<GUID> 『119ページ』  
--filter_name=<名前> 『119ページ』  
--filter_machines=<コンピュータの台数> 『119ページ』  
--filter_type=<サーバーの種類> 『120ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディション のみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.3.2 list vms

コマンドを実行するサービスに応じて、指定された管理サーバー上に存在する仮想コンピュータ、あるいはエージェント for ESX(i) またはエージェント for Hyper-V によって管理される仮想コンピュータを一覧表示します。

例 『133ページ 』

パラメータ

```
--filter_available_for_backup={true|false} 『118ページ 』  
--filter_guid=<GUIDs> 『119ページ 』  
--filter_host=<hostnames> 『119ページ 』  
--filter_name=<names> 『119ページ 』  
--filter_state=<states> 『120ページ 』  
--filter_status=<statuses> 『120ページ 』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ 』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ 』  
--output={formatted|raw} 『126ページ 』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ 』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ 』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ 』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ 』
```

2.3.3.3 backup vm

指定した仮想コンピュータの指定したディスクおよびボリュームのバックアップを作成します。

--disk パラメータまたは --volume パラメータのどちらも指定しない場合は、コンピュータ全体がバックアップされます。

例 『133ページ 』

パラメータ

仮想コンピュータへのアクセス

```
{--vmid=<仮想コンピュータ ID>|--vmname=<仮想コンピュータ名>|--vmconfig=<パス>}  
『77ページ 』
```

バックアップする 1 つ以上の仮想コンピュータを指定することができます。--vmname パラメータは大文字/小文字が区別されます。

```
--simultaneous_backup=<number>
```

エージェント for ESX(i) またはエージェント for Hyper-V によって同時にバックアップされる仮想コンピュータの数です。指定しない場合、各エージェントによって一度に 2 つの仮想コン

コンピュータが同時にバックアップされます。コンピュータを一度に 1 つずつバックアップするには、パラメータ値を 1 に設定します。

バックアップの対象

```
--disk=<ディスク番号> 『88ページ』  
--volume=<ボリューム番号> 『89ページ』  
--exclude_hidden 『93ページ』  
--exclude_mask=<マスク> 『93ページ』  
--exclude_names=<名> 『93ページ』  
--exclude_system 『93ページ』
```

バックアップの保存先

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』
```

バックアップ方法

```
--archive_comment=<コメント> 『93ページ』  
--backup_comment=<コメント> 『93ページ』  
--backuptype={full|incremental|differential} 『92ページ』  
--cleanup 『92ページ』  
--raw 『98ページ』
```

バックアップ オプション

```
--cataloging={full|fast} 『98ページ』  
--cbt_mode={on_if_enabled|on|off} 『99ページ』  
--compression={none|normal|high|max} 『100ページ』  
--encryption={none|aes128|aes192|aes256} 『100ページ』  
--fast 『100ページ』  
--force_yes 『124ページ』  
--hdd_speed=<速度>{kb|p} 『100ページ』  
--network_speed=<速度>{kb|p} 『125ページ』  
--process_priority={low|normal|high} 『126ページ』  
--retry_count=<試行回数> 『123ページ』  
--retry_delay=<遅延> 『123ページ』  
--silent_mode={on|off} 『128ページ』  
--split=<サイズ> 『103ページ』  
--use_registry_defaults 『128ページ』
```

テープ管理オプション

```
--tape_eject_successful 『103ページ』  
--tape_full_empty 『103ページ』  
--tape_overwrite 『103ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
--progress 『127ページ』
{-f|--file_params}<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート物理コンピュータへのアクセス

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスト エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.3.4 recover vm

ディスクまたはボリュームのバックアップを新しい仮想コンピュータまたは既存の仮想コンピュータに復元します。`recover vm` コマンドは、Acronis ソフトウェアの以前のバージョンで利用可能だった `convert` コマンドを置き換えて拡張するものです。

`recover vm` コマンドは、次のエージェントで実行することができます。

- **エージェント for ESX(i)** では、ディスク(ボリューム)のバックアップを新しい ESX(i) 仮想コンピュータまたは既存の ESX(i) 仮想コンピュータに復元します。
- **エージェント for Hyper-V** では、ディスク(ボリューム)のバックアップを新しい Hyper-V 仮想コンピュータまたは既存の Hyper-V 仮想コンピュータに復元します。
- **エージェント for Windows** と **エージェント for Linux** を使用すると、ディスク(ボリューム)バックアップを、VMware Workstation、Microsoft Virtual PC、Red Hat Enterprise Virtualization、Citrix XenServer Open Virtual Appliance (OVA) のいずれかの種類の新しい仮想コンピュータに復元できます。

設定済みで使用可能なコンピュータのファイルは、選択したフォルダに保存されます。それぞれの仮想ソフトウェアを使用してコンピュータを起動するか、他の用途のためにコンピュータのファイルを準備することができます。OVA 仮想アプライアンスを XenServer にインポートできます。Virtual PC のディスクを Hyper-V 仮想コンピュータに接続することができます。

このコンピュータへの復元中は、仮想コンピュータの電源をオフにする必要があります。ESX(i) ホストまたは Hyper-V ホストに置かれている復元先のコンピュータは、確認メッセージを表示することなく電源がオフになります。正しいコンピュータを指定してください。

例 『133ページ』

パラメータ

復元元

```
--loc=<パス> 『83ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』
--password=<パスワード>,<encrypted> 『126ページ』
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』
```



```
--disk=<ディスク番号> 『88ページ』  
--volume=<ボリューム番号> 『89ページ』
```

復元先

- 既存の仮想コンピュータに復元するコマンドは次のとおりです。
`{--vmid=<仮想コンピュータ ID>|--vmname=<仮想コンピュータ名>|--vmconfig=<パス>} 『77ページ』`
- 新しい仮想コンピュータに復元するコマンドは次のとおりです。
`--vmname=<仮想コンピュータ名> 『78ページ』`
`--vmtype={vmware|virtualpc|redhat|xen} 『78ページ』`
`{--vmserver_name=<サーバー名>|--vmserver_id=<サーバー GUID>} 『78ページ』`
`--vmstorage=<パス> 『78ページ』`
`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』`
vmware、virtualpc、redhat、または xen 仮想コンピュータを作成するネットワークフォルダの資格情報です。

```
--target_disk=<ディスク番号> 『113ページ』  
--target_volume=<ボリューム番号> 『113ページ』  
--start=<オフセット>{s|kb|mb|gb} 『91ページ』  
--size=<ボリューム サイズ>{s|kb|mb|gb} 『91ページ』
```

復元方法

```
--ext2_3 『109ページ』  
--fat16_32 『109ページ』  
--preserve_mbr 『111ページ』  
--type={active|primary|logical} 『114ページ』  
--use_all_space 『114ページ』
```

復元オプション

```
--force_yes 『124ページ』  
--power_on 『111ページ』  
--retry_count=<試行回数> 『123ページ』  
--retry_delay=<遅延> 『123ページ』  
--silent_mode={on|off} 『128ページ』  
--use_registry_defaults 『128ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
--progress 『127ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.4 Microsoft Exchange

このセクションで説明するコマンドは、エージェント for Microsoft Exchange Server がインストールされているコンピュータで実行できます。

2.3.4.1 list exchange_databases

ストレージ グループ(Exchange 2003/2007 の場合)とデータベースを一覧表示します。

例 『135ページ』

パラメータ

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
--exchange_credentials=<ドメイン ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『79ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定サービスへのアクセス

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.4.2 list exchange_mailboxes

指定した Exchange データベース内のメールボックスおよびパブリック フォルダを一覧表示します。

例 『135ページ』

パラメータ

```
--mailbox_location=<パス> 『87ページ』
--filter_name=<名前> 『119ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

```
--exchange_credentials=<ドメイン ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『79ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定サービスへのアクセス

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.4.3 backup exchange_database

指定したストレージ グループ(Exchange 2003/2007 の場合)またはデータベース(Exchange 2010 以降の場合)のバックアップを作成します。

例 『135ページ』

パラメータ

バックアップの対象

```
--items=<アイテム> 『80ページ』
```

バックアップの保存先

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』
```

バックアップ方法

```
--archive_comment=<コメント> 『93ページ』  
--backup_comment=<コメント> 『93ページ』  
--backuptype={full|transaction_log} 『92ページ』  
--cleanup 『92ページ』  
--copy_only 『93ページ』  
--express 『95ページ』
```

バックアップ オプション

```
--cataloging={full|fast} 『98ページ』  
--compression={none|normal|high|max} 『100ページ』  
--encryption={none|aes128|aes192|aes256} 『100ページ』  
--force_yes 『124ページ』  
--metadata_level={{mailboxes_only|1}|{folders_and_mailboxes|2}|{all|3}} 『101ページ』  
--post_cmd=<コマンド> 『102ページ』  
--pre_cmd=<コマンド> 『102ページ』  
--retry_count=<試行回数> 『123ページ』  
--retry_delay=<遅延> 『123ページ』
```

```
--silent_mode={on|off} 『128ページ』  
--split=<サイズ> 『103ページ』  
--use_registry_defaults 『128ページ』
```

テープ管理オプション

```
--tape_eject_successful 『103ページ』  
--tape_full_empty 『103ページ』  
--tape_overwrite 『103ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
--progress 『127ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』  
--exchange_credentials=<ドメイン ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『79ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定サービスへのアクセス

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.4.4 backup exchange_mailbox

指定したメールボックスとパブリック フォルダのバックアップを作成します。

例 『135ページ』

パラメータ

バックアップの対象

```
--items=<アイテム> 『80ページ』  
--exclude_age=<日付> 『93ページ』  
--exclude_attach=<ファイルおよびマスク> 『93ページ』  
--exclude_size=<サイズ>{kb|mb|gb} 『93ページ』  
--exclude_types=<タイプ> 『93ページ』
```

バックアップの保存先

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』
```

バックアップ方法

```
--archive_comment=<コメント> 『93ページ 』
--backup_comment=<コメント> 『93ページ 』
--backuptype={full|incremental} 『92ページ 』
--cleanup 『92ページ 』
```

バックアップ オプション

```
--cataloging={full|fast} 『98ページ 』
--compression={none|normal|high|max} 『100ページ 』
--encryption={none|aes128|aes192|aes256} 『100ページ 』
--force_yes 『124ページ 』
--post_cmd=<コマンド> 『102ページ 』
--pre_cmd=<コマンド> 『102ページ 』
--retry_count=<試行回数> 『123ページ 』
--retry_delay=<遅延> 『123ページ 』
--silent_mode={on|off} 『128ページ 』
--split=<サイズ> 『103ページ 』
--use_registry_defaults 『128ページ 』
```

テープ管理オプション

```
--tape_eject_successful 『103ページ 』
--tape_full_empty 『103ページ 』
--tape_overwrite 『103ページ 』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ 』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ 』
--output={formatted|raw} 『126ページ 』
--progress 『127ページ 』
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ 』
--exchange_credentials=<ドメイン ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『79ページ 』
```

リモート コンピュータへのアクセス

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ 』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ 』
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ 』
```

コンピュータ内の特定サービスへのアクセス

```
--service={mms|ams} 『76ページ 』
```

2.3.4.5 recover exchange_database

指定したストレージ グループ(Exchange 2003/2007 の場合)またはデータベース(Exchange 2010 以降の場合)を復元します。

例 『135ページ 』

パラメータ

復元元

```
--loc=<パス> 『83ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』
--recovery_point={point_of_failure|latest_backup|point_in_time|selected_backup} 『112ページ』
--pit=<日付と時刻> 『111ページ』
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』
--items=<アイテム> 『80ページ』
```

復元先

```
--target={original|disk|another_database|recovery_database} 『85ページ』
--disk_location=<パス> 『108ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
--destination_database=<データベース> 『107ページ』
--database=<データベース名> 『105ページ』
--database_location=<ローカル パス> 『106ページ』
--log_location=<ローカル パス> 『109ページ』
```

復元方法

```
--overwrite 『110ページ』
--active_restore
```

このパラメータを指定した場合、Acronis Active Restore テクノロジーが有効になります。

復元オプション

```
--force_yes 『124ページ』
--retry_count=<試行回数> 『123ページ』
--retry_delay=<遅延> 『123ページ』
--silent_mode={on|off} 『128ページ』
--use_registry_defaults 『128ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
--progress 『127ページ』
{-f|--file_params}<フル ローカル パス> 『124ページ』
--exchange_credentials=<ドメイン ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『79ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定サービスへのアクセス

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.4.6 recover exchange_mailbox

データベースレベルまたはメールボックスレベルのバックアップから、指定したメールボックスおよびパブリック フォルダを復元します。

例 『135ページ』

パラメータ

復元元

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』  
--recovery_point={latest_backup|point_in_time|selected_backup} 『112  
ページ』  
--pit=<日付と時刻> 『111ページ』  
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』  
--items=<アイテム> 『80ページ』
```

復元先

```
--target={original|pst} 『85ページ』  
--disk_location=<ローカル パス> 『108ページ』  
--outlookmachine=<IP アドレスまたはホスト名> 『110ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
```

復元方法

```
--overwrite 『110ページ』
```

復元オプション

```
--force_yes 『124ページ』  
--retry_count=<試行回数> 『123ページ』  
--retry_delay=<遅延> 『123ページ』  
--silent_mode={on|off} 『128ページ』  
--use_registry_defaults 『128ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
--progress 『127ページ』
```

```
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』  
--exchange_credentials=<ドメイン ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『79ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定サービスへのアクセス

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.5 Microsoft SQL

このセクションで説明するコマンドは、エージェント for SQL (シングルパス) がインストールされているコンピュータで実行できます。

2.3.5.1 mssql_instances の一覧表示

Microsoft SQL Server インスタンスを一覧表示します。

例 『137ページ』

パラメータ

```
--filter_edition=<エディション> 『118ページ』  
--filter_name=<名前> 『119ページ』  
--filter_version=<バージョン> 『121ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.5.2 mssql_databases の一覧表示

指定されたインスタンスの Microsoft SQL データベースを一覧表示します。ファイルが SQL server のローカル フォルダに保存されているデータベースのみが表示されます。

例 『137ページ』

パラメータ

```
--filter_name=<名前> 『119ページ』  
--instance=<インスタンス名> 『79ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted
```

Microsoft SQL Server のアクセス認証の指定については、「SQL Server インスタンスへのアクセス」『82ページ』を参照してください。

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.5.3 recover mssql_database

指定した Microsoft SQL データベースを復元します。

例 『137ページ』

パラメータ

復元元

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』  
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』  
--items=<アイテム> 『80ページ』
```

復元先

```
--target={original|disk|another_instance} 『85ページ』  
--disk_location=<パス> 『108ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--destination_instance=<インスタンス名> 『107ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted
```

Microsoft SQL Server のアクセス認証の指定については、「SQL Server インスタンスへのアクセス」『82ページ』を参照してください。

```
--database_location=<ローカル パス> 『106ページ』
```

復元方法

```
--overwrite 『110ページ』
--autorename 『105ページ』
--database_state={recovery|norecovery|standby} 『106ページ』
--active_restore
```

このパラメータを指定した場合、Acronis Active Restore テクノロジーが有効になります。

復元オプション

```
--retry_count=<試行回数> 『123ページ』
--retry_delay=<遅延> 『123ページ』
--silent_mode={on|off} 『128ページ』
--use_registry_defaults 『128ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
--progress 『127ページ』
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定サービスへのアクセス

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.3.6 Microsoft Active Directory

2.3.6.1 recover ad_database

Microsoft Active Directory データベース ファイルと SYSVOL フォルダを、シングル パス バックアップからローカルまたはネットワーク フォルダに抽出します。ファイルのフル パスが再作成されます。

抽出したファイルの処理の詳細については、製品のヘルプまたはユーザー ガイドの「シングル パス バックアップからの Active Directory データの復元」を参照してください。

例 『138ページ』

パラメータ

復元元

```
--loc=<パス> 『83ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』
```

```
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』  
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』
```

復元先

```
--target= 『85ページ』<パス>  
--cr 『108ページ』redentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted
```

復元方法 『123ページ』

```
--overwrite={always|older|never} 『110ページ』  
--original_date 『109ページ』
```

復元オプション

```
--force_yes 『124ページ』  
--retry_count=<試行回数> 『123ページ』  
--retry_delay=<遅延> 『123ページ』  
--silent_mode={on|off} 『128ページ』  
--use_registry_defaults 『128ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
--progress 『127ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定サービスへのアクセス

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.4 アーカイブおよびバックアップの操作

2.4.1 アーカイブ

2.4.1.1 list archives

特定の場所にあるアーカイブに関する情報を一覧表示します。表示されるレコードは日付の降順で並べ替えられます。

例 『138ページ』

パラメータ

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--filter_type=<タイプ> 『120ページ』  
{-a|--all}
```

パラメータを指定すると、各アーカイブについて GUID、名前、種類、作成日付、アーカイブが作成されたコンピュータ、所有者(アーカイブを保存先に保存したユーザー)、使用領域(バイト)のプロパティが表示されます。指定しない場合は、各アーカイブの名前、種類、作成日付のみが表示されます。

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ』
```

管理対象の格納域(--loc=bsp://<storage node>/<vault name>)では、操作は常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを `asn` に転送します。

2.4.1.2 export archive

--arc パラメータで指定されたアーカイブを --loc パラメータで指定されたロケーションから
--target パラメータで指定されたロケーションへコピーします。

個別のバックアップをエクスポートするには、`export backup` 『50ページ』 コマンドを使用します。

--arc パラメータが指定されていない場合は、エクスポート元に保存されているすべてのアーカイブがエクスポートされます。

エクスポート先には常に新しいアーカイブが作成されます。--target_arc パラメータでは、既存のアーカイブを指定することはできません。

たとえば、このコマンドを使用して、アーカイブを集中管理格納域にインポートしたり、格納域全体を別のロケーションにエクスポートしたりできます。詳細については、次の例を参照してください。

例 『138ページ』

パラメータ

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』
```

```
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』
--target=<パス> 『85ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
--target_arc=<アーカイブ名> 『87ページ』
--cataloging={full|fast} 『98ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
--progress 『127ページ』
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ』
```

管理対象の格納域(--loc=bsp://<storage node>/<vault name>)からのアーカイブのエクスポートは、常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを `asn` に転送します。

2.4.1.3 validate archive

アーカイブ データの整合性をベリファイします。

例 『138ページ』

パラメータ

```
--loc=<パス> 『83ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』
--network_speed=<速度>{kb|p} 『125ページ』
--process_priority={low|normal|high} 『126ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
--progress 『127ページ』
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスト エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ』
```

管理対象の格納域(--loc=bsp://<storage node>/<vault name>)では、操作は常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを `asn` に転送します。

2.4.1.4 アーカイブのカタログ化

指定したアーカイブ内のすべてのバックアップの完全なカタログ化を実行します。

使用に関するヒント:バックアップの速度を向上させるために、`--cataloging=fast` パラメータをバックアップ コマンドに追加して完全なカタログ化を行わないようにすることができます。後で完全なカタログ化を実行するには、`catalog backup` 『49ページ』、`catalog archive` 『46ページ』、または `catalog vault` 『65ページ』 コマンドを使用します。

例 『138ページ』

パラメータ

```
--loc=<パス> 『83ページ』
```

このコマンドは、Acronis Online Backup Storage、暗号化された管理対象格納域、CD、DVD、BD、Iomega REV、RDX、USB デバイスなどのリムーバブル メディアといったロケーションはサポートしません。

```
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』
```

このコマンドは、暗号化され、パスワードで保護されたアーカイブ、Acronis True Image Echo 以前の製品バージョンを使用して作成されたアーカイブ、および簡易バックアップ ファイル名 『97ページ』を使用しているアーカイブはサポートしません。

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
--progress 『127ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスト エディション のみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスト エディション のみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ』
```

管理対象の格納域(--loc=bsp://<storage node>/<vault name>)では、操作は常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを asn に転送します。

2.4.1.5 delete archive

アーカイブを削除します。

例『138ページ』

パラメータ

```
--loc=<パス>『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted『123ページ』  
--arc=<アーカイブ名>『83ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス>『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured}『124ページ』  
--output={formatted|raw}『126ページ』  
--progress『127ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス>『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名>『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名>『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn}『76ページ』
```

管理対象の格納域(--loc=bsp://<storage node>/<vault name>)では、操作は常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを asn に転送します。

2.4.2 バックアップ

2.4.2.1 list backups

指定されたアーカイブ内のバックアップを一覧表示します。表示されるレコードは日付の降順で並べ替えられます。

例『140ページ』

パラメータ

```
--loc=<パス>『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted『123ページ』  
--arc=<アーカイブ名>『83ページ』  
--password=<パスワード>,encrypted『126ページ』
```

```
--filter_date=<日付と時刻> 『118ページ』  
--filter_type=<タイプ> 『120ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ』
```

管理対象の格納域(--loc=bsp://<storage node>/<vault name>)では、操作は常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを `asn` に転送します。

2.4.2.2 list content

バックアップの内容(バックアップされたディスク、ボリューム、ファイル、仮想コンピュータ、データベースなど)を一覧表示します。

例 『140ページ』

パラメータ

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』  
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』  
--content_type={volume|file|exchange_database|exchange_mailbox|mssql_database|ad_database} 『117ページ』  
--content_path=<パス> 『117ページ』  
--oss_numbers={true|false} 『125ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)


```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスト エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ』
```

管理対象の格納域(--loc=bsp://<storage node>/<vault name>)では、操作は常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを asn に転送します。

2.4.2.3 validate backup

バックアップ データの整合性をベリファイします。

例 『140ページ』

パラメータ

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』  
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』  
--network_speed=<速度>{kb|p} 『125ページ』  
--process_priority={low|normal|high} 『126ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
--progress 『127ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスト エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスト エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ』
```

管理対象の格納域(--loc=bsp://<storage node>/<vault name>)では、操作は常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを asn に転送します。

2.4.2.4 バックアップのカタログ化

指定されたバックアップの完全なカタログ化を実行します。

使用に関するヒント:バックアップの速度を向上させるために、`--cataloging=fast` パラメータをバックアップ コマンドに追加して完全なカタログ化を行わないようにすることができます。後で完全なカタログ化を実行するには、`catalog backup` 『49ページ』、`catalog archive` 『46ページ』、または `catalog vault` 『65ページ』 コマンドを使用します。

例 『140ページ』

パラメータ

`--loc=<path>` 『83ページ』

このコマンドは、Acronis Online Backup Storage、暗号化された管理対象格納域、CD、DVD、BD、Iomega REV、RDX、USB デバイスなどのリムーバブル メディアといったロケーションはサポートしません。

`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted` 『123ページ』

`--arc=<アーカイブ名>` 『83ページ』

このコマンドは、暗号化され、パスワードで保護されたアーカイブ、Acronis True Image Echo 以前の製品バージョンを使用して作成されたアーカイブ、および簡易バックアップ ファイル名 『97ページ』を使用しているアーカイブはサポートしません。

`--backup=<backup ID>` 『85ページ』

一般的なパラメータ

`--log=<フル パス>` 『124ページ』

`--log_format={structured|unstructured}` 『124ページ』

`--output={formatted|raw}` 『126ページ』

`--progress` 『127ページ』

`{-f|--file_params}=<フル ローカル パス>` 『124ページ』

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

`--host=<IP アドレスまたはホスト名>` 『76ページ』

`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted` 『123ページ』

`--address=<IP アドレスまたはホスト名>` 『76ページ』

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

`--service={mms|ams|asn}` 『76ページ』

管理対象の格納域(`--loc=bsp://<storage node>/<vault name>`)では、操作は常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを `asn` に転送します。

2.4.2.5 export backup

`--arc` パラメータで指定されたアーカイブを `--loc` パラメータで指定されたロケーションから

`--target` パラメータで指定されたロケーションへコピーします。コピーに含まれるのは、

`--backup` パラメータで指定されたバックアップだけです。

アーカイブ全体または 1 つのロケーションに保存されているすべてのアーカイブをエクスポートするには、`export archive` 『44ページ』 コマンドを使用します。

エクスポート先には常に新しいアーカイブが作成されます。`--target_arc` パラメータでは、既存のアーカイブを指定することはできません。`--target` および `--target_arc` パラメータは両方とも必須です。

`--backup` パラメータを指定しないと、コマンドは前回のバックアップにエクスポートされます。

例『140ページ』

パラメータ

```
--loc=<パス> 『83ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』
--password=<パスワード>,<encrypted> 『126ページ』
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』
--target=<パス> 『85ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』
--target_arc=<アーカイブ名> 『87ページ』
--cataloging={full|fast} 『98ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
--progress 『127ページ』
{-f|--file_params}<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ』
```

管理対象の格納域(`--loc=bsp://<storage node>/<vault name>`)からのバックアップのエクスポートは、常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを `asn` に転送します。

2.4.2.6 バックアップのレプリケート

指定したアーカイブの最新バックアップを別の場所にレプリケートします。`--backup` パラメータが指定されている場合、指定されたバックアップがレプリケートされます。ターゲットの場所がソースの場所と同じである場合、コマンドの実行が失敗します。

ターゲット アーカイブが存在する場合は、それに指定したバックアップが追加されます。つまり、ターゲット アーカイブに同じ GUID のバックアップが含まれている場合は、バックアップはレプリケートされません。

このコマンドを使用して、バックアップの直後またはスケジュールに従って、アーカイブの各バックアップを 2 番目の場所にレプリケートできます。この方法は、別の場所にコピーを保持することで、アーカイブの信頼性を高めるために役立ちます。

例 『140ページ 』

パラメータ

```
--loc=<パス> 『83ページ 』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ 』
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ 』
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ 』
--target=<パス> 『85ページ 』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ 』
--target_arc=<アーカイブ名> 『87ページ 』
--backup={<バックアップ ID>|all} 『85ページ 』
```

値が `all` の場合、指定したアーカイブのすべてのバックアップが選択されてレプリケートされます。

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ 』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ 』
--output={formatted|raw} 『126ページ 』
--progress 『127ページ 』
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ 』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ 』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ 』
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ 』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ 』
```

管理対象の格納域(--loc=bsp://<storage node>/<vault name>)からのバックアップのレプリケートは、常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを `asn` に転送します。

2.4.2.7 convert full

増分バックアップまたは差分バックアップを完全バックアップに変換します。バックアップのタイム スタンプは変更されません。依存する増分バックアップおよび差分バックアップも更新されます。ただし、古いバックアップ バージョンは新しいバージョンが作成された後にのみ削除されます。そのため、保存先に古いバージョンと新しいバージョンの両方を一時的に保存するための十分な領域が必要です。

例 『140ページ 』

パラメータ

`--loc=<パス> 『83ページ』`

このコマンドでは、Acronis Online Backup Storage、テープ、および CD/DVD はサポートされません。

`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』`

`--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』`

このコマンドは、簡易バックアップ ファイル名 『97ページ』を使用するアーカイブと Microsoft Exchange Server データ 『34ページ』のアーカイブはサポートしません。

`--password=<パスワード>,<encrypted> 『126ページ』`

`--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』`

一般的なパラメータ

`--log=<フル パス> 『124ページ』`

`--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』`

`--output={formatted|raw} 『126ページ』`

`--progress 『127ページ』`

`{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』`

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディション のみ)

`--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』`

`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』`

`--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』`

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディション のみ)

`--service={mms|ams|asn} 『76ページ』`

管理対象の格納域(`--loc=bsp://<storage node>/<vault name>`)では、操作は常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを `asn` に転送します。

2.4.2.8 consolidate backup

`--backup` パラメータに指定されたバックアップのみを保持するように、アーカイブを変更します。アーカイブのその他の全バックアップは削除されます。

`--backup` パラメータが指定されていない場合、アーカイブの最新のバックアップのみが保持されます。結果として、アーカイブには 1 つのバックアップのみが含まれます。

例 『140ページ』

パラメータ

`--loc=<path> 『83ページ』`

コマンドは、次の場所をサポートしません。Acronis Backup & Recovery 11.5 ストレージ ノード。

`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』`

`--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』`

```
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』  
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
--progress 『127ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.4.2.9 delete backup

選択されたバックアップをアーカイブから削除します。増分バックアップまたは差分バックアップが削除するバックアップに依存している場合は、統合が実行されます。統合は、時間とリソースを多く消費する場合があります。

例 『140ページ』

パラメータ

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』  
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
--progress 『127ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ』
```

管理対象の格納域(--loc=bsp://<storage node>/<vault name>)では、操作は常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを asn に転送します。

2.4.3 マウント

ディスクレベルのバックアップからボリュームをマウントすると、物理ディスクと同様にボリュームにアクセスできます。

2.4.3.1 list mounts

バックアップからマウントされたボリュームを一覧表示します。

例『142ページ』

パラメータ

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.4.3.2 mount

指定したボリュームをバックアップからエージェント for Windows またはエージェント for Linux がインストールされているシステムにマウントします。

制限事項: マウントできるのは、ローカル/共有フォルダまたは Acronis セキュア ゾーン に保存されているバックアップだけです。

例『142ページ』

パラメータ

マウント対象

```
--loc=<パス> 『83ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』
--password=<パスワード>,<encrypted> 『126ページ』
```

```
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』  
--volume=<ボリューム番号> 『89ページ』
```

マウント方法(エージェント for Windows のみ)

```
--rw 『115ページ』  
--letter=<文字> 『115ページ』
```

マウント方法(エージェント for Linux のみ)

```
--rw 『115ページ』  
--mount_point=<マウント ポイント> 『115ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.4.3.3 umount

指定されたドライブ文字のボリュームをマウント解除します(エージェント for Windows のみ)。

マウント ポイントにマウントされているデバイスをマウント解除し、カーネル空間ブロック デバイスを破棄してユーザー空間デーモンを停止します(エージェント for Linux のみ)。

例 『142ページ』

パラメータ

```
--letter={<文字>|all} 『115ページ』(エージェント for Windows のみ)  
--mount_point=<マウント ポイント> 『115ページ』(エージェント for Linux のみ)
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)


```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスト エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.4.4 SQL データベースのマウント

このセクションで説明するコマンドは、エージェント for SQL (シングルパス) がインストールされているコンピュータで実行できます。

2.4.4.1 mssql_mounts の一覧表示

シングルパス バックアップからマウントされた Microsoft SQL データベースを一覧表示します。

例 『142ページ』

パラメータ

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスト エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスト エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.4.4.2 mssql_database のマウント

指定された Microsoft SQL Server インスタンスへのバックアップから、指定された Microsoft SQL データベースをマウントします。

制限事項: マウントできるのは、ローカル/共有フォルダまたは Acronis セキュア ゾーンに保存されているバックアップだけです。

例 『142ページ』

パラメータ

マウント対象

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted 『123ページ』
```

```
--arc=<アーカイブ名> 『83ページ』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ』  
--backup=<バックアップ ID> 『85ページ』  
--items=<アイテム> 『80ページ』
```

マウントする場所

```
--destination_instance=<インスタンス名> 『107ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted
```

Microsoft SQL Server のアクセス認証の指定については、「SQL Server インスタンスへのアクセス」『82ページ』を参照してください。

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.4.4.3 umount mssql_database

指定した Microsoft SQL データベースのマウントを解除します。

例 『142ページ』

パラメータ

```
--items=<アイテム> 『80ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.5 Acronis セキュア ゾーンの操作

Acronis セキュア ゾーンは、管理対象のコンピュータ内のバックアップ アーカイブを保存する安全なボリュームです。

2.5.1 create asz

選択したディスクに Acronis セキュア ゾーン を作成します。コマンドは、まずそのディスク上の未割り当て領域を使用し、その後、未割り当て領域が不足している場合、選択されたボリュームから空き領域を取得します。

例 『143ページ 』

パラメータ

```
--disk=<ディスク番号> 『88ページ 』  
--volume={<ボリューム番号>|all} 『89ページ 』  
--oss_numbers={true|false} 『125ページ 』  
--asz_size={<サイズ>{s|kb|mb|gb}|unallocated} 『116ページ 』  
--password=<パスワード>,encrypted 『126ページ 』  
--reboot 『127ページ 』  
--later 『127ページ 』  
--silent_mode={on|off} 『128ページ 』  
--force_yes 『124ページ 』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ 』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ 』  
--output={formatted|raw} 『126ページ 』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ 』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ 』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ 』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ 』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディション のみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ 』
```

2.5.2 resize asz

Acronis セキュア ゾーン のサイズを変更し、変更後のサイズと空き領域を表示します。

--asz_size パラメータが指定されていない場合、現在の Acronis セキュア ゾーン のサイズと空き領域が表示されます。

例 『143ページ 』

パラメータ

```
--asz_size=<サイズ>{s|kb|mb|gb}|unallocated} 『116ページ』  
--volume=<ボリューム番号>|all} 『89ページ』  
--oss_numbers={true|false} 『125ページ』  
--size_measure={s|kb|mb|gb}
```

コマンド出力での Acronis セキュア ゾーン のサイズと空き領域の単位。指定しない場合は、値は `mb` になります。

```
--reboot 『127ページ』  
--later 『127ページ』  
--silent_mode={on|off} 『128ページ』  
--force_yes 『124ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディション のみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.5.3 cleanup asz

停電または他の理由で破損したバックアップを Acronis セキュア ゾーン から削除します。

例 『143ページ』

パラメータ

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.5.4 delete asz_files

Acronis セキュア ゾーン で、アーカイブの最新のバックアップを削除します。指定したアーカイブに 1 つのバックアップのみが含まれている場合、このようなバックアップは削除されません。

例 『143ページ 』

パラメータ

`--credentials=<password>,encrypted` 『123ページ 』

Acronis セキュア ゾーン のパスワード。

`--arc=<アーカイブ名>` 『83ページ 』

`--password=<パスワード>,encrypted` 『126ページ 』

アーカイブのパスワード。

`--force_yes` 『124ページ 』

一般的なパラメータ

`--log=<フル パス>` 『124ページ 』

`--log_format={structured|unstructured}` 『124ページ 』

`--output={formatted|raw}` 『126ページ 』

`--progress` 『127ページ 』

`{-f|--file_params}=<フル ローカル パス>` 『124ページ 』

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

`--host=<IP アドレスまたはホスト名>` 『76ページ 』

`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted` 『123ページ 』

`--address=<IP アドレスまたはホスト名>` 『76ページ 』

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

`--service={mms|ams}` 『76ページ 』

2.5.5 delete asz

Acronis セキュア ゾーン を削除します。

例 『143ページ 』

パラメータ

`--volume=<ボリューム番号>` 『89ページ 』

`--oss_numbers={true|false}` 『125ページ 』

`--silent_mode={on|off}` 『128ページ 』

`--force_yes` 『124ページ 』

一般的なパラメータ

`--log=<フル パス>` 『124ページ 』

`--log_format={structured|unstructured}` 『124ページ 』

```
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.6 Acronis Startup Recovery Manager の操作

Acronis Startup Recovery Manager は、起動時に [F11] キーを押すと起動できるブータブル レスキュー ユーティリティです。

2.6.1 activate asrm

Acronis Startup Recovery Manager をアクティブ化します。

例 『144ページ』

パラメータ

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.6.2 deactivate asrm

Acronis Startup Recovery Manager を非アクティブ化します。

例 『144ページ』

パラメータ

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.7 テープの操作

2.7.1 list tape_libraries

Acronis Backup & Recovery 11.5 エージェントまたは Acronis Backup & Recovery 11.5 ストレージ ノードが実行されているコンピュータに接続されているテープ ライブラリのドライブおよびスタンダード テープ ドライブを一覧表示します。

例 『144ページ』

パラメータ

```
--filter_guid=<GUIDs> 『119ページ』  
--filter_name=<名> 『119ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ』
```

2.7.2 list tape_slots

Acronis Backup & Recovery 11.5 エージェント、または Acronis Backup & Recovery 11.5 Storage Node が実行されているコンピュータに接続されているテープ ライブラリのスロットを一覧表示します。各スロットには、名前、GUID、タイプ(メール スロットの場合は `mail`、ドライブの場合は

は `drive`、その他のスロットについては `storage`）、そのスロットに入っているテープがあれば、そのバーコードとラベル、テープ ライブラリの GUID などの情報が表示されます。

例 『144ページ 』

パラメータ

`--filter_library=<GUID>` 『119ページ 』

一般的なパラメータ

`--log=<フル パス>` 『124ページ 』
`--log_format={structured|unstructured}` 『124ページ 』
`--output={formatted|raw}` 『126ページ 』
`{-f|--file_params}=<フル ローカル パス>` 『124ページ 』

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

`--host=<IP アドレスまたはホスト名>` 『76ページ 』
`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted>` 『123ページ 』
`--address=<IP アドレスまたはホスト名>` 『76ページ 』

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

`--service={mms|ams|asn}` 『76ページ 』

2.7.3 inventory tape

テープ デバイスにロードされているテープが検出され、名前が付いていないテープに名前が割り当てられます。このコマンドは、テープ デバイスのスロットにテープをロードするたびに実行してください。

例 『144ページ 』

パラメータ

`--mode={full|fast}` 『122ページ 』
`--libraries=<GUIDs>` 『121ページ 』
`--slots=<GUIDs>` 『122ページ 』
`--assign2free` 『121ページ 』

一般的なパラメータ

`--log=<フル パス>` 『124ページ 』
`--log_format={structured|unstructured}` 『124ページ 』
`--output={formatted|raw}` 『126ページ 』
`{-f|--file_params}=<フル ローカル パス>` 『124ページ 』

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

`--host=<IP アドレスまたはホスト名>` 『76ページ 』
`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted>` 『123ページ 』
`--address=<IP アドレスまたはホスト名>` 『76ページ 』

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

`--service={mms|ams|asn}` 『76ページ 』

2.8 格納域の操作

2.8.1 validate vault

パスワードで保護されたアーカイブを除く、指定したロケーションにあるすべてのアーカイブのデータの整合性をベリファイします。パスワードで保護されたアーカイブをベリファイするには、`validate archive` 『45ページ』 コマンドを使用します。

例 『145ページ』

パラメータ

```
--loc=<パス> 『83ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--network_speed=<速度>{kb|p} 『125ページ』  
--process_priority={low|normal|high} 『126ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
--progress 『127ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ』
```

管理対象の格納域(`--loc=bsp://<storage node>/<vault name>`)では、操作は常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを `asn` に転送します。

2.8.2 格納域のカタログ化

指定したロケーションに保存されているバックアップの完全なカタログ化を実行します。

次のバックアップはデータ カタログでサポートされていないのでスキップされます。

- 暗号化され、パスワードで保護されたアーカイブに含まれるバックアップ。
- Acronis True Image Echo 以前の製品バージョンを使用して作成されたバックアップ。
- 簡易バックアップ ファイル名 『97ページ』が付けられたバックアップ。

使用に関するヒント: バックアップの速度を向上させるために、`--cataloging=fast` パラメータをバックアップ コマンドに追加して完全なカタログ化を行わないようにすることができます。後で完全なカタログ化を実行するには、`catalog backup` 『49ページ』、`catalog archive` 『46ページ』、または `catalog vault` 『65ページ』 コマンドを使用します。

例 『145ページ』

パラメータ

`--loc=<パス>` 『83ページ』

このコマンドは、Acronis Online Backup Storage、暗号化された管理対象格納域、CD、DVD、BD、Iomega REV、RDX、USB デバイスなどのリムーバブル メディアといったロケーションはサポートしません。

`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted` 『123ページ』

一般的なパラメータ

`--log=<フル パス>` 『124ページ』
`--log_format={structured|unstructured}` 『124ページ』
`--output={formatted|raw}` 『126ページ』
`--progress` 『127ページ』
`{-f|--file_params}=<フル ローカル パス>` 『124ページ』

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディション のみ)

`--host=<IP アドレスまたはホスト名>` 『76ページ』
`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted` 『123ページ』
`--address=<IP アドレスまたはホスト名>` 『76ページ』

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディション のみ)

`--service={mms|ams|asn}` 『76ページ』

管理対象の格納域(`--loc=bsp://<storage node>/<vault name>`)では、操作は常にストレージ ノード サービスによって実行されます。別のサービスを指定すると、そのサービスがコマンドを `asn` に転送します。

2.9 ディスクの操作

2.9.1 ディスクのクローン作成

ハードディスクのクローンを作成します。すべてのソース ディスク データをターゲット ディスクに転送する必要がある場合は、この操作を実行します。

このソフトウェアによって、ソース ディスクのボリュームのサイズが変更されることはありません。そのため、ターゲット ディスクの容量はソース ディスクより大きくする必要があります。ターゲット ディスクの容量がソース ディスクより小さいと、コマンドは失敗します。

例 『146ページ』

パラメータ

`--source=<source disk number>`

ソース ディスクの個数。

`--target=<target disk number>`

ターゲット ディスクの個数。

```
--reboot 『127ページ』
--reboot_after 『127ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
--progress 『127ページ』
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.10 管理の操作

2.10.1 情報の収集

2.10.1.1 get log

指定した GUID のアクティビティのログを Acronis xml 形式でエクスポートします。アクティビティの GUID を調べるには、`list activities` 『68ページ』 コマンドを使用します。

例 『146ページ』

パラメータ

```
--id=<GUID> 『124ページ』
--loc=<フル パス> 『83ページ』
```

ログのエクスポート先のファイルです。サポートされている場所は、ローカル パス、SMB、NFS、FTP、SFTP です。対象ファイルの拡張子を問わず、ソフトウェアによって Acronis xml 形式でログがエクスポートされます。

```
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスト エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ』
```

ストレージ ノード アクティビティのログを取得するには、パラメータ値として `ams` または `asn` を指定するだけです。

2.10.1.2 list activities

指定したサービス(Acronis Managed Machine Service、Acronis Backup & Recovery 11.5 管理サーバー、Acronis Backup & Recovery 11.5 ストレージ ノード)の現在および過去のアクティビティを一覧表示します。

最大、過去 5000 件のレコードを表示できます。表示されるレコードは日付の降順で並べ替えられます。

`--service` 『76ページ』 パラメータを指定しない場合、Acronis Managed Machine Service のアクティビティが一覧表示されます。

Acronis Backup & Recovery 11.5 管理サーバーについては、管理サーバーのアクティビティのみが一覧表示されます。登録済みのコンピュータ上で実行される Managed Machine Service のアクティビティは一覧に含まれません。

コンピュータの処理速度が遅すぎる場合は、このコマンドを使用して、予想以上に長い時間実行されているアクティビティを見つけることができます。これにより、ハングアップしたプロセスを検出して終了することができます。

例 『146ページ』

パラメータ

```
--filter_guid=<GUIDs> 『119ページ』  
--filter_state=<状態> 『120ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスト エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスト エディションのみ)

```
--service={mms|ams|asn} 『76ページ』
```

ストレージ ノードのアクティビティのログを一覧表示するには、パラメータ値として `ams` または `asn` を指定するだけです。

2.10.1.3 sysinfo

コンピュータのシステム情報を収集して、.zip ファイル形式で保存します。

例『146ページ』

パラメータ

`--loc=<フル パス>`『83ページ』

システム情報のファイルへのフル パスが保存されます。次の場所がサポートされています。
ローカル パス、SMB、および NFS。

`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted`『123ページ』

一般的なパラメータ

`--log=<フル パス>`『124ページ』
`--log_format={structured|unstructured}`『124ページ』
`--output={formatted|raw}`『126ページ』
`{-f|--file_params}=<フル ローカル パス>`『124ページ』

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

`--host=<IP アドレスまたはホスト名>`『76ページ』
`--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted`『123ページ』
`--address=<IP アドレスまたはホスト名>`『76ページ』

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

`--service={mms|ams|asn}`『76ページ』

複数のサービスを実行しているコンピュータのシステム情報を取得するとき、それらのサービスのいずれかを選択できます。

2.10.2 計画

2.10.2.1 list plans

管理対象のコンピュータまたは管理サーバー上に存在するバックアップ計画を一覧表示します。表示されるレコードは日付の降順で並べ替えられます。

例『147ページ』

パラメータ

`--filter_state=<状態>`『120ページ』
`--filter_status=<ステータス>`『120ページ』
`--filter_user=<ユーザー名>`『121ページ』

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.10.2.2 delete plan

指定したバックアップ計画を削除します。

例 『147ページ』

パラメータ

```
--id=<GUID> 『124ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』
--output={formatted|raw} 『126ページ』
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.10.2.3 disable plan

指定したバックアップ計画を、.xml ファイルにエクスポートします。この操作によって、バックアップ計画の完全な設定が格納されたファイルが作成されます。ファイルをインポート 『71ページ』して、別のコンピュータでエクスポートされたバックアップ計画を再使用することができます。

バックアップ計画のエクスポート ファイルは、テキスト エディタで編集することができます。パスワードは、エクスポート ファイル内で暗号化されます。

集中管理用バックアップ計画を管理サーバーからエクスポートして、管理サーバーにのみインポートできます。

例 『147ページ』

パラメータ

```
--id=<GUID> 『124ページ』  
--loc=<フル パス>
```

バックアップ計画をエクスポートするためのファイルへのフル パスです。

```
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.10.2.4 import plan

*.xml ファイルからバックアップ計画をインポートします。バックアップ計画の完全な設定が格納された XML ファイルは、`export plan` 『70ページ』 コマンドを使用して作成することができます。

集中管理されたバックアップ計画は、管理サーバーからエクスポートして、管理サーバーにのみインポートできます。

例 『147ページ』

パラメータ

```
--loc=<フル パス>
```

バックアップ計画をインポートするためのファイルへのフル パスです。

```
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ 』
```

2.10.2.5 disable plan

指定したバックアップ計画を無効化します。その結果、バックアップ計画がスケジュールに従って実行されなくなります。

例 『147ページ 』

パラメータ

```
--id=<GUID> 『124ページ 』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ 』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ 』  
--output={formatted|raw} 『126ページ 』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ 』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ 』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ 』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ 』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ 』
```

2.10.2.6 disable plan

無効化 『72ページ 』したバックアップ計画を有効化します。その結果、計画が再びスケジュールに従って実行されるようになります。

例 『147ページ 』

パラメータ

```
--id=<GUID> 『124ページ 』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ 』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ 』  
--output={formatted|raw} 『126ページ 』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ 』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ 』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ 』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ 』
```


コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.10.3 タスク

2.10.3.1 list tasks

管理対象のコンピュータまたは管理サーバー上に存在するタスクを一覧表示します。表示されるレコードは日付の降順で並べ替えられます。

例 『148ページ』

パラメータ

```
--filter_state=<状態> 『120ページ』  
--filter_user=<ユーザー名> 『121ページ』  
--filter_last_result=<last_results>
```

特定の前の実行結果を持つタスクのみを表示するには、次の 1 つ以上の値を指定します。
not_run_yet、succeeded、succeeded_with_warnings、failed または stopped。

```
--filter_plan_guid=<GUID>
```

タスクを出力するバックアップ計画の GUID です。指定されない場合は、すべてのバックアップ計画に属するタスクがリストに表示されます。

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.10.3.2 run task

指定したタスクの実行を開始します。

例 『148ページ』

パラメータ

```
--id=<GUID> 『124ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.10.3.3 stop task

指定したタスクの実行を停止します。

例 『148ページ』

パラメータ

```
--id=<GUID> 『124ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,<encrypted> 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.10.3.4 delete task

指定したタスクを削除します。

バックアップ計画に属しているタスクは、計画と別に削除することはできません。

例 『148ページ』

パラメータ

```
--id=<GUID> 『124ページ』
```

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

2.10.4 ライセンス

2.10.4.1 list licenses

コンピュータに割り当てられた Acronis Backup & Recovery 11.5 ライセンスを一覧表示します。ライセンスがライセンス サーバーに登録されている場合、エージェントはライセンス サーバーでライセンスのステータスも確認します。

例 『148ページ』

パラメータ

一般的なパラメータ

```
--log=<フル パス> 『124ページ』  
--log_format={structured|unstructured} 『124ページ』  
--output={formatted|raw} 『126ページ』  
{-f|--file_params}=<フル ローカル パス> 『124ページ』
```

リモート コンピュータへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』  
--credentials=<ユーザー名>,<パスワード>,encrypted 『123ページ』  
--address=<IP アドレスまたはホスト名> 『76ページ』
```

コンピュータ内の特定のサービスへのアクセス(アドバンスド エディションのみ)

```
--service={mms|ams} 『76ページ』
```

3 パラメータ

3.1 物理コンピュータへのアクセス

3.1.1 host

```
--host=<IP アドレスまたはホスト名>
```

Acronis サービスを実行している接続先のコンピュータを指定します。指定しない場合、コマンドライン ユーティリティによってローカル ホストに接続されます。

例:

```
--host=server1  
--host=192.168.1.2
```

3.1.2 service

```
--service={mms|ams|asn}
```

接続先の Acronis サービスを指定します。

指定しない場合、コマンドライン ユーティリティによって、エージェント サービス (Acronis Managed Machine Service、MMS) に接続されます。ストレージ ノードまたは管理サーバーに接続するには、`asn` または `ams` サービスを `--service` パラメータで明示的に指定する必要があります。このパラメータは、エージェントがそのサーバーにインストールされていない場合またはエージェントがコマンドを実行できないように設計されている場合でも必要です。

例

```
acrocmd validate archive --loc=bsp://<ストレージ ノード>/<格納域名> --arc=<アーカイブ名>
```

- このコマンドは、エージェントおよびコマンドライン ユーティリティがインストールされているコンピュータ上で実行できます。コマンドライン ユーティリティはローカル エージェントに接続します。エージェントはストレージ ノードを指定します。

```
acrocmd validate archive --loc=bsp://<ストレージ ノード>/<格納域名> --arc=<アーカイブ名>  
--host=<ストレージ ノード> --credentials=<ユーザー名>,<パスワード> --service=asn
```

- このコマンドは、コマンドライン ユーティリティのみがインストールされているコンピュータ上で実行できます。この場合、コマンドライン ユーティリティによってストレージ ノードに直接接続されます。

どちらの場合でも、ストレージ ノードによってノードの CPU リソースを使用してベリファイが実行されます。

3.1.3 address

```
--address=<IP アドレスまたはホスト名>
```

管理サーバーに登録されたコンピュータを指定します。

いくつかのコマンドは複数のコンピュータに適用することができます。これは、コンピュータのアドレスをカンマで区切ることで指定します。そのようなコマンドには、`backup disk`『20ページ』、`backup file`『26ページ』、`recover disk`『22ページ』、`recover mbr`『24ページ』、`recover file`『28ページ』、`create asz`『59ページ』、`delete asz`『61ページ』、`activate asrm`『62ページ』、`deactivate asrm`『62ページ』などがあります。操作は、指定したコンピュータ上で順番に実行されます。これらのコマンドのパラメータは、`--address=<IP アドレスまたはホスト名>` という形式で指定されます。

このパラメータを使用する場合は、管理サーバーも指定する必要があります。コンピュータのログイン情報は必要ありません。管理サーバーのログイン情報のみが必要です。

例

管理サーバーを介してコンピュータのすべてのディスクを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
acrocmd list disks --host=<ams ホスト名> --credentials=<ユーザー名>,<パスワード>
--service=ams --address=<IP アドレスまたはホスト名>
```

3.2 仮想コンピュータ

3.2.1 仮想コンピュータへのアクセス

```
{--vmid=<virtual machine ID>|--vmname=<virtual machine name>|--vmconfig=<パス>}
```

仮想コンピュータにアクセスする方法

エージェント for ESX(i) またはエージェント for Hyper-V が管理サーバーに登録されている場合は、次のように、仮想ホストを指定せずに管理サーバーから直接仮想コンピュータにアクセスすることができます。

```
--host=<ams ホスト名> --credentials=<ユーザー名>,<password> --service=ams --vmname=<仮想コンピュータ名>
```

エージェント for ESX(i) またはエージェント for Hyper-V が管理サーバーに登録されていない場合は、次のようにエージェントを実行している仮想アプライアンスまたは Windows ホストを指定します。

```
--host=<エージェントのホスト名> --credentials=<ユーザー名>,<パスワード> --vmname=<仮想コンピュータ名>
```

エージェントを実行している仮想アプライアンスまたは Windows ホストから操作する場合は、`--vmname` または `--vmid` 以外のアクセス パラメータを指定する必要はありません。

vmid

```
--vmid=<virtual machine ID>
```

仮想化ソフトウェアによって割り当てられる仮想コンピュータの一意の ID です。仮想コンピュータの ID を調べるには、`list vms`『30ページ』 コマンドを使用します。

`backup vm`『30ページ』 コマンドを使用する際、このパラメータの値を複数指定することができます。

vmname

```
--vmname=<virtual machine name>
```

仮想コンピュータ名です。このパラメータは大文字/小文字が区別されます。Acronis エージェントによって、同じ名前の複数の仮想コンピュータが検出されるとエラーが発生します(クラスタ化された Hyper-V 仮想コンピュータには該当しません)。この場合、`--vmid` または `--vmconfig` パラメータを使用します。

`backup vm` 『30ページ』 コマンドを使用する際、このパラメータの値を複数指定することができます。

vmconfig

```
--vmconfig=<パス>
```

ESX(i) サーバー上の仮想コンピュータ構成ファイルのパスです(.vmx ファイルのパス)。このパラメータを Hyper-V サーバーに対して使用することはできません。形式は次のとおりです。

```
[<storage>] <folder>/.../<フォルダ N>/<VMX ファイル名>
```

例

```
--vmconfig="[Local_storage_2] Windows 2008 R2 Dev/Windows 2008 R2 Dev.vmx"
```

`backup vm` 『30ページ』 コマンドを使用する際、このパラメータの値を複数指定することができます。

3.2.2 新しい仮想コンピュータ

vmname

```
--vmname=<virtual machine name>
```

新しい仮想コンピュータの名前です。

vmtype

```
--vmtype={vmware|virtualpc|redhat|xen}
```

新しい仮想コンピュータの種類です。このパラメータは、コンピュータが ESX(i)、Hyper-V サーバー、またはクラスタに復元される場合は不要です。

vmserver_name

```
--vmserver_name=<server name>
```

仮想コンピュータが作成される ESX(i) または Hyper-V のサーバーまたはクラスタの名前です。仮想サーバーまたはクラスタの名前を調べるには、`list vmserver`s 『29ページ』 コマンドを使用します。`--vmserver_name` および `--vmserver_id` パラメータを同時に選択することはできません。

vmserver_id

```
--vmserver_id=<server GUID>
```

仮想コンピュータが作成される ESX(i) または Hyper-V のサーバーまたはクラスタの ID です。仮想サーバーまたはクラスタの ID を調べるには、`list vmserver`s 『29ページ』 コマンドを使

用します。--vmserver_id および --vmserver_name パラメータを同時に選択することはできません。

vmstorage

```
--vmstorage=<path>
```

新しい仮想コンピュータのロケーションです。

- ローカル フォルダまたはネットワーク フォルダに vmware、virtualpc、redhat、または xen コンピュータを作成する場合は、フォルダのパスを指定します。

例:

```
--vmstorage=c:\vms
--vmstorage=\\srv1\folder1
```

- ESX(i) サーバー上に仮想コンピュータを作成する場合は、データストアの名前を指定します。

例:

```
Storage_1
```

- Hyper-V サーバー上に仮想コンピュータを作成する場合は、サーバーのローカル フォルダのパスを指定します。

例:

```
C:\ProgramData\Microsoft\Windows\Hyper-V\Virtual Machines
```

3.3 アプリケーションへのアクセス

3.3.1 exchange_credentials

```
--exchange_credentials=<ドメイン ユーザー名>,<password>,encrypted
```

Exchange Server にアクセスするためのログイン情報。このパラメータには、ドメイン ユーザーのログイン情報を指定する必要があります。ユーザー名の形式は、<DOMAIN>\<ユーザー名> または <ユーザー名>@<ドメイン> となります。ユーザーは、目的の操作を行ううえで必要な権限が与えられている必要があります。権限の詳細については、『Microsoft Exchange Server データのバックアップ』の「Exchange バックアップおよび復元の権限」セクションをご参照ください。

先に入力したパスワードが acronis_encrypt ユーティリティ『151ページ』で暗号化されていることを示すには、3 つめのパラメータ値(encrypted)を指定します。

Windows Server 2008 以降では、--exchange_credentials パラメータで指定するユーザーと、--host パラメータの後の --credentials『123ページ』パラメータで指定するユーザーは異なるユーザーにする必要があります。

例

```
--host=exch_srv --credentials=user,pass1
--exchange_credentials=domain1\exch_user1,12345
```

3.3.2 インスタンス

```
--instance=<インスタンス名>
```

このパラメータは、`list mssql_databases` 『40ページ』 コマンドで使⽤します。パラメータでは、データベースが一覧表⽰されるインスタンスを定義します。指定しなかった場合、コマンドは失敗します。

3.3.3 items

```
--items=<アイテム>
```

Microsoft Exchange Server データ アイテム

Microsoft Exchange Server データのバックアップの場合、このパラメータはバックアップまたは復元する Exchange アイテムを指定します。値の形式の詳細については、「Exchange データの指定 『81ページ』」を参照してください。

コマンド: `backup exchange_database`

`backup exchange_database` 『35ページ』 コマンドでは、パラメータ値内の各アイテムは、ストレージ グループまたはデータベースの名前です。

このパラメータを指定しない場合、Exchange Server 上のすべてのデータベースがバックアップされます。

コマンド: `recover exchange_database`

`recover exchange_database` 『37ページ』 コマンドでは、パラメータ値内の各アイテムは、ストレージ グループまたはデータベースの名前です。

`--target` 『85ページ』 パラメータ値が `another_database` または `recovery_database` である場合、`--items` パラメータには、1 つのデータベースまたはストレージ グループのみを含める必要があります。`--target` パラメータ値が `original` または `disk` である場合、複数のデータベースおよびストレージ グループを `--items` パラメータに指定できます。

このパラメータを指定しなかった場合、バックアップ内にあるすべてのデータベースが復元されます。

バックアップされたストレージ グループまたはデータベースの名前を調べるには、`list content` 『48ページ』 コマンドを使⽤します。

コマンド: `backup exchange_mailbox`

`backup exchange_mailbox` 『36ページ』 コマンドでは、パラメータ値内の各アイテムは、メールボックスまたはパブリック フォルダへのパスです。パスの末尾がデータベース名になっている場合、指定されたデータベースのすべてのメールボックスまたはパブリック フォルダがバックアップされます。

このパラメータを指定しない場合、Exchange Server のすべてのメールボックスおよびパブリック フォルダがバックアップされます。

コマンド: `recover exchange_mailbox`

`recover exchange_mailbox` 『39ページ』 コマンドでは、パラメータ値内の各アイテムは、メールボックス、パブリック フォルダ、またはサブフォルダへのバックアップ内のパスです。パスの末尾がデータベース名になっている場合、指定されたデータベースのすべてのメールボックスまたはパブリック フォルダが復元されます。

このパラメータを指定しなかった場合、バックアップ内にあるすべてのメールボックスおよびパブリック フォルダが復元されます。

バックアップ内の正確なパスを調べるには、`list content` 『48ページ』 コマンドを使用します。

Microsoft SQL Server データ アイテム

Microsoft SQL Server のシングルパス バックアップの場合、このパラメータは復元またはマウントするデータベースやインスタンスを指定します。値の形式の詳細については、「SQL データの指定 『82ページ』」を参照してください。

コマンド: `recover mssql_database, mount mssql_database`

`recover mssql_database` 『41ページ』 および `mount mssql_database` 『57ページ』 コマンドでは、パラメータ値内の各アイテムは、データベースやインスタンスへのバックアップ内のパスです。このパラメータを指定しなかった場合、コマンドは失敗します。

バックアップ データベースの名前を調べるには、`list content` 『48ページ』 コマンドを使用します。

コマンド: `umount mssql_database`

`umount mssql_database` 『58ページ』 コマンドでは、パラメータ値内の各アイテムは、マウントされたデータベースまたはインスタンスへのパスです。このパラメータを指定しなかった場合、SQL server 上でマウントされているすべてのデータベースのマウントが解除されます。

3.3.4 Exchange データの指定

Microsoft Exchange Server データベース、メールボックスおよびフォルダをバックアップするとき、またはバックアップから復元するときは、次の表記を使用してアクセスします。

データベース(Exchange 2010 以降の場合)

<データベース>

例:

```
"Mailbox Database"
```

ストレージ グループ(Exchange 2003 および 2007 の場合)

<ストレージ グループ>

例:

```
"First Storage Group"
```

メールボックスまたはパブリック フォルダ

- Exchange 2013 の場合:

- <データベース>/<メールボックス>

例:

```
"Mailbox database/John P. Smith"
```

- Exchange 2010 の場合:

- <データベース>/<メールボックス>
- <データベース>/<パブリック フォルダ>

例:

```
"Mailbox database/John P. Smith"
"Mailbox database/Folder for accountants"
```

- Exchange 2003 および 2007 の場合:
 - <ストレージ グループ>/<データベース>/<メールボックス>
 - <ストレージ グループ>/<データベース>/<パブリック フォルダ>

例:

```
"Storage group 1/Mailbox database/John P. Smith"
"Storage group 1/Mailbox database/Folder for accountants"
```

メールボックス フォルダ

- Exchange 2010 以降の場合: <データベース>/<メールボックス>/<フォルダ 1> /.../<フォルダ N> です。

例:

```
"Mailbox database/John P. Smith/Inbox/Mails from Boss"
```

- Exchange 2003 および 2007 の場合: <ストレージ グループ>/<データベース>/<メールボックス>/<フォルダ 1> /.../<フォルダ N> です。

例:

```
"Storage group 1/Mailbox database/John P. Smith/Inbox/Mails from Boss"
```

3.3.5 SQL データの指定

次の表記を使用すると Microsoft SQL Server データベースにアクセスできます。

<インスタンス>

指定したインスタンスにある、すべてのデータベース。

<インスタンス>/<データベース>

指定したインスタンスにある、指定したデータベース。

<データベース>

バックアップに 1 つのインスタンスのデータベースしかない場合は、データベース名のみを指定することもできます。

例:

```
"My Instance"
"My Instance/Accountants"
Accountants
```

3.3.6 SQL Server インスタンスへのアクセス

Acronis Backup & Recovery 11.5 は SQL Server 認証または Windows 認証を使用して Microsoft SQL Server インスタンスに接続します。

デフォルトでは、Windows 認証が使用されます。この場合、リモートのコンピュータにアクセスするために Windows へのログオン時に使用した資格情報、または `--host` 『76ページ』パラメータの後に指定した資格情報が適用されます。

SQL Server 認証はインスタンスのプロパティで有効になっている場合のみ使用できます。SQL Server 認証によりインスタンスに接続するには、`--credentials` パラメータを `--instance` パラメータまたは `--destination_instance` パラメータの後に指定します。

3.4 場所

3.4.1 loc

```
--loc=<path>
```

バックアップの場合はバックアップが作成されるロケーションへのパスです。他の操作の場合は、バックアップが保存されているロケーションのパスです。

このパスは次の形式で指定します。

ストレージの種類	形式
ローカル パス (Windows)	<code><drive>:¥<folder></code>
ローカル パス (Linux)	<code>/<ディレクトリ 1>/.../<ディレクトリ N></code>
SMB	<code>¥¥<server>¥<folder></code>
NFS	<code>nfs://<サーバー>/<共有>:<フォルダ></code>
FTP、SFTP	<code>ftp://<サーバー>/<フォルダ>/*</code> <code>sftp://<サーバー>/<フォルダ>/</code>
Acronis Backup & Recovery 11.5 ストレージ ノード	<code>bsp://<storage node>/<vault name></code>
Acronis オンライン バックアップ ストレージ (Windows のみ)	<code>online://</code>
Acronis セキュア ゾーン	<code>atis:///asz</code>
テープ	<code>atis:///tape?<ローカル接続ライブラリの GUID>**</code>

* アクティブ モードの FTP 接続を確立するには、次の表記を使用します。`aftp://<サーバー>/<フォルダ>/`

**この形式を使用すると、テープ ライブラリまたはドライブが管理対象のコンピュータに直接接続されている場合にのみアクセスすることができます。このライブラリまたはドライブの GUID を調べるには、`list tape_libraries` 『63ページ』 コマンドを使用します。

ストレージ ノードに接続されているライブラリまたはドライブの場合は、そのストレージ ノード上に集中管理用格納域を作成する必要があります。テープ ライブラリまたはドライブにアクセスするには、`bsp://<storage node>/<vault name>` の形式を使用します。

3.4.2 arc

```
--arc=<アーカイブ名>
```

アーカイブの名前です。パラメータ値は大文字/小文字が区別されます。

アーカイブへのアクセスを可能にするパラメータは、次の順序で指定する必要があります。--loc 『83ページ』、--credentials 『123ページ』(ロケーションへのアクセスが必要な場合)、--arc、--password 『126ページ』(アーカイブがパスワードで保護されている、または保護する予定である場合)。

例: --loc=¥¥bkpsrv¥backups --credentials=bkpsuser,pass
--arc=disk_archive --password=123

アーカイブ名の制限

- --plain_archive 『97ページ』 パラメータを使用する場合、または Microsoft Exchange Server データ(コマンド backup exchange_database 『35ページ』 および backup exchange_mailbox 『36ページ』)をバックアップする場合、アーカイブ名の末尾に番号を使用することができません。
- --plain_archive 『97ページ』 パラメータを使用する場合、FAT16、FAT32、および NTFS ファイル システムでは、ファイル名に次の文字を使用できません: バックスラッシュ(¥)、スラッシュ(/)、コロン(:)、アスタリスク(*)、疑問符(?)、二重引用符(")、小なり記号(<)、大なり記号(>)、パイプ(|)。

アーカイブ名での変数の使用

1 つのバックアップ コマンドで複数のコンピュータのバックアップを行う場合、すべてのコンピュータのデータが同じロケーションに保存されます。各コンピュータは別々のアーカイブにバックアップされます。アーカイブ名はそのロケーション内で一意である必要があります。一意の名前にしないと、バックアップが失敗します。

保存ロケーション内で重複しないようにするには、アーカイブ名に変数を追加します。backup vm 『30ページ』 コマンドの場合、アーカイブ名に [Virtualization Server Type] 変数と [VirtualMachineName] 変数を含める必要があります。他のバックアップ コマンドの場合は、[MachineName] 変数を使用します。

実用的または効率的と考えられる場合は、1 つのコンピュータのバックアップを行うときにもこの変数を使用することができます。

例:

--arc="[Virtualization Server Type]_[Virtual Machine Name]_archive1":
backup vm コマンドの場合
--arc=[MachineName]_archive1:backup disk および backup file コマンドの場合

バックアップ ファイル名によるアーカイブの指定

このパラメータには、--arc=my_backup2.tib のように、アーカイブに属するバックアップのファイル名でアーカイブを指定します。

この構文は、アーカイブのメタデータが失われた場合に、コマンド ラインでアーカイブにアクセスする唯一の方法です。メタデータが完全である場合、--arc パラメータはアーカイブ全体を指しています。メタデータが失われた場合、--arc パラメータは指定されたバックアップを含むバックアップチェーンを指しています。(バックアップ チェーンとは、完全バックアップと、それに依存する増分バックアップおよび差分バックアップすべてをいいます)。

バックアップを操作するコマンドでこの構文を使用する場合でも、まだ --backup 『85ページ』 パラメータを指定する必要があります。

例:

```
--arc=my_backup2.tib --backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
```

--backup パラメータが指定されていない場合、およびアーカイブのメタデータがそのままの場合、このコマンドはアーカイブの最新のバックアップに適用されます。メタデータが失われた場合、このコマンドは、指定されたバックアップを含むバックアップ チェーンの最新バックアップに適用されます。

制限事項: Acronis ストレージ ノード、Acronis Online Backup Storage、Acronis セキュア ゾーン、またはテープに保存されているバックアップのファイル名は指定できません。

3.4.3 backup

```
--backup=<バックアップ ID>
```

処理の実行対象のバックアップの ID です(たとえば、データの復元元のバックアップ)。

export backup 『50ページ』、consolidate backup 『53ページ』、および replicate backup 『51ページ』 コマンドを使用して、複数のバックアップを指定できます。

パラメータを指定しない場合、処理は前回のバックアップに適用されます。ただし、

--recovery_point 『112ページ』 パラメータ値が selected_backup の場合、recover exchange_database 『37ページ』 コマンドと recover exchange_mailbox 『39ページ』 コマンドを使用してこのパラメータの値を設定する必要があります。

3.4.4 target

コマンド: export archive、export backup、recover file、recover ad_database、replicate backup

```
--target=<パス>
```

recover file 『28ページ』 コマンドでは、このパラメータはフォルダ/ファイルの復元先のローカルまたはネットワーク フォルダを指定します(ターゲット フォルダ)。パラメータ値の形式は、--loc 『83ページ』 パラメータと同じです。--target パラメータを指定しない場合は、バックアップから元のパスが再度作成されます。

recover ad_database 『42ページ』 コマンドでは、このパラメータは Microsoft Active Directory データベースと SYSVOL フォルダの抽出先のローカルまたはネットワーク フォルダ(ターゲット フォルダ)を指定します。パラメータ値の形式は、--loc 『83ページ』 パラメータと同じです。--target パラメータを指定しない場合、コマンドは失敗します。

export archive 『44ページ』、export backup 『50ページ』、または replicate backup 『51ページ』 コマンドでは、このパラメータは、アーカイブまたはバックアップのエクスポート先、またはレプリケート先を表します。パラメータ値の形式は、--loc 『83ページ』 パラメータと同じですが、export archive および export backup コマンドでサポートされない online:// は異なります。--target パラメータを指定しない場合、コマンドは失敗します。

コマンド: recover exchange_database

```
--target={original|disk|another_database|recovery_database}
```

recover exchange_database 『37ページ』 コマンドで使用可能なパラメータの値は次のとおりです。

- **original**
 選択したデータベースまたはストレージ グループは、元のパスに復元されます。パスはバックアップから取得されます。
- **disk**
 選択したデータベースまたはストレージ グループは、トランザクション ログ ファイルとともに、ローカルまたはネットワーク フォルダに保存されます。この値を使用する場合、
`--disk_location` 『108ページ』 パラメータを指定する必要があります。必要に応じて、
`--credentials` 『123ページ』 パラメータを追加します。
- **another_database**
 選択したデータベースまたはストレージ グループは、新しいまたは既存のデータベースまたはストレージ グループに復元されます。一度に復元できるデータベースまたはストレージ グループは 1 つのみです。
 この値を使用する場合、`--destination_database` 『107ページ』 パラメータを指定する必要があります。復元先データベースが存在しない場合、`--database_location` 『106ページ』 および `--log_location` 『109ページ』 パラメータも指定します。復元先ストレージ グループが存在しない場合、復元されているストレージ グループの各データベースに `--log_location` 『109ページ』 パラメータおよび `--database` 『105ページ』 パラメータと `--database_location` 『106ページ』 パラメータのペアを指定します。
- **recovery_database**
 選択したデータベース(ストレージ グループ)がリカバリ データベース(リカバリ ストレージ グループ)に復元されます。一度に復元できるデータベースまたはストレージ グループは 1 つのみです。
 データベースを復元する場合、`--database_location` 『106ページ』 パラメータと `--log_location` 『109ページ』 パラメータを指定する必要があります。
 ストレージ グループを復元する場合、このストレージ グループ内の各データベースに `--database` 『105ページ』 パラメータと `--database_location` 『106ページ』 パラメータのペアを指定する必要があります。復元先リカバリ ストレージ グループが存在しない場合、`--log_location` 『109ページ』 パラメータも指定します。

このパラメータを指定しない場合、コマンドは失敗します。

コマンド: **recover exchange_mailbox**

```
--target={original|pst}
```

`recover exchange_mailbox` 『39ページ』 コマンドで使用可能なパラメータの値は次のとおりです。

- **original**
 選択したメールボックス、パブリック フォルダ、およびそのコンテンツが、コマンドが実行される Exchange サーバーに復元されます。
 Active Directory 内で有効にされた、対応するユーザー アカウントがないメールボックスは、復元中にスキップされます。
 元のメールボックスが存在しない場合、自動的に作成されません。存在しないメールボックスを復元する必要がある場合は、前もって同じアカウントに新しいメールボックスを作成しておきます。
 選択したすべてのメールボックスがスキップされた場合、コマンドは失敗します。
- **pst**

選択したメールボックス、パブリック フォルダまたはメールボックスのフォルダが、パーソナル ストレージ テーブル(.pst)ファイルに保存されます。この値を使用する場合、
`--disk_location`『108ページ』パラメータを指定する必要があります。必要に応じて、
`--credentials`『123ページ』パラメータおよび `--outlookmachine`『110ページ』
パラメータを追加します。

このパラメータを指定しない場合、コマンドは失敗します。

コマンド: `recover mssql_database`

```
--target={original|disk|another_instance}
```

`recover mssql_database`『41ページ』 コマンドで使用可能なパラメータの値は次のとおりです。

- `original`(デフォルト)
選択したデータベースは、元のパスに復元されます。パスはバックアップから取得されます。
この場合、データベースが復元される SQL Server インスタンスにアクセスするための資格情報は指定できません。そのため、インスタンスへの接続には Windows 認証が使用されます。SQL Server 認証が必要な場合は、`another_instance` の値と元のインスタンス名、元のデータベース ファイルのパス、`--credentials` パラメータを指定します。
- `disk`
選択したデータベースは、トランザクション ログ ファイルとともに、ローカルまたはネットワーク フォルダに保存されます。この値を使用する場合、`--disk_location`『108ページ』パラメータを指定する必要があります。必要に応じて、`--credentials`『123ページ』パラメータを追加します。
- `another_instance`
選択したデータベースは、指定したインスタンスに復元されます。
この値を使用する場合、`destination_instance`『107ページ』パラメータと `database_location`『106ページ』パラメータを指定する必要があります。Microsoft SQL Server のアクセス認証の指定については、「SQL Server インスタンスへのアクセス」『82ページ』を参照してください。

3.4.5 target_arc

```
--target_arc=<アーカイブ名>
```

`export archive`『44ページ』、`export backup`『50ページ』、および `replicate backup`『51ページ』 コマンドでのターゲット アーカイブの名前です。

パラメータを `export archive` コマンドまたは `export backup` コマンドで使用する場合、名前はターゲット ロケーション内で一意でなければなりません。同じ名前のアーカイブが存在する場合、またはパラメータが指定されていない場合は、コマンドの実行が失敗します。

パラメータを `replicate backup` コマンドで使用する場合、およびターゲット アーカイブが存在する場合、このコマンドはバックアップをアーカイブに追加します。それ以外の場合は、新しいアーカイブを作成します。

3.4.6 mailbox_location

```
--mailbox_location=<パス>
```

メールボックスを表示するデータベースのパスです。このパラメータは、`list exchange_mailboxes` 『34ページ』 コマンドで使⽤します。

値の形式の詳細については、「Exchange データの指定 『81ページ』」を参照してください。

このパラメータを指定しない場合、Exchange Server 上のすべてのメールボックスが表示されます。

3.5 ディスクとボリューム

3.5.1 disk

コマンド: `backup disk` および `backup vm`

`--disk=<ディスク番号>`

このパラメータは、`backup disk` 『20ページ』 コマンドおよび `backup vm` 『30ページ』 コマンドでバックアップするディスクを指定するために使⽤します。

使⽤可能なディスクおよびボリュームの番号を調べるには、`list disks` 『20ページ』 コマンドを使⽤します。

たとえば次のように、`--disk` パラメータおよび `--volume` 『89ページ』 パラメータを 1 つのコマンドラインで使⽤することができます。

`--disk=1 --volume=E`

`--disk` パラメータも `--volume` パラメータも指定しない場合、コンピュータのディスクがすべてバックアップされます。

コマンド: `recover disk`, `recover mbr`, `recover vm`, `create asz`

`--disk=<disk number>`

パラメータを使⽤するコマンド	パラメータで指定する内容	パラメータを指定しない場合の結果
<code>recover disk</code> 『22ページ』 <code>recover vm</code> 『32ページ』	バックアップから復元するデータが含まれるディスクの個数。 <code>recover disk</code> コマンドを使⽤して複数のディスクを指定できます。	<code>--volume</code> 『89ページ』 パラメータを指定すると、指定したボリュームが復元されます。それ以外の場合、このコマンドでは、バックアップされたディスクがすべて復元されます。
<code>recover mbr</code> 『24ページ』	バックアップから復元する MBR が含まれるディスクの個数。	コマンドは失敗します。
<code>create asz</code> 『59ページ』	Acronis セキュア ゾーン の作成先のディスクの個数。	コマンドは失敗します。

3.5.2 nt_signature

`--nt_signature={auto|new|backup|existing}`

NT シグネチャは、ハードディスクの MBR に保存されるレコードです。このシグネチャにより、ハードディスクがオペレーティングシステムに対して一意に識別されます。

システム ボリュームを含むディスクを復元する『22ページ』場合、ターゲット ディスクの NT シグネチャをどのように処理するかを選択できます。次のパラメータのいずれかを選択します。

- `auto` (デフォルト)
バックアップに保存されているものと同じ NT シグネチャである場合、ターゲット ディスクの NT シグネチャがそのまま保持されます (言い換えると、バックアップされた同じディスクにディスクを復元する場合)。それ以外の場合、ターゲット ディスクに対して、新しい NT シグネチャが生成されます。
- `new`
ターゲット ディスクに対して、新しい NT シグネチャが生成されます。
- `backup`
ターゲット ディスクの NT シグネチャは、バックアップにあるシグネチャで置き換えられます。
- `existing`
対象外のターゲット ディスクの NT シグネチャは、そのまま残されます。

3.5.3 volume

コマンド: `backup disk` および `backup vm`

```
--volume=<ボリューム番号>
```

このパラメータは、`backup disk` 『20ページ』 および `backup vm` 『30ページ』 コマンドでバックアップするボリュームを指定します。

次のように、ボリューム番号を `<ディスク番号>-<ボリューム番号>` の形式で指定します。

```
--volume=1-1,1-2
```

次のように、ダイナミック ボリューム (Windows) または論理ボリューム (Linux) を `DYN` プレフィックスまたはその GUID で指定します。

```
--volume=DYN1  
--volume=e6ee6edc-d1ba-11d8-813e-806e6f6e6963
```

すべてのダイナミック ボリュームまたはすべての論理ボリュームをバックアップするには、次を指定します。

```
--volume=DYN
```

次のように、ベーシック ボリュームとダイナミック ボリュームの両方をドライブ文字で指定することができます。

```
--volume=C
```

たとえば次のように、混在した表記も使用できます。

```
--volume=1-1,E,e6ee6edc-d1ba-11d8-813e-806e6f6e6963
```

ディスク番号、ボリューム番号、ボリュームのドライブ文字、および GUID を表示するには、`list disks` 『20ページ』 コマンドを使用します。GUID の全体を表示するには、`--output=raw` パラメータを追加します。

次のように、`--disk` 『88ページ』 および `--volume` パラメータを 1 つのコマンドで使用することができます。

```
--disk=1 --volume=E
```

--disk パラメータも --volume パラメータも指定しない場合、コンピュータのディスクがすべてバックアップされます。

コマンド: recover disk、recover vm、mount

```
--volume=<volume number>
```

パラメータを使用するコマンド	パラメータで指定する内容	パラメータを指定しない場合の結果
recover disk 『22ページ』 recover vm 『32ページ』	バックアップからデータを復元するボリューム。 recover disk コマンドを使用して複数のディスクを指定できます。	--disk 『88ページ』 パラメータを指定すると、指定したディスクが復元されます。それ以外の場合、このコマンドでは、バックアップされたディスクがすべて復元されます。
mount 『55ページ』	バックアップからマウントされるボリューム。複数のボリュームを指定できます。	コマンドは失敗します。

次のように、ボリューム番号を <ディスク番号>-<ボリューム番号>の形式で指定します。

```
--volume=1-1,1-2
```

次のように、ダイナミック ボリューム (Windows) または論理ボリューム (Linux) を DYN プレフィックスで指定します。

```
--volume=DYN1
```

次のように、ベーシック ボリュームとダイナミック ボリュームの両方をドライブ文字で指定することができます。

```
--volume=C
```

たとえば次のように、混在した表記も使用できます。

```
--volume=1-1,E,DYN1
```

バックアップに含まれるディスクおよびボリュームを表示するには、list content 『48ページ』 コマンドを使用します。

コマンド: create asz

```
--volume={<ボリューム番号>|all}
```

このパラメータは、create asz 『59ページ』 コマンドで、ディスクの未割り当て領域が充分でない場合に Acronis セキュア ゾーン 用の空き領域を取得するボリュームを指定する場合に使用します。空き領域は、各ボリュームのサイズに比例して分配されます。--volume=all を指定した場合、指定したディスクのすべてのボリュームから空き領域が取得されます。

このパラメータがない場合、Acronis セキュア ザーン によって未割り当て領域のみが使用されます。

コマンド:

```
--volume={<ボリューム番号>|all}
```

`resize asz` 『59ページ』 コマンドを使用して Acronis セキュア ゾーン を増やす場合、前述の `create asz` コマンドと同様に動作します。

このコマンドで Acronis セキュア ゾーン を減らす場合、このパラメータにより空き領域を追加するボリュームが指定されます。領域は各ボリュームに対して均等に分配されます。`--volume=all` を指定すると、空き容量はゾーンがあるディスクのすべてのボリュームに追加されます。`--volume` パラメータを指定しないと、空き領域は未割り当てになります。

コマンド: `delete asz`

```
--volume=<ボリューム番号>
```

`delete asz` 『61ページ』 コマンドでは、このパラメータにより Acronis セキュア ゾーン の削除後に空き領域が追加されるボリュームが指定されます。領域は各ボリュームに対して均等に分配されます。このパラメータを指定しないと、空き領域は未割り当てになります。

3.5.4 start

```
--start=<オフセット>{s|kb|mb|gb}
```

このパラメータには、復元されるボリュームの開始位置を指定します。単位を指定しなかった場合、オフセットはメガバイト(`mb`)単位で表されます。

ハード ディスクの未割り当て領域にボリュームを復元する場合は、このパラメータを `recover disk` 『22ページ』 および `recover vm` 『32ページ』 コマンドで使します。

`--start` パラメータと `--target_volume` 『113ページ』 パラメータを同時に選択することはできません。両方のパラメータを指定すると、エラーが発生します。

3.5.5 size

```
--size=<ボリューム サイズ>{s|kb|mb|gb}
```

このパラメータは、復元されるボリュームの新しいサイズを指定します。単位を指定しない場合、サイズはメガバイト(`mb`)で測定されます。

復元中にボリュームのサイズを変更する必要がある場合は、このパラメータを `recover disk` 『22ページ』 および `recover vm` 『32ページ』 コマンドで使します。

3.5.6 mbr_disk

```
--mbr_disk=<disk number>
```

バックアップからマスター ブート レコード(MBR)を復元するディスクの番号。このパラメータは、`recover disk` 『22ページ』 コマンドと使用して、ボリュームの復元に加えて、MBR を復元します。

通常、以下の場合に MBR を復元します。

- コンピュータを別のハードウェアに移行するとき。
- カスタムまたは Windows 以外のブート ローダーを復元するとき。Acronis Backup & Recovery 11.5 は、ボリュームの復元後、自動的に Windows ローダーをアップデートするため、損傷している場合を除き、MBR を復元する必要はありません。

3.5.7 target_mbr_disk

```
--target_mbr_disk=<disk number>
```

--mbr_disk 『91ページ』 パラメータで指定されたマスター ブート レコードが復元されるディスク。このパラメータは、recover disk 『22ページ』 コマンドと使用して、ボリュームの復元に加えて、MBR を復元します。このパラメータを指定しなかった場合、コマンドは失敗します。

3.6 バックアップ パラメータ

3.6.1 application_aware

```
--application_aware
```

このパラメータは、backup disk 『20ページ』 コマンドで使います。指定されている場合、指定したディスクおよびボリュームのシングルパス バックアップが作成されます。

--application_aware パラメータと --raw 『98ページ』 パラメータを同時に選択することはできません。両方のパラメータを指定すると、エラーが発生します。

3.6.2 backuptype

バックアップの種類です。指定しない場合は、値は full になります。

コマンド: backup disk、backup file、backup vm

backup disk 『20ページ』、backup file 『26ページ』、および backup vm 『30ページ』 コマンドでこのパラメータを使用する場合、次のような形式になります。

```
--backuptype={full|incremental|differential}
```

コマンド: backup exchange_database

backup exchange_database 『35ページ』 コマンドでこのパラメータを使用する場合、次のような形式になります。

```
--backuptype={full|transaction_log}
```

コマンド: backup exchange_mailbox

backup exchange_mailbox 『36ページ』 コマンドでこのパラメータを使用する場合、次のような形式になります。

```
--backuptype={full|incremental}
```

3.6.3 cleanup

```
--cleanup
```

ソフトウェアは、このパラメータを使用して古いバックアップを削除することにより、作成されるバックアップ用の領域をクリアします。このパラメータが指定されておらず、かつバックアップ先の領域が不足していた場合、手動でディスク上に空き領域を作成することを指示するメッセージが表示されます。

リムーバブル メディア モード『95ページ』で RDX ドライブまたは USB フラッシュ ドライブにバックアップを行う場合は、このパラメータは無効です。

クリーンアップ アルゴリズム

アーカイブは、バックアップ中にのみ、かつ処理を完了するための十分な領域がない場合のみクリーンアップされます。ソフトウェアは次のように動作します。

- 最も古い完全バックアップおよび依存するすべての増分/差分バックアップを削除します。
- 1 つの完全バックアップのみが残っていて、完全バックアップが進行中である場合、前回の完全バックアップと依存するすべての増分/差分バックアップを削除します。
- 1 つの完全バックアップのみが残っていて、増分バックアップまたは差分バックアップが進行中である場合は、使用可能な領域が不足していることを示すエラーが表示されます。

3.6.4 コメント

archive_comment

```
--archive_comment=<comments>
```

--arc『83ページ』パラメータで指定されたアーカイブについてのコメントです。アーカイブのコメントを表示するには、-a パラメータを `list archives`『43ページ』コマンドで実行します。

backup_comment

```
--backup_comment=<comments>
```

--backup『85ページ』パラメータで指定されたバックアップについてのコメントです。バックアップのコメントを表示するには、`list backups`『43ページ』コマンドを使用します。

3.6.5 copy_only

```
--copy_only
```

このパラメータは、`backup exchange_database`『35ページ』コマンドで、--backuptype『92ページ』パラメータ値が `full` の場合のみ使用します。

copy-only バックアップ メソッドでは、トランザクション ログ ファイルを切り捨てなくても、完全バックアップを作成することができます。このメソッドを使用すると、実行中の他のバックアップを中断せずに完全バックアップを作成できます。コピー バックアップは、テストや解析などの目的でオフサイトに簡単に保存することができます。

このパラメータを --express『95ページ』パラメータと同時に使用することはできません。

3.6.6 exclude

ディスクレベルおよびファイルレベルのバックアップ

次の 4 つのパラメータは、`backup disk`『20ページ』、`backup file`『26ページ』、および `backup vm`『30ページ』コマンドで使用します。

exclude_names

```
--exclude_names=<名>
```

バックアップから除外するファイルやフォルダの名前です。たとえば、次のようになります。

`c:¥pagefile.sys,c:¥hiberfil.sys`

`exclude_mask`

```
--exclude_mask=<マスク>
```

バックアップから除外するファイルを選択するマスクです。詳細については、`exclude` 『108ページ』 パラメータの説明を参照してください。このパラメータは、`recover file` コマンドで使われます。

`exclude_system`

```
--exclude_system
```

Windows によってサポートされているファイル システムでは、このパラメータを入力すると、システム属性が指定されたファイルおよびフォルダがスキップされます。フォルダにシステム属性が指定されている場合、フォルダの内容は(システム属性が指定されていないファイルも含めて)すべて除外されます。

`exclude_hidden`

```
--exclude_hidden
```

このパラメータを入力すると、隠しファイル属性が指定されたファイルおよびフォルダ (Windows によってサポートされているファイル システムの場合) またはピリオド(.) で始まるファイルおよびフォルダ (Ext2 や Ext3 など、Linux のファイル システムの場合) がスキップされます。フォルダが隠しファイルの場合、フォルダの内容は(隠しファイルになっていないファイルを含み) すべて除外されます。

Microsoft Exchange Server データのバックアップ

次の 4 つのパラメータは、`backup exchange_mailbox` 『36ページ』 コマンドで使われます。

`exclude_age`

```
--exclude_age=<日付>
```

このパラメータを設定した場合、指定した日時以前に作成されたすべての項目が除外されます。値の形式は "`DD.MM.YYYY HH24:MM`" です。日付のどの部分も省略できません。

このパラメータがない場合、作成日時がある項目がバックアップされます。

`exclude_attach`

```
--exclude_attach=<ファイルおよびマスク>
```

このパラメータを設定すると、指定した値に一致する名前の添付ファイルがすべて除外されます。1 つ以上のワイルドカード文字(* および ?)をファイル マスク内で使用することができます。

例:

```
--exclude_attach=Vid*.avi,App?.exe,*.mp3
```

このパラメータを指定しないと、すべての添付ファイルがバックアップされます。

`exclude_size`

```
--exclude_size=<サイズ>{kb|mb|gb}
```

このパラメータを設定すると、指定した値より大きい添付ファイルはすべて除外されます。単位を指定しない場合、サイズはメガバイト(mb)で測定されます。

このパラメータを指定しないと、すべてのサイズの項目がバックアップされます。

exclude_types

```
--exclude_types=<種類>
```

このパラメータを設定すると、指定した種類の項目がすべて除外されます。`deleted`([削除済みアイテム] フォルダが除外されます)、`sent`([送信済みアイテム] フォルダが除外されます)、または `junk`([迷惑メール] フォルダが除外されます)の値を 1 つ以上指定することができます。

例:

```
--exclude_types=deleted,junk
```

このパラメータを指定しないと、すべての種類の項目がバックアップされます。

3.6.7 express

```
--express
```

このパラメータは、`backup exchange_database` 『35ページ』 コマンドで使用します。指定すると、バックアップは高速完全バックアップ メソッドで作成されます。通常の完全データベース バックアップと比較すると、高速完全バックアップは、はるかに速く作成され、使用する容量も少なくなります。

このパラメータは、次のすべての条件が満たされた場合にのみ使用することができます。

- `--backuptype` 『92ページ』 パラメータ値が `full` になっている。
- `--loc` 『83ページ』 パラメータ値が `bsp://<ストレージ ノード>/<格納域名>` になっており、この格納域が重複除外になっている。
- このコマンドを実行するエージェント for Exchange とともに、「重複除外 for Microsoft Exchange Server」アドオンがコンピュータにインストールされている。

`--express` および `--copy_only` 『93ページ』 パラメータを同時に選択することができない。

3.6.8 fixed_drive

```
--fixed_drive
```

バックアップ コマンドでこのパラメータを使用するのは、バックアップ先(`--loc` 『83ページ』 パラメータ値)が、RDX ドライブまたは USB フラッシュ ドライブの場合だけです。

このパラメータを指定すると、デバイスは固定ドライブとして使用されます。指定しない場合、デバイスはリムーバブル メディアとして使用されます。

次の表に、2 つのモードの違いを示します。

機能	固定ドライブ	リムーバブル メディア
バックアップを継続するために十分な領域が無い場合、次のように指示されます。	手動でディスク上に空き領域を作成する。	新しいメディアを挿入する。

バックアップ ファイルの簡易名『97ページ』...	<code>--plain_archive</code> パラメータを指定しても使用できない。	<code>--plain_archive</code> パラメータを指定しなくても必ず使用される。
いくつかの完全バックアップからなるアーカイブを作成できます。	○	いいえ。新しい完全バックアップが作成される前に、アーカイブ全体が削除され、新しいアーカイブが開始されます。
<code>--cleanup</code> 『92ページ』パラメータは有効です。	はい	いいえ。アーカイブには、削除できない完全バックアップが 1 つだけ格納されます。
アーカイブ内のどのバックアップも削除『54ページ』することが可能です。	はい	いいえ。削除できるのは、依存関係のあるバックアップが存在しないバックアップだけです。

Linux では、このパラメータは、デバイスがその名前(`sdf:/` など)によって指定されている場合に有効になります。デバイスが、マウント ポイント(`/mnt/backup` など)によって指定されている場合、そのデバイスは固定ドライブとして動作します。

`backup vm`『30ページ』、`backup exchange_database`『35ページ』、または `backup exchange_mailbox`『36ページ』 コマンドを使用する場合、デバイスは、必ず固定ドライブモードで使用されます。そのため、このパラメータは無視されます。

3.6.9 ignore_app_errors

`--ignore_app_errors`

このパラメータは、`backup disk`『20ページ』 コマンドで、`--application_aware`『92ページ』 パラメータが指定されている場合に使用されます。

このパラメータは、バックアップ中にアプリケーションのメタデータの収集に失敗した場合のソフトウェアの動作を決定します。これは、たとえばデータベースが壊れている場合やアプリケーションサービスが停止している場合に起こります。

パラメータを指定しなかった場合、バックアップは失敗します。

パラメータが指定されている場合、バックアップは続行しますが、アプリケーション メタデータは無視されます。したがって、個々の SQL データベース『41ページ』または Active Directory データ『42ページ』は復元できません。ただし、ディスク、ボリューム、およびファイルの復元は引き続き行うことができます。

このパラメータは、`--application_aware` パラメータの後に指定する必要があります。

3.6.10 include

`--include=<パス>`

バックアップに含めるファイルまたはフォルダです。このパラメータは、`backup file`『26ページ』 コマンドで使用します。

3.6.11 mssql_truncate_logs

`--mssql_truncate_logs`

このパラメータは、`backup disk`『20ページ』コマンドで、`--application_aware`『92ページ』パラメータが指定されている場合にのみ使用されます。

このパラメータが指定されている場合、Microsoft SQL Server のログは、それぞれ完全バックアップ、増分バックアップ、または差分バックアップの後に切り捨てられます。バックアップ中に SQL Server のメタデータが正常に収集された場合のみ切り捨てが発生します。

SQL Server データのバックアップを行うために、SQL Server のバックアップおよび復元コンポーネントのようなサードパーティ製のアプリケーションを使用する場合は、このパラメータを指定しないでください。

3.6.12 plain_archive

`--plain_archive`

バックアップ ファイル名指定の簡略化を有効化します。

このパラメータでは、たとえば `MyData.tib` のように、アーカイブ名 (`--arc` パラメータの値) を使用して、完全バックアップを指定します。増分バックアップ、または差分バックアップの名前には、`MyData2.tib`、`MyData3.tib` のようにインデックスを付けます。新しい完全バックアップが作成される前に、アーカイブ全体が削除され、新しいアーカイブが開始されます。

このパラメータは次の場合に便利です。

- 取り外し可能なメディア上にコンピュータのポータブル イメージを作成する場合
- スクリプトを使用してバックアップを別のロケーションに移動する場合
- USB ハード ドライブを交代で使用して各ドライブに 1 つの完全バックアップを保存したり、1 週間で作成されたすべてのバックアップを保存したりする場合

このパラメータを使用しない場合、各バックアップに、正確なタイム スタンプとバックアップの種類を含む一意のファイル名が付けられます。たとえば、次のようになります。

MyData_2010_03_26_17_01_38_960D.tib。この標準ファイル名前付けにより、バックアップ保存先とバックアップ スキームの範囲が広がります。

リムーバブル デバイス『95ページ』にバックアップする場合、`--plain_archive` パラメータは不要です。`--fixed_drive` パラメータによって、標準のファイル名指定とファイル名指定の簡略化のどちらのスキームを使用するかが決定されます。

制限事項

簡易ファイル名を使用する場合は、次の機能を使用できません。

- ホストからの仮想コンピュータのバックアップ
- Microsoft Exchange Server データのバックアップ
- Acronis ストレージ ノード、Acronis オンライン バックアップ ストレージ、Acronis セキュアゾーン、またはテープへのバックアップ
- 増分バックアップまたは差分バックアップから完全バックアップへの変換

アーカイブ名の制限

- アーカイブ名の最後を数字にすることはできません。

- FAT16、FAT32、および NTFS ファイル システムでは、ファイル名に次の文字を使用できません。バックスラッシュ(¥)、スラッシュ(/)、コロン(:)、アスタリスク(*)、疑問符(?)、二重引用符(")、小なり記号(<)、大なり記号(>)、パイプ(|)。

3.6.13 raw

```
--raw
```

このパラメータは、`backup disk` 『20ページ』 および `backup vm` 『30ページ』 コマンドで使
用します。このパラメータを使うと、認識されていないファイル システムやサポートされていないファ
イル システムのディスクまたはボリュームのバックアップを作成することができます。この処理では、
セクタ単位でディスク/ボリュームのすべての内容がコピーされます。このパラメータを指定しないと、
データが格納されたセクタのみがバックアップされます。

3.6.14 バックアップ オプション

3.6.14.1 cataloging

```
--cataloging={full|fast}
```

バックアップをカタログ作成すると、バックアップの内容がデータ カタログに追加されます。データ
カタログを使用すると、GUI を使用して目的のデータ バージョンを簡単に見つけ、復元対象として
選択することができます。

カタログ化は、バックアップが作成されるかバックアップが他の格納域にエクスポートされると、必ず
実行されます。`--cataloging` パラメータを使用すれば、完全カタログ化か高速カタログ化のどち
らかを選択できます。

完全カタログ化

このパラメータの値を `full` に指定するか、値を指定しない場合、バックアップの内容は最も詳細
なレベルでカタログ化されます。つまり、カタログに次のようなデータが表示されます。

- ディスクレベルのバックアップの場合： ディスク、ボリューム、ファイル、およびフォルダです。
- ファイルレベルのバックアップの場合： ファイルおよびフォルダです。
- Exchange データベースレベルのバックアップの場合： データベースまたはストレージ グル
ープ、およびメールボックス(常に)、フォルダおよび電子メール(`--metadata_level` 『101
ページ』 パラメータの値による)。
- Exchange メールボックスレベルのバックアップの場合： メールボックス、フォルダ、および電子
メール。

高速カタログ化

完全カタログ化によって管理対象コンピュータのパフォーマンスが低下する傾向がある場合、また
はバックアップ ウィンドウが短すぎる場合、パラメータを `fast` に設定する必要があります。カタ
ログには次のようなデータが表示されます。

- ディスクレベルのバックアップの場合： ディスクとボリュームだけです。
- ファイル レベルのバックアップの場合： 何も表示されません。
- Exchange データベースレベルのバックアップの場合： データベースまたはストレージ グル
ープおよびメールボックスです。
- Exchange メールボックス レベルのバックアップの場合： メールボックスのみです。

既存のバックアップの内容全体をカタログに追加するには、適切な時間に手動で完全カタログ作成を開始します。

Virtual Edition ユーザー向けの注意: 管理対象外の格納域(ローカルに接続されているストレージを除く)にバックアップするとき、エージェント for ESX(i)(仮想アプライアンス)は常に**高速カタログ化**を実行します。

データ カatalogの制限事項

暗号化されたデータやパスワードで保護されたデータをカタログ内に含めることはできません。また、一部のストレージでは、カタログ化がサポートされていません。次の場合は、`--cataloging` パラメータは指定しないでください。

- `--encryption` 『100ページ』、`--password` 『126ページ』、または `--plain_archive` 『97ページ』 パラメータを使用している場合。
- CD、DVD、BD、アイオメガ REV ドライブ、RDX、USB デバイスなどのリムーバブル メディアにバックアップする場合。
- Acronis Online Backup Storage にバックアップする場合(`--loc=online://` 『83ページ』)。

3.6.14.2 cbt_mode

```
--cbt_mode={on_if_enabled|on|off}
```

このパラメータによって、ESX(i) 仮想コンピュータの増分バックアップまたは差分バックアップの実行時に Changed Block Tracking (CBT)を使用するかどうかを決定します。

Changed Block Tracking (ESX(i) 4.0 以降の機能)は、仮想ディスクの内容に対する変更を追跡します。これにより、バックアップが高速化され、バックアップ中におけるストレージの負荷が軽減されます。

CBT の使用は、仮想コンピュータの設定で指定します。CBT 設定パラメータは、仮想コンピュータおよびその各ディスクに対して個別に設定します。CBT 設定パラメータの設定については、VMware サポート技術情報 http://kb.vmware.com/selfservice/microsites/search.do?language=en_US&cmd=displayKC&externalId=1031873 (英語)を参照してください。

Acronis Backup & Recovery 11.5 を使用すれば、複数の設定パラメータを手動で設定することなく、複数のコンピュータ上で CBT の使用を開始できます。

使用できるパラメータ値

- `on` (デフォルト)
Acronis Backup & Recovery 11.5 が、バックアップされる個々の仮想コンピュータと、仮想コンピュータのすべてのディスクに対して CBT を自動的に有効にします。CBT 設定によって、バックアップ中の CBT の使用が決定され、バックアップが完了した後もその設定は保持されます。
- `on_if_enabled`
CBT が仮想コンピュータに対して有効になっている場合、Acronis Backup & Recovery 11.5 は、個々のディスクの CBT 設定に従って CBT を使用します。有効になっていない場合、CBT は使用されません。
仮想コンピュータのカスタム CBT 設定を保存する場合、すべてのバックアップ(完全バックアップを含む)にこの値を使用します。

- `off`
仮想コンピュータの CBT 設定に関係なく、Acronis Backup & Recovery 11.5 は CBT を使用しません。

制限事項

VMware vSphere では CBT のサポートに制限があるため、次の場合には CBT を使用することはできません。

- 仮想コンピュータのバージョンが 7 より前の場合。
- 仮想コンピュータに、Raw Device Mapping (RDM) ディスクが物理互換モードで接続されている場合。
- 仮想コンピュータに、共有仮想 SCSI バスに接続されたディスクがある場合。このディスクに対して CBT が使用できるのは、**[SCSI Bus Sharing]** が **[None]** に設定されている場合のみです。

スナップショットは VMware vSphere で CBT のサポートが制限されている機能の 1 つですが、Acronis Backup & Recovery 11.5 で CBT を使用する場合には制限されません。

3.6.14.3 compression

```
--compression={none|normal|high|max}
```

バックアップの圧縮レベルです。指定しない場合は、値は `normal` になります。

3.6.14.4 encryption

```
--encryption={none|aes128|aes192|aes256}
```

アーカイブを暗号化するためのアルゴリズムです。指定しない場合、値は `none` になります。

このパラメータを `--password` 『126ページ』 パラメータなしで使用することはできません。

3.6.14.5 fast

```
--fast
```

ファイルの変更をファイル サイズとタイム スタンプを使用して検出するか、ファイルの内容をアーカイブに保存されているファイルと比較することによって検出するかを定義します。このパラメータを使用すると、増分および差分のディスクレベル バックアップの処理速度を向上できます。

指定した場合、ファイルが最後に変更された日付/時刻とファイル サイズに基づいてファイルが変更されたか判定されます。

指定しない場合、ファイル全体の内容がアーカイブに保存されている内容と比較されます。

3.6.14.6 hdd_speed

```
--hdd_speed=<速度>{kb|p}
```

ハード ディスクにバックアップするデータの書き込み速度。

このパラメータは、バックアップ先(`--loc` 『83ページ』 パラメータ値)がバックアップ対象コンピュータの内蔵(固定)ハード ディスクである場合に使用します。その他のロケーションの場合、パラメータは無視されます。

<速度> は、正の数にする必要があります。測定単位が `kb` である場合、速度は KB/秒で測定されます。測定単位が `p` である場合、または指定されていない場合、速度は転送先ハード ディスクの最大 I/O 速度のパーセンテージとして測定されます。

パラメータが指定されていない場合、ハード ディスクの利用に制限はありません(たとえば、`--hdd_speed=100p` と入力した場合)。

例:

`--hdd_speed=500kb`: データ書き込み速度は 1 秒あたり 500 キロバイトです。
`--hdd_speed=50p` または `--hdd_speed=50`: データ書き込み速度は、最大速度の 50 % です。

3.6.14.7 ignore_bad_sectors

```
--ignore_bad_sectors
```

ユーザーによる操作なしに、急速に障害が進行しつつあるディスクをバックアップするには、このパラメータを使用します。このパラメータを指定しないと、バックアップ中に不良セクタが検出されるたびにユーザーの操作が要求されます。この動作は、サイレント モード『128ページ』が有効になっている場合でも変更されません。

3.6.14.8 metadata_level

```
--metadata_level={mailboxes_only|1}|{folders_and_mailboxes|2}|{all|3}}
```

このパラメータは、`backupexchange_database`『35ページ』コマンドで使用します。このパラメータでは、バックアップ時に収集するメタデータの量を定義します。メタデータを詳細にするほど、バックアップの作成にかかる時間は長くなります。ただし、個々の電子メールや、メールボックスに含まれているその他のアイテムについては、参照や復元をより高速に実行できるようになります。

データベースをデフォルトのパラメータ値でバックアップした場合、フォルダや個々の電子メールにアクセスするには、バックアップから直接データベースを開いて、トランザクション ログをデータベースに適用する必要があります。バックアップに含まれているトランザクション ログの数によっては、この処理にかなりの時間がかかることがあります。

個々の電子メールを参照したり復元したりできるのは、グラフィカル ユーザー インターフェイスを使用する場合に限られることに注意してください。コマンドライン インターフェイスのみを使用する場合、電子メール レベルまでメタデータを収集する意味はありません。メールボックス全体のみを復元する場合、バックアップの時間を短縮するためにデフォルト値を使用しても安全です。

使用可能なパラメータの値は次のとおりです。

- `mailboxes_only` または `1` (デフォルト)
メタデータの詳細度を最低にすると、バックアップは最も速くなります。データベースを開かない場合、メールボックスとパブリック フォルダのみにアクセスできます。
- `folders_and_mailboxes` または `2`
データベースを開かなくても、メールボックスとパブリック フォルダにある個々のフォルダにはアクセスできます。
- `all` または、`3`

メタデータの詳細度を最高にすると、バックアップの完了にかかる時間が最長になります。データベースを開かなくても、メールボックスとパブリック フォルダにある個々の電子メールとその他のアイテムにはアクセスできます。

3.6.14.9 multi_volume_snapshot

```
--multi_volume_snapshot={true|false}
```

このパラメータは、Windows オペレーティング システムの場合にのみ有効です。

このパラメータは、`backup disk` 『20ページ』 コマンドで使います。このパラメータは、`backup file` 『26ページ』 コマンドで、`--snapshot` 『103ページ』 パラメータが指定されているときにも使います。

このパラメータでは、複数のボリュームのスナップショットを同時に作成するか、または 1 つずつ作成するかを指定します。

値が `true` であるか、パラメータを指定しない場合、バックアップされているすべてのボリュームのスナップショットが同時に作成されます。複数ボリュームにまたがったデータ(たとえば Oracle データベース)のバックアップを時間的な整合性を保って作成するときなどにこのパラメータを使います。

このパラメータが `false` の場合、ボリュームのスナップショットは 1 つずつ取得されます。その結果、複数ボリュームにまたがったデータの場合、作成されるバックアップが時間的に整合性を持たない可能性があります。

3.6.14.10 処理の前後のコマンド

pre_cmd

```
--pre_cmd=<command>
```

データ取り込みの前に実行するコマンドです。パラメータ値に、目的のコマンドとそのパラメータが格納されているバッチ ファイルのパスを指定します。

バックアップされるデータのスナップショットを取得するためにデータベースまたはアプリケーションの処理を短時間一時停止するには、このパラメータを使います。データベースの一時停止中にデータの整合性が損なわれないよう、実行中のトランザクションはすべて完了されます。このパラメータを指定する場合、`--post_cmd` パラメータを指定する必要があります。

例:

```
--pre_cmd=c:¥temp¥pre_cmd.bat
```

ここでバッチ ファイルの内容は次のとおりです。

```
"net stop MSSQLSERVER"
```

post_cmd

```
--post_cmd=<command>
```

データ取り込みの後に実行するコマンドです。パラメータ値に、目的のコマンドとそのパラメータが格納されているバッチ ファイルのパスを指定します。

データの取得が完了した後にデータベースまたはアプリケーションの処理を再開するには、このパラメータを使います。

例:

```
--post_cmd=c:¥temp¥post_cmd.bat
```

ここでバッチ ファイルの内容は次のとおりです。

```
"net start MSSQLSERVER"
```

3.6.14.11 snapshot

```
--snapshot={always|possible|none}
```

直接(1 つずつ)ファイルをバックアップ『26ページ』するか、またはデータのインスタント スナップショットを作成するかを定義します。

使用可能なパラメータの値は次のとおりです。

- **possible**(デフォルト)
可能な場合はスナップショットを作成します。スナップショットを作成できない場合は、直接ファイルをバックアップします。
- **none**
スナップショットを作成しません。常に直接ファイルをバックアップします。排他アクセスで開かれているファイルをバックアップしようすると、読み取りエラーになります。また、バックアップに含まれるファイルの時間的な整合性が失われることがあります。
- **always**
常にスナップショットを作成します。スナップショットを使用すると、すべてのローカル ファイルをバックアップできます。これには、排他アクセスで開かれているファイルも含まれます。ファイルは特定の同じ時点でバックアップされます。スナップショットを作成できない場合、バックアップは失敗します。

3.6.14.12 split

```
--split=<サイズ>
```

指定した場合、バックアップが指定したサイズ(MB 単位)の複数のファイルに分割されます。指定しない場合、必要に応じてバックアップが分割されます。たとえば、リムーバブル メディアまたは最大ファイル サイズ制限がそれぞれ 2GB および 4GB の FAT16 および FAT32 ファイル システムにバックアップを保存する場合などです。

3.6.14.13 テープ管理

tape_eject_successful

```
--tape_eject_successful
```

このパラメータを指定すると、バックアップが成功するたびにテープが取り出されます。指定しない場合、テープが自動的に取り出されることはありません。

tape_full_empty

```
--tape_full_empty
```

このパラメータを指定すると、完全バックアップはそれぞれ空のテープに書き込まれます。指定しない場合、同じバックアップ チェーンまたはアーカイブのバックアップを含むテープに対してバックアップの書き込みが試みられます。テープ セットが見つからない場合、空きテープが使用されます。

tape_overwrite

```
--tape_overwrite
```

このパラメータは、スタンドアロンのテープ ドライブにのみ適用されます。このパラメータを指定すると、完全バックアップが作成されるたびにドライブに挿入されているテープが上書きされます。

3.6.14.14 use_vss

```
--use_vss={auto|software_auto|acronis|native|software|hardware|none}
```

ボリューム シャドウ コピー サービス (VSS) によって、バックアップが開始されようとしていることが VSS 対応のアプリケーションに通知されます。これにより、VSS 対応のアプリケーションによって使用されているすべてのデータの整合性が確保されます。次に、VSS によって、スナップショット プロバイダにスナップショットの作成が指示されます。VSS がスナップショットの作成に使用するスナップショット プロバイダは、選択することができます。

使用可能なパラメータの値は次のとおりです。

- **auto** (デフォルト)
VSS によって、ソース ボリュームをサポートするハードウェアベースのプロバイダが使用されます。見つからない場合、VSS は、Microsoft Software Shadow Copy Provider を使用します。
- **software_auto**
多くの場合、VSS は、Microsoft Software Shadow Copy Provider を使用します。
- **acronis**
VSS によって、スナップショットの作成に Acronis VSS プロバイダが使用されます。
- **native**
VSS によって、スナップショットの作成にシステム プロバイダ (Microsoft Software Shadow Copy Provider) が使用されます。
- **software**
VSS は、ソース ボリュームをサポートするいずれかのソフトウェアベースのプロバイダを使用します。
- **hardware**
VSS によって、ソース ボリュームをサポートするハードウェアベースのプロバイダが使用されます。ハードウェアベースのプロバイダが見つからない場合、Acronis Backup & Recovery 11.5 によってスナップショットが作成されます。
- **none**
お使いのデータベースが VSS と互換性がない場合は、この値を選択します。スナップショットが、Acronis Backup & Recovery 11.5 によって作成されます。スナップショットを高速で作成できますが、トランザクションが完了していないアプリケーションのデータは、整合性が保証されません。

3.6.14.15 vss_full_backup

```
--vss_full_backup
```

このパラメータは、**backup disk** 『20ページ』 コマンドで、**--use_vss** 『104ページ』 パラメータ値が **acronis** や **none** のいずれでもない場合に使用します。

このパラメータを指定した場合、完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップが正常に実行されると、Microsoft Exchange Server やその他の VSS 対応アプリケーション (Microsoft SQL Server を除く) のログが切り捨てられます。

次の場合はこのパラメータを指定しないでください。

- Exchange Server のデータをバックアップするために Acronis Backup & Recovery 11.5 エージェント for Microsoft Exchange Server またはサード パーティ製のソフトウェアを使用する場合。これは、ログの切り捨てにより、生成されるトランザクション ログのバックアップに影響が生じるためです。
- SQL Server のデータのバックアップのためにサード パーティ製のソフトウェアを使用する場合。サード パーティ製のソフトウェアは、生成されるディスクレベルのバックアップを、そのソフトウェアの完全バックアップに使用します。その結果、SQL Server のデータに対する次の差分バックアップが失敗します。このサード パーティ製のソフトウェアが「そのソフトウェアの」次の完全バックアップを作成するまで、バックアップの失敗が続きます。
- コンピュータ上で他の VSS 対応アプリケーションが実行されていて、何らかの理由でこのアプリケーションのログを保持する必要がある場合。

このパラメータを使用しても、Microsoft SQL Server ログの切り捨ては行われません。シングルパスのバックアップ『92ページ』の後に SQL Server のログを切り捨てる場合は、

`--mssql_truncate_logs`『96ページ』パラメータを指定します。

3.7 復元パラメータ

3.7.1 autorename

```
--autorename
```

このパラメータは、`recover mssql_database`『41ページ』コマンドで使用します。このパラメータを使用すると、復元先のインスタンスにあるデータベースと同じ名前を持つデータベースの名前を変更できるようになります。復元されたデータベースは次の名前になります。**<元のデータベース名>-Recovered**。この名前のデータベースが既に存在する場合は、復元されたデータベースの名前が次のように変更されます。**<元のデータベース名>-Recovered (シーケンス番号)**。

例: `MyDatabase-Recovered, MyDatabase-Recovered (2)`。

`--autorename` パラメータを指定しなかった場合、コマンドの実行結果は `--overwrite`『110ページ』パラメータによって異なります。`--overwrite` パラメータが存在する場合、コマンドは既存のデータベースの名前を上書きします。存在しない場合、データベースは復元中にスキップされます。

`--autorename` および `--overwrite` の両方のパラメータを指定すると、エラーが発生します。

3.7.2 database

```
--database=<db_name>
```

復元するデータベースの名前。

このパラメータは、ストレージ グループを復元する場合にのみ、`recover exchange_database`『37ページ』コマンドで使用します。

次の場合に、このパラメータが必要になります。

- `--target` 『85ページ』パラメータの値が `another_database` で、復元先のストレージグループが存在しない場合。
- `--target` パラメータの値が `recovery_database` の場合。

復元するストレージグループのデータベースごとに、1組の `--database` および `--database_location` 『106ページ』パラメータを指定する必要があります。ターゲットディスクの容量がソースディスクより小さいと、この処理は失敗します。

バックアップデータベースの名前を調べるには、`list content` 『48ページ』コマンドを使用します。

例:

```
--database=DB1 --database_location=C:\databases\DB1 --database=DB4
--database_location=D:\my_documents\DB4
```

3.7.3 database_location

```
--database_location=<ローカルパス>
```

コマンド: `recover exchange_database`

データベースの復元先にする Exchange Server 上のフォルダ。

このパラメータは、次の場合に `recover exchange_database` 『37ページ』コマンドで使用します。

- `--target` 『85ページ』パラメータの値が `another_database` で、復元先データベースまたはストレージグループが存在しない場合。
- `--target` パラメータの値が `recovery_database` の場合。

ストレージグループを復元する場合、このストレージグループのデータベースごとに、1組の `--database` 『105ページ』および `--database_location` パラメータを指定する必要があります。ターゲットディスクの容量がソースディスクより小さいと、この処理は失敗します。

例:

```
--database=DB1 --database_location=C:\databases\DB1 --database=DB4
--database_location=D:\my_documents\DB4
```

データベースを復元する場合、`--database` 『105ページ』パラメータは不要です。

コマンド: `recover mssql_database`

復元されたデータベースのファイルが書き込まれる SQL server 上のフォルダ。

このパラメータは、`recover mssql_database` 『41ページ』コマンドで、`--target` 『85ページ』パラメータ値が `another_instance` である場合に使用します。

このパラメータを指定しなかった場合、コマンドは失敗します。

3.7.4 database_state

```
--database_state={recovery|norecovery|standby}
```

復元されたデータベースの状態を指定します。このパラメータは、`recover mssql_database` 『41ページ』 コマンドで使⽤します。

使⽤可能なパラメータの値は次のとおりです。

- `recovery` (デフォルト)
復元が完了した後にデータベースが使⽤可能になります。ユーザーは復元されたデータベースに対してフル アクセス権を持ちます。トランザクション ログに保存されている、復元されたデータベースのすべてのコミットされていないトランザクションはロールバックされます。Microsoft SQL ネイティブのバックアップから追加のトランザクション ログを復元することはできません。
- `norecovery`
復元が完了した後、データベースは非稼働の状態になります。ユーザーはこのデータベースにアクセスできなくなります。復元されたデータベースのコミットされていないトランザクションはすべて保持されます。Microsoft SQL ネイティブのバックアップから追加のトランザクション ログを復元し、必要な復元ポイントにアクセスすることができるようになります。
- `standby`
復元が完了すると、ユーザーはデータベースに読み取り専用でアクセスできるようになります。コミットされていないトランザクションは取り消されます。ただし、元に戻す処理は一時スタンバイファイルに保存され、復元により何らかの影響が発生しても元に戻すことができるようになります。

`standby` 値は主に、SQL Server のエラーが発生した時点を検出するために使⽤されます。

システム データベースを復元する場合、このパラメータは無視されます。システム データベースは常に `recovery` 状態で復元されます。

3.7.5 destination_database

```
--destination_database=<データベース>
```

このパラメータは、`recover exchange_database` 『37ページ』 コマンドで、`--target` 『85ページ』 パラメータ値が `another_database` である場合に使⽤します。

このパラメータでは、`--items` 『80ページ』 パラメータに指定されたデータベースまたはストレージ グループの復元先とするデータベースまたはストレージ グループを指定します。

`--overwrite` 『110ページ』 パラメータを追加した場合にのみ、既存のデータベースまたはストレージ グループを上書きできます。指定されたデータベースまたはストレージ グループが存在しない場合、これらが作成されます。

値の形式の詳細については、「Exchange データの指定 『81ページ』」を参照してください。

このパラメータを指定しなかった場合、コマンドは失敗します。

3.7.6 destination_instance

```
--destination_instance=<インスタンス名>
```

このパラメータは次の場合に使⽤します。

- `recovermssql_database` 『41ページ』 コマンドで、`--target` 『85ページ』 パラメータ値が `another_instance` の場合のみ。
- `mount mssql_database` 『57ページ』 コマンドで使⽤する場合。

このパラメータは、`--items` 『80ページ』 パラメータで指定したデータベースが復元またはマウントされるインスタンスを指定します。

パラメータが指定されていないか、存在しないインスタンス名を入力した場合、コマンドは失敗します。

3.7.7 disk_location

```
--disk_location=<パス>
```

復元されたデータ アイテムが保存されるローカルまたはネットワークのフォルダ。このパラメータは次の場合に使用します。

- `recover exchange_database` 『37ページ』 および `recover mssql_database` 『41ページ』 コマンドで、`--target` 『85ページ』 パラメータ値が `disk` の場合のみ。
- `recover exchange_mailbox` 『39ページ』 コマンドで、`--target` 『85ページ』 パラメータ値が `pst` の場合のみ。

このパラメータを指定しなかった場合、コマンドは失敗します。

3.7.8 exclude

```
--exclude=<ファイル、フォルダ、マスク>
```

復元から除外するファイルやフォルダの名前です。ファイルやフォルダを明示的に指定することも、ワイルドカード文字を使用することもできます。

注意: 除外によって、復元するデータ項目の選択が上書きされます。たとえば、`MyFile.tmp` というファイルの復元を選択し、すべての `.tmp` ファイルを除外する場合、`MyFile.tmp` というファイルは復元されません。

`Document.txt` など、ファイルまたはフォルダの名前を指定してください。

Windows および Linux のどちらでも、名前の大文字と小文字は区別されません。たとえば、すべての `.tmp` ファイルや `Temp` フォルダの除外を選択する場合、すべての `.Tmp` ファイル、すべての `.TMP` ファイル、および `TEMP` フォルダも除外されます。

1 つ以上のワイルドカード文字(* および ?)を使用できます。

- アスタリスク(*)は 0 個以上の文字の代用として使用します。たとえば、`Doc*.txt` は、`Doc.txt` や `Document.txt` などのファイルを示します。
- 疑問符(?)は厳密に 1 文字として代用されます。たとえば、`Doc?.txt` は、`Doc1.txt` や `Docs.txt` などを示しますが、`Doc.txt` ファイルまたは `Doc11.txt` ファイルは示しません。

除外の例

条件	例	説明
名前	F.log	「F.log」という名前のファイルをすべて除外します。
	F	「F」という名前のファイルをすべて除外します。
マスク(*)	*.log	.log 拡張子の付いたファイルをすべて除外します。
	F*	「F」で始まる名前のファイルとフォルダをすべて除外します(フォルダ F、F1、ファイル F.log、F1.log など)。
マスク(?)	F???log	「F」で始まる 4 文字の名前の .log ファイルをすべて除外します。

3.7.9 ext2_3

```
--ext2_3
```

パラメータを指定した場合、ファイル システムが Ext2 から Ext3 に変換されます。このパラメータは、`recover disk` 『22ページ』 および `recover vm` 『32ページ』 コマンドで使⽤します。このパラメータを指定しないと、復元されたボリュームはバックアップのファイル システムを継承します。

3.7.10 fat16_32

```
--fat16_32
```

パラメータを指定した場合、ファイル システムが FAT16 から FAT32 に変換されます。このパラメータは、`recover disk` 『22ページ』 および `recover vm` 『32ページ』 コマンドで使⽤します。このパラメータを指定しないと、復元されたボリュームはバックアップのファイル システムを継承します。

復元後のボリューム サイズが 2 GB を超える可能性が高い場合はこのパラメータを使用することをお勧めします。

3.7.11 file

```
--file=<パス>
```

ファイルレベルのバックアップから復元するファイルおよびフォルダです。指定しない場合は、バックアップのすべての内容が復元されます。

特定のファイルやフォルダの復元を無効にするには、`--exclude` 『108ページ』 パラメータを使⽤します。

`--file` パラメータと `--exclude` パラメータの両方で指定されたファイルまたはフォルダは復元されます。

3.7.12 log_location

```
--log_location=<ローカル パス>
```

トランザクション ログ ファイルを復元する Exchange Server のフォルダ。

このパラメータは、次の場合に `recover exchange_database` 『37ページ』 コマンドで使⽤します。

- `--target` 『85ページ』 パラメータの値が `another_database` で、復元先データベースまたはストレージ グループが存在しない場合。
- `--target` パラメータの値が `recovery_database` で、復元先のリカバリ ストレージ グループが存在しない場合。

このパラメータを指定しない場合、処理は失敗します。

3.7.13 original_date

```
--original_date
```

このパラメータは、`recover file`『28ページ』および `recover ad_database`『42ページ』コマンドで使います。ファイルの元の日付と時刻をバックアップから復元します。指定しない場合は、現在の日付と時刻が割り当てられます。

3.7.14 outlookmachine

```
--outlookmachine=<IP アドレスまたはホスト名>
```

Microsoft Outlook 2003 以降がインストールされているコンピュータの名前または IP アドレスです。このパラメータは、`recover exchange_mailbox`『39ページ』コマンドで、`--target`『85ページ』パラメータ値が `pst` の場合のみ使います。

このパラメータを指定すると、.pst ファイルが新しい形式で作成され、Microsoft Outlook 2003 以降を使用してそのファイルを開くことができます。指定しない場合、.pst ファイルは古い形式で作成され、Microsoft Outlook 97～2002 を使用してそのファイルを開くことができます。

このパラメータの後に、`--credentials`『123ページ』パラメータ内で有効なユーザー アカウントを指定する必要があります。Active Directory ユーザー アカウントの名前を入力する場合は、ドメイン名(`DOMAIN¥Username` または `Username@domain`)も指定してください。ユーザー アカウントは、コンピュータの Administrators グループのメンバーでなければなりません。

3.7.15 overwrite

コマンド: `recover file`, `recover ad_database`

```
--overwrite={always|older|never}
```

`recover file`『28ページ』または `recover ad_database`『42ページ』コマンドでは、バックアップ内のファイルと同じ名前のファイルがターゲット フォルダ内で見つかった場合の処理をパラメータで指定します。

使用可能なパラメータの値は次のとおりです。

- `always` (デフォルト): バックアップにあるファイルがハード ディスクのファイルより優先されます。
- `older`: バックアップ、ディスクにかかわらず、最新のファイル変更が優先されます。
- `never`: ハード ディスク上のファイルがバックアップ ファイルより優先されます。

`recover file`『28ページ』コマンドで、ファイルの上書きを許可する場合でも、復元処理から除外『108ページ』することによって、特定のファイルの上書きを防止できます。

コマンド:

```
--overwrite
```

`recover exchange_database`『37ページ』コマンドでは、パラメータを使用して、既存のデータベースまたはストレージ グループを上書きすることができます(選択したデータベースのプロパティで上書きが許可されている場合)。パラメータが指定されず、復元先データベースまたはストレージ グループが存在する場合、操作は失敗します。

`recover exchange_mailbox`『37ページ』コマンドでは、パラメータを使用して、バックアップ内と同じ ID を持つアイテム(電子メール、予定表のイベント、連絡先、タスクなど)を上書きすること

ができます。パラメータが指定されていない場合、ターゲットのメールボックス内の該当するアイテムはスキップされます。

注意: 同じアイテムを複数回復元する場合、上書きされると元のアイテム ID が変更されるので、復元が行われるごとにアイテムがコピーされます。

`recover mssql_database` 『41ページ』 コマンドでは、パラメータを使用して、バックアップ内のデータベースと同じ名前のデータベースを上書きすることができます。このパラメータを指定しなかった場合、コマンドの実行結果は `--autorename` 『105ページ』 パラメータによって異なります。`--autorename` パラメータが存在する場合、コマンドは復元されたデータベースの名前を変更します。存在しない場合、データベースは復元中にスキップされます。`--autorename` および `--overwrite` の両方のパラメータを指定すると、エラーが発生します。

3.7.16 pit

`--pit=<日付と時刻>`

データが復元される日付と時刻です。パラメータ値を、"`DD.MM.YYYY HH24:MM`" の形式で指定します(たとえば、"`27.02.2012 13:00`"です)。

このパラメータは、`recover exchange_database` 『37ページ』 および `recover exchange_mailbox` 『39ページ』 コマンドで、`--recovery_point` 『112ページ』 パラメータの値が `point_in_time` の場合にのみ使用します。

指定したリカバリ ポイントが含まれているトランザクション ログ ファイルが、(トランザクション ログ バックアップ内で)自動的に検索されます。その後、データが、そのトランザクション ログ ファイルが作成された時点で復元されます。指定したリカバリ ポイントが含まれているログ ファイルが存在しない場合、過去にバックアップされたトランザクション ログ ファイルに最も近いポイントが使用されます。

リカバリ ポイントを指定しなかった場合、処理は失敗します。

3.7.17 power_on

`--power_on`

復元の完了時にターゲット仮想コンピュータの電源をオンにします。

3.7.18 preserve_mbr

`--preserve_mbr`

既存のボリュームの上にボリュームが復元される場合、復元先のボリュームはディスクから削除され、同時に復元先ディスクの MBR のエントリも削除されます。次に、このパラメータを指定すると、復元されるボリュームのエントリは、復元先のディスクの MBR の上位にある空のポイントを占有します。これにより、復元先ディスクの MBR は保存されます。このパラメータが指定されていない場合、復元されるボリュームのエントリは、バックアップ中の元のディスクの MBR と同じ位置を使用します。その位置が空でない場合、既存のエントリは他の位置に移動されます。

3.7.19 recover_absolute_path

`--recover_absolute_path`

このパラメータは、`recover file` 『28ページ』 コマンドで使用します。ファイルおよびフォルダのフル パスを使用して復元します。指定しない場合、フル パスは使用されません。

例

C:¥My data¥Dir1 にある **My folder** フォルダをバックアップし、次にこのフォルダを最新のバックアップから **D:¥Sample¥Dir2** に復元します。

```
recover file --loc=E:¥my_backups --arc=my_archive --file="My folder"
--target=D:¥Sample¥Dir2
```

`--recover_absolute_path` パラメータは指定されていません。復元されたフォルダは **D:¥Sample¥Dir2¥My folder** に置かれます。

```
recover file --loc=E:¥my_backups --arc=my_archive --file="My folder"
--target=D:¥Sample¥Dir2 --recover_absolute_path
```

`--recover_absolute_path` パラメータが指定されています。復元されたフォルダは **D:¥Sample¥Dir2¥Drive(C)¥My data¥Dir1¥My folder** に置かれます。

3.7.20 recovery_point

データが復元される状態です。

コマンド: `recover exchange_database`

```
--recovery_point={point_of_failure|latest_backup|point_in_time|selected_backup}
```

`recover exchange_database` 『37ページ』 コマンドで使用可能なパラメータの値は次のとおりです。

- `point_of_failure` (デフォルト)
データは、Exchange 内に存在している最新のトランザクション ログ ファイルの状態に復元されます。トランザクション ログが、(失われたり、削除されたり、破損したりして) 存在しない場合、データはバックアップの作成時点に復元されます。
- `latest_backup`
データは、アーカイブの最新バックアップから復元されます。
- `point_in_time`
データは、特定の日付と時刻の状態に復元されます。最初に、指定した時刻の前に完全バックアップが作成された時刻のデータが復元された後、トランザクション ログのバックアップからトランザクション ログ ファイルが適用されます。
この値を使用する場合、`--pit` 『111ページ』 パラメータを指定する必要があります。
- `selected_backup`
データは `--backup` 『85ページ』 パラメータで指定したバックアップから復元されます。

コマンド: `recover exchange_mailbox`

```
--recovery_point={latest_backup|point_in_time|selected_backup}
```

`recover exchange_mailbox` 『39ページ』 コマンドで使用可能なパラメータの値は次のとおりです。

- `latest_backup` (デフォルト)

データは、アーカイブの最新バックアップから復元されます。

- `point_in_time`
データは、特定の日付と時刻の状態に復元されます。この値を使用できるのは、データベースレベルのバックアップからメールボックス、パブリック フォルダ、またはメールボックス フォルダを復元する場合のみです。
この値を使用する場合、`--pit` 『111ページ』 パラメータを指定する必要があります。
- `selected_backup`
データは `--backup` 『85ページ』 パラメータで指定したバックアップから復元されます。

3.7.21 target_disk

```
--target_disk=<ディスク番号>
```

このパラメータは、`recover disk` 『22ページ』、`recover vm` 『32ページ』 コマンドおよび `recover mbr` 『24ページ』 コマンドで使Ⓐします。

- ボリュームを復元する場合、このパラメータを使用して、指定したベーシック ディスクの未割り当て領域にボリュームを配置します。ターゲット ディスクは 1 つのみ指定できます。
- ディスクを復元する場合、このパラメータを使用してターゲット ディスクを指定します。
`recover vm` コマンドを使用して、一度に 1 つのディスクのみを復元できます。そのため、指定できるターゲット ディスクは 1 つのみです。
`recover disk` コマンドを使用して複数のディスクを指定できます。`--target_disk` パラメータで指定したディスクの数は、`--disk` パラメータで指定したディスクの数と同じになっている必要があります。
- `recover mbr` コマンドを使用してマスター ブート レコードを復元するとき、このパラメータを使用してターゲット ディスクを指定します。

3.7.22 target_volume

```
--target_volume=<volume number>
```

データの復元先のボリューム。これは `--volume` 『89ページ』 パラメータで選択されます。このパラメータは、`recover disk` 『22ページ』 および `recover vm` 『32ページ』 コマンドで使Ⓐします。

`recover disk` 『22ページ』 コマンドを使用して複数のディスクを指定できます。
`--target_volume` パラメータで指定したボリュームの数は、`--volume` パラメータで指定したボリュームの数と同じになっている必要があります。

ボリュームをベーシック ディスクの未割り当て領域に復元する必要がある場合は、次のいずれかの方法を使Ⓐします。

- 特定のディスク上の未割り当て領域を指定するには、
「`--target_volume=UNALLOCATED-<ディスク番号>-<未割り当て領域のシーケンス番号>`」と入力します。
- `--target_disk` 『113ページ』 パラメータを `--target_volume` パラメータの代わりに指定します。この場合、指定したディスク上の適切なサイズの最初の未割り当て領域にボリュームが復元されます。

- `--target_volume` パラメータの代わりに `--target_disk` 『113ページ』 パラメータと `--start` 『91ページ』 パラメータを指定します。この場合、指定したディスク上の指定した開始位置から始まる未割り当て領域にボリュームが復元されます。

例

`--target_volume=C:` ベーシック ボリュームに復元する場合
`--target_volume=DYN1:` ダイナミック ボリューム (Windows) または論理ボリューム (Linux) に復元する場合
`--target_volume=UNALLOCATED-1-1:` 最初のベーシック ディスクの最初の未割り当て領域に復元する場合
`--target_volume=UNALLOCATED-DYN:` ディスク グループの未割り当て領域に復元する場合 (Windows のみ)

3.7.23 type

```
--type={active|primary|logical}
```

復元されたボリュームをアクティブ、プライマリまたは論理に設定します。ただし、これを実行できない場合もあります (ディスク上に 4 つを超えるプライマリ ボリュームが存在できないためなど)。ボリュームをアクティブに設定するとプライマリとして設定されます。これに対し、プライマリに設定されたボリュームが非アクティブなままの場合があります。

種類を指定しない場合は、復元先のボリュームの種類が保持されます。復元先のボリュームがアクティブの場合、復元されるボリュームはアクティブに設定されます。復元先のボリュームがプライマリでディスク上に他のプライマリ ボリュームが存在する場合、いずれか 1 つがアクティブに設定され、復元されるボリュームはプライマリになります。ディスク上にプライマリ ボリュームが存在しない場合、復元されるボリュームはアクティブに設定されます。

未割り当て領域にボリュームを復元するときは、バックアップからボリュームの種類が取り出されます。プライマリ ボリュームに対しては、次のように種類が設定されます。

- 復元先のディスクが BIOS で起動順位が 1 番目に設定されていて、他にプライマリ ボリュームが存在しない場合、復元されるボリュームはアクティブに設定されます。
- 復元先のディスクが BIOS で起動順位が 1 番目に設定されていて、他にプライマリ ボリュームが存在する場合、復元されるボリュームは論理に設定されます。
- 復元先のディスクが BIOS で起動順位が 2 番目以降に設定されている場合、復元されるボリュームは論理に設定されます。

3.7.24 use_all_space

```
--use_all_space
```

このパラメータは、ボリュームを未割り当て領域に復元する場合に、`recover disk` 『22ページ』 コマンドと `recover vm` 『32ページ』 コマンドで使用します。

このパラメータを指定すると、復元されたボリュームは未割り当て領域の全体を占めることになります。指定しない場合、復元されたボリュームのサイズはバックアップのボリュームのサイズと同じになります。

3.8 マウント パラメータ

3.8.1 rw

```
--rw
```

指定した場合、バックアップされたボリュームが読み取り/書き込みモードでマウントされます。バックアップの内容を変更し(ファイルまたはフォルダの保存、移動、作成、削除)、単一のファイルで構成された実行可能ファイルを実行することができます。

指定しない場合、ボリュームは読み取り専用モードでマウントされます。

3.8.2 letter

コマンド:

```
--letter=<文字>
```

マウントされるボリュームに割り当てる文字。このパラメータは、Windows にボリュームをマウントするときに `mount` 『55ページ』 コマンドで使います。

指定した文字は、`--volume` 『89ページ』 パラメータに指定したボリュームの順序に従ってボリュームに割り当てられます。

例

```
--volume=2-1,1-3,1-1 --letter=K,L,M
```

文字は、2-1=K、1-3=L、1-1=M の形式で割り当てられます。

1 つ以上のボリュームに文字を指定していない場合、最初の使用可能な文字が割り当てられます。この場合、`list disks` 『20ページ』 コマンドを使用して、ボリュームに割り当てられる文字を確認します。ボリュームよりも多くの文字を指定すると、処理は失敗します。

コマンド:

```
--letter={<文字>|all}
```

切断されるボリュームのドライブ文字です。このパラメータは、Windows からボリュームをマウント解除するときに、`umount` 『56ページ』 コマンドで使います。この値が、`all` の場合、すべてのボリュームが切断されます。このパラメータを指定しない場合、処理は失敗します。

3.8.3 mount_point

コマンド:

```
--mount_point=<マウント ポイント>
```

ボリュームのマウント先になるディレクトリです。このパラメータは、Linux で `mount` 『55ページ』 コマンドで使います。このパラメータを指定しない場合、またはマウント ポイントの数がボリュームの数と異なる場合、処理は失敗します。

コマンド:

```
--mount_point=<mount point>
```

ボリュームのマウントを解除するディレクトリです。このパラメータは、Linux で `umount` 『56ページ』 コマンドで使⽤します。このパラメータを指定しない場合、処理は失敗します。

3.9 Acronis セキュア ゾーンのパラメータ

3.9.1 `asz_size`

```
--asz_size={<サイズ>{s|kb|mb|gb}|unallocated}
```

単位を指定しない場合、サイズはメガバイト(`mb`)で測定されます。

コマンド: `create asz`

`create asz` 『59ページ』 コマンドでは、パラメータで Acronis セキュア ゾーン のサイズを指定します。

パラメータを指定しない場合、サイズは、最大値(`--volume` 『89ページ』 パラメータで選択されたボリュームの未割り当て領域と空き領域の合計)と最小値(約 50 MB)の間の平均値に設定されます。

いずれの場合も、未割り当て領域が最初に使⽤されます。十分な未割り当て領域がない場合、選択したボリュームは縮小されます。ロックされているボリュームのサイズを変更する場合、再起動 『127ページ』 が必要になります。

`unallocated` 値を指定すると、ディスク上のすべての未割り当て領域がセキュア ゾーンによって使⽤されます。必要に応じて、ボリュームは移動されますが、サイズは変更されません。ロックされたボリュームが移動されると再起動が必要になります。`--volume` 『89ページ』 パラメータは無視されます。

コマンド: `resize asz`

`resize asz` 『59ページ』 コマンドでは、パラメータで Acronis セキュア ゾーン の新しいサイズを指定します。

Acronis セキュア ゾーン を増やすと、前述の `create asz` コマンドで説明されたものと同じように動作します。

Acronis セキュア ゾーン を減らすと、`--volume` 『89ページ』 パラメータで指定されているボリュームに空き領域が追加されます。ロックされているボリュームのサイズを変更する場合、再起動 『127ページ』 が必要になります。`--volume` パラメータがない場合、または `--asz_size` パラメータが `unallocated` に設定されている場合、空き領域が未割り当てになります。

パラメータが指定されていない場合、現在の Acronis セキュア ゾーン のサイズおよび空き領域が表示されます。

3.10 フィルタ処理

フィルタ処理パラメータは、一覧表示コマンド(`list activities` 『68ページ』、`list archives` 『43ページ』 など)によって取得されるデータにフィルタを適用するために使⽤します。

3.10.1 content_path

バックアップの内容のパスです。このパラメータは、`list content` 『48ページ』 コマンドで、`--content_type` 『117ページ』 パラメータ値が `volume` または `ad_database` のでない場合に使用します。指定しない場合、最初の 5000 のルート要素が表示されます。

ディスクレベルおよびファイルレベルのバックアップ

ディスクレベルおよびファイルレベルのバックアップの場合、このパラメータはファイル システムのパスです。Windows では、ドライブ文字によってパスでボリュームを指定します(1-1 のような番号ではありません)。Linux では、ボリュームのマウント ポイントを指定します。

例:

```
--content_path=C:\Windows\system32
--content_path=/home/user1/work
```

Microsoft Exchange Server データのバックアップ

値の形式の詳細については、「Exchange データの指定 『81ページ』」を参照してください。

単一パス バックアップ

単一パス バックアップの場合、値の形式は表示するデータの種類によって異なります。このデータの種類の種類は `--content_type` パラメータ値で決定されます。

- このパラメータが `--content_type=mssql_database` の場合はインスタンス名です。

例:

```
--content_path=NEWSERVER
```

- このパラメータが `--content_type=file` の場合はファイル システム パスです。ドライブ文字によってパスでボリュームを指定します(1-1 のような番号ではありません)。

例:

```
--content_path=D:\databases
```

3.10.2 content_type

```
--content_type={volume|file|exchange_database|exchange_mailbox|mssql_database|ad_database}
```

表示する内容の種類です。このパラメータは、`list content` 『48ページ』 コマンドでディスクレベルまたはデータベースレベルのバックアップの内容を表示する場合に使用します。

ディスクレベルのバックアップ

ディスクレベルのバックアップの内容を表示する場合、指定できるパラメータの値は、`volume` と `file` です。この値が、`volume` かまたはパラメータを指定しない場合、バックアップに含まれるディスクとボリュームが一覧表示されます。それ以外の場合は、バックアップされたファイルおよびフォルダの一覧が表示されます。

Microsoft Exchange Server データのバックアップ

データベースレベルのバックアップの内容を表示する場合、指定できるパラメータの値は、`exchange_database` と `exchange_mailbox` です。この値が、`exchange_database` か

またはパラメータを指定しない場合、バックアップに含まれるストレージ グループとデータベースが一覧表示されます。それ以外の場合は、バックアップされたメールボックスおよびパブリック フォルダの一覧が表示されます。

単一パス バックアップ

Microsoft SQL Server のシングル パス バックアップの内容を表示する場合、指定できるパラメータの値は、`mssql_database`、`volume`、および `file` です。Microsoft Active Directory データのシングル パス バックアップの内容を表示する場合、指定できるパラメータの値は、`ad_database`、`volume`、および `file` です。

この値が `volume` の場合か、またはパラメータを指定しない場合、バックアップに含まれるディスクとボリュームが一覧表示されます。

3.10.3 filter_available_for_backup

```
--filter_available_for_backup={true|false}
```

このパラメータの値が、`true` の場合、エージェントによって管理されている仮想コンピュータのみが一覧表示されます。この値が、`false` の場合は、管理不能な仮想コンピュータのみが表示されます。エージェントが存在しないか停止または破損している場合に仮想コンピュータは管理不能になります。これにより、管理サーバーで使用できなくなります。このパラメータは、`list vms` 『30 ページ』 コマンドで使用します。パラメータを指定しない場合、管理可能および管理不能の両方の仮想コンピュータが表示されます。

3.10.4 filter_date

```
--filter_date=<日時>
```

このパラメータは、`list backups` 『47ページ』 コマンドで使用します。指定した場合、特定の日付および特定の時刻に作成されたバックアップのみが取得されます。指定しない場合、作成の日付および時刻を問わず、すべてのバックアップが表示されます。

正確な日付と時刻のリストを次の形式で指定します。"`DD.MM.YYYY HH24:MM:SS`"。秒、分、および時間を省略することができます。それぞれ「すべての秒」、「すべての秒とすべての分」、「すべての秒、すべての分、およびすべての時間」を意味します。

例:

- `--filter_date="15.02.2011 12:00"` は、15.02.2011 12:00:00～15.02.2011 12:00:59 の間に作成されたバックアップを表示します。
- `--filter_date="15.02.2011 12"` は、15.02.2011 12:00:00～15.02.2011 12:59:59 の間に作成されたバックアップを表示します。
- `--filter_date=15.02.2011` は、15.02.2011 00:00:00～15.02.2011 23:59:59 の間に作成されたバックアップを表示します。

3.10.5 filter_edition

```
--filter_edition=<エディション>
```


このパラメータは、`list mssql_instances` 『40ページ』 コマンドで使⽤します。指定されている場合、指定した値を含む Microsoft SQL Server エディションのインスタンスのみが一覧表示されます。

このパラメータがない場合、任意の Microsoft SQL Server エディションのインスタンスが表示されます。

例:

`--filter_edition=Enterprise` を指定すると、次の Microsoft SQL Server エディションのインスタンスが表示されます。Microsoft SQL Server 2005 Enterprise Edition、Microsoft SQL Server 2008 R2 Enterprise Edition、および Microsoft SQL Server 2012 Enterprise Edition。

3.10.6 filter_guid

```
--filter_guid=<GUIDs>
```

出力するオブジェクトの選択条件となる GUID です。このパラメータは、`list tape_libraries` 『63ページ』、`list vms` 『30ページ』 コマンドおよび `list activities` 『68ページ』 コマンドで使⽤します。指定しない場合、GUID を問わず、すべてのオブジェクトが表示されます。

3.10.7 filter_host

```
--filter_host=<hostnames>
```

このパラメータは、`list vms` 『30ページ』 コマンドで使⽤します。指定した場合、一覧表示されるホストに存在する仮想コンピュータのみが表示されます。指定しない場合、すべての登録済みホストに存在する仮想コンピュータが表示されます。

3.10.8 filter_library

```
--filter_library=<GUID>
```

`list tape_slots` 『63ページ』 コマンドを使って、スロットを一覧表示するテープ ライブラリの GUID です。指定されていない場合、コンピュータに接続されているテープ ライブラリすべてのスロットが一覧表示されます。

テープ ライブラリの GUID を調べるには、`list tape_libraries` 『63ページ』 コマンドを実行します。

3.10.9 filter_machines

```
--filter_machines=<コンピュータの台数>
```

このパラメータは、`list vmsservers` 『29ページ』 コマンドで使⽤します。指定した場合、指定した数のコンピュータが含まれる仮想サーバーまたはサーバー クラスタのみが表示されます。指定しない場合、含まれるコンピュータの数を問わず、すべてのサーバーまたはクラスタが表示されます。

3.10.10 filter_name

```
--filter_name=<名>
```

出力するオブジェクトの選択条件となるオブジェクト名です。

このパラメータを `list tape_libraries` 『63ページ』、`list vms` 『30ページ』、または `list vmsservers` 『29ページ』 コマンドで使用すると、指定した値に名前が一致するオブジェクトが表示されます。

このパラメータを `list exchange_mailboxes` 『34ページ』、`list mssql_instances` 『40ページ』、または `list mssql_databases` 『40ページ』 コマンドで使用すると、名前に指定した値が含まれるオブジェクトが表示されます。

このパラメータが指定されていない場合、任意の名前のオブジェクトが表示されます。

3.10.11 filter_state

```
--filter_state=<状態>
```

出力するオブジェクトの選択条件となる状態です。このパラメータは、`list activities` 『68ページ』、`list tasks` 『73ページ』、`list plans` 『69ページ』 コマンドおよび `list vms` 『30ページ』 コマンドで使します。パラメータを指定しない場合、状態を問わず、すべてのオブジェクトが一覧表示されます。

`list activities` コマンドの場合は、次の状態を 1 つ以上指定できます。`running`、`paused`、`waiting`、`waiting_for_children`、または `completed`。

`list tasks` コマンドと `list plans` コマンドの場合は、次の状態を 1 つ以上指定できます。`idle`、`waiting`、`running`、または `need_interaction`。

`list vms` コマンドの場合は、次の状態を 1 つ以上指定できます。`running`、`stopped`、`suspended`、`wait_input`、または `unknown`。

3.10.12 filter_status

```
--filter_status=<ステータス>
```

出力するオブジェクトの選択条件となるステータスです。このパラメータは、`list vms` 『30ページ』 および `list plans` 『69ページ』 コマンドで使します。指定しない場合、ステータスを問わず、すべてのオブジェクトが表示されます。

仮想コンピュータのステータスは、コンピュータのバックアップがどの程度正常に実行されたかを示します。これは、この仮想コンピュータに関連付けられているすべてのバックアップ計画のステータスに依存します。

次のステータスを 1 つ以上指定することができます。`ok`、`warning`、`error` または `unknown`。

3.10.13 filter_type

出力するオブジェクトの選択条件となる種類です。

コマンド: `list archives`、`list backups`

```
--filter_type=<種類>
```

`list archives` 『43ページ』 コマンドでは、次の種類から 1 つ以上指定することができます。`disk`、`file`、`exchange_db`、および `exchange_doc`。

`list backups` 『47ページ』コマンドでは、次の種類から 1 つ以上指定することができます。
`full`、`incremental`、`differential`、および `transaction_log`。

コマンド:`list vmservers`

```
--filter_type=<サーバーの種類>
```

`list vmservers` 『29ページ』コマンドでは、次の種類から 1 つ以上指定することができます。
`standalone` および `cluster`。

3.10.14 filter_user

```
--filter_user=<ユーザー名>
```

このパラメータは、`list tasks` 『73ページ』 および `list plans` 『69ページ』 コマンドで使用します。このパラメータを指定した場合、指定したユーザー アカウントで実行されたタスクのみ（または実行されたタスクを含む計画のみ）が一覧表示されます。指定しない場合は、実行したユーザー アカウントを問わず、すべてのタスクが表示されます。

3.10.15 filter_version

```
--filter_version=<バージョン>
```

このパラメータは、`list mssql_instances` 『40ページ』 コマンドで使用します。指定されている場合、指定した値を含む Microsoft SQL Server バージョンのインスタンスのみが一覧表示されます。

このパラメータがない場合、任意の Microsoft SQL Server バージョンのインスタンスが表示されます。

例:

`--filter_version=500` を指定すると、次の Microsoft SQL Server バージョンのインスタンスが表示されます。9.00.5000.00 および 10.00.5500.00。

3.11 テープ管理パラメータ

3.11.1 assign2free

```
--assign2free
```

このパラメータは、`inventory tape` 『64ページ』 コマンドで使用します。指定すると、検出されたテープは認識されないテープまたはインポートされたテープ プールから空きテープ プールに移動されます。

警告: テープに格納されているデータを上書きしても問題がないと確信している場合のみ、このパラメータを使用してください。

3.11.2 ライブラリ

```
--libraries=<GUIDs>
```

インベントリを行うテープ ライブラリまたはスタンドアロン テープ ドライブの GUID です。このパラメータは、`inventory tape` 『64ページ』 コマンドで使⽤します。

指定しなかった場合、コマンドは失敗します。テープ ライブラリのドライブまたはスタンドアロン テープ ドライブの GUID を調べるには、`list tape_libraries` 『63ページ』 コマンドを実行します。

3.11.3 モード

```
--mode={full|fast}
```

テープのインベントリ 『64ページ』 方法。

高速インベントリ

パラメータの値が `fast` であるか、または指定されていない場合、Acronis Backup & Recovery 11.5 はテープのバーコードをスキャンします。バーコードを利用することによって、以前に使用されていたプールにテープを素早く戻します。

この方法を選択すると、同じコンピュータに接続された同じテープ デバイスで使⽤されたテープが認識されます。その他のテープは「認識されないテープ」プールに送られます。

テープ ライブラリがバーコード リーダーを搭載していない場合は、すべてのテープが「認識されないテープ」プールに送られます。テープを認識させるには、このセクションで後述するように、完全インベントリを実行するか、高速インベントリと完全インベントリを組み合わせで実行します。

完全インベントリ

パラメータ値が `full` である場合、Acronis Backup & Recovery 11.5 は、Acronis ソフトウェアによって書き込まれたタグを読み取り、ロードされたテープの内容に関するその他の情報を分析します。この方法を選択すると、空のテープ、および Acronis ソフトウェアによって書き込まれた(使⽤したコンピュータとテープ デバイスを問わず)テープを認識します。

高速インベントリと完全インベントリの組み合わせ

テープ デバイス全体の完全インベントリには、時間がかかることがあります。インベントリの対象となるテープが数本である場合は、高速インベントリと完全インベントリを組み合わせます。詳細な手順については、「テープの操作」 『144ページ』 を参照してください。

3.11.4 slots

```
--slots=<GUIDs>
```

インベントリを行うテープ ライブラリ スロットの GUID です。このパラメータは、`--libraries` 『121ページ』 パラメータにいずれかのライブラリの GUID が含まれている場合にのみ `inventory tape` 『64ページ』 コマンドで使⽤します。

パラメータを指定しない場合、テープ ライブラリ スロットがすべてインベントリされます。テープ ライブラリ スロットの GUID を調べるには、`list tape_slots` 『63ページ』 コマンドを実行します。

3.12 一般的なパラメータ

3.12.1 credentials

```
--credentials=<ユーザー名>,<password>,encrypted
```

コンピュータにアクセスするためのログイン情報、バックアップ先、またはフォルダです。このパラメータは、ログイン情報が必要なオブジェクトのすぐ後に指定する必要があります(`--host`、`--loc`、`--target` など)。

Acronis セキュア ゾーンにアクセスするには、このパラメータでパスワードのみを指定します。

ログイン情報を必要としないネットワーク共有にアクセスするには、`--credentials=anonymous` を指定します。

先に入力したパスワードが `acronis_encrypt` ユーティリティ『151ページ』で暗号化されていることを示すには、3 つめのパラメータ値(`encrypted`)を指定します。

コマンドに複数の `--credentials` パラメータを指定することができます。

例

```
acrocmd export archive --loc=bsp://ASN/my_vault --credentials="ASN user",pass1  
--arc=my_archive --password=123 --target=¥¥bkpsrv¥backups  
--credentials=netuser,pass2
```

このコマンドは、パスワードで保護されたアーカイブを管理対象格納域からネットワーク共有へエクスポートします。1 番目のログイン情報は、ストレージ ノード `ASN` によって管理される格納域 `my_vault` にアクセスするうえで必要です。`--password` パラメータでは、アーカイブ `my_archive` のパスワードを指定します。2 番目のログイン情報によって共有フォルダ `¥¥bkpsrv¥backups` への書き込みが有効になります。

3.12.2 エラー処理

```
--retry_count=<試行回数>  
--retry_delay=<遅延>
```

これらのパラメータは、バックアップ コマンドおよび復元コマンドでのみ使用します。

修復可能なエラーが発生した場合、失敗した処理が再試行されます。試行回数および試行間隔を設定できます。試行は、処理が成功するか、または指定した回数の試行が行われると停止します。

両方のパラメータを指定する必要があります。`--retry_delay` パラメータは、`--retry_count` パラメータのすぐ後に指定する必要があります。

例: `--retry_count=10 --retry_delay=20s`

パラメータを指定しない場合、試行回数は 5 回になり、試行間隔は 30 秒になります(「`--retry_count=5 --retry_delay=30s`」と入力した場合と同じです)。再試行を完全に無効にするには、`--retry_count=0` を指定します。

試行間隔は秒単位(`s`、デフォルト)、分単位(`m`)、または時間単位(`h`)で設定できます。

例:

- 10 秒間隔: `--retry_delay=10` または `--retry_delay=10s`
- 1 分間隔: `--retry_delay=1m`
- 1 時間間隔: `--retry_delay=1h`

3.12.3 file_params

```
{-f|--file_params}=<full local path>
```

入力パラメータ ファイルのフル パスを指定します。パスはローカル パス(`c:\temp\1.txt` または `/home/user1/1.txt` など)にする必要があります。詳細については、「構文『9ページ』」を参照してください。

3.12.4 force_yes

```
--force_yes
```

このパラメータが指定された場合、操作要求に対してユーザーが `[Yes]` または `[OK]` と答えた場合と同じように、ユーザーの操作が必要な状況をソフトウェアが自動的に処理します。操作要求がこれらの応答を想定しない場合(たとえば、再起動要求に対して可能な回答が `[Reboot]` と `[Cancel]` である場合)、ソフトウェアはこの要求を無視します。ユーザーによる操作なしに処理を続行できない場合、その処理は失敗します。

このパラメータ指定されていない場合、コマンドでユーザーによる操作が許可されます。

このパラメータは主に、`recover lvm_structure`『25ページ』コマンドを対象としています。論理ボリューム構造が異なる、または論理ボリュームがないコンピュータに対して、Linux システムおよびそのソフトウェア RAID または LVM 構造を自動的に復元します。このコマンドは常に、コンピュータの論理ボリューム構造の置き換えの確認をユーザーに要求します。

`--force_yes` パラメータを使用することで、有用なデータの削除を気付かずに確定してしまうおそれがあることに注意してください。操作要求を無視するようにソフトウェアを設定する場合は、`--force_yes` パラメータではなく `--silent_mode`『128ページ』パラメータを使用します。これらのパラメータを同時に選択することはできません。

3.12.5 id

```
--id=<GUID>
```

操作の実行に使用するアクティビティ、タスク、またはバックアップ計画の GUID です。このパラメータは、`get log`『67ページ』コマンドおよび、`task`『73ページ』および `plan`『69ページ』管理コマンドで使します。

3.12.6 log

```
--log=<フル パス>
```

指定したファイルに対してパラメータを指定して実行された操作のログを保存します。ログ ファイルの形式は、`--log_format`『124ページ』パラメータの値によって異なります。

3.12.7 log_format

```
--log_format={structured|unstructured}
```

--log 『124ページ』 パラメータで指定されたログ ファイルの形式です。値が `structured` になっているか、パラメータが指定されていない場合、ログは構造化された xml 形式に書き込まれます。この形式は、コマンドライン ユーティリティがインストールされるフォルダ内にある `acrocnd.xsd` ファイル内に記述されています。ユーティリティのデフォルトのインストール パスは、「Installation paths」の下にある「Installation 『7ページ』」セクションに記載されています。

値が `unstructured` である場合、ログは Acronis xml 形式で書き込まれます。

3.12.8 network_speed

```
--network_speed=<速度>{kb|p}
```

バックアップまたはベリファイ コマンドの実行時にネットワークでデータを転送する速度。

バックアップ コマンドでは、バックアップ先(--loc 『83ページ』 パラメータ値)がネットワーク上のロケーション、つまり、ネットワーク共有、管理対象の格納域、FTP/SFTP サーバー、または Acronis Online Backup Storage である場合に、このパラメータを使用します。その他のロケーションの種類では、このパラメータは無視されます。

ベリファイ コマンドでは、このパラメータは、同じバックアップ先に対して使用します(管理対象の格納域を除く)。

このパラメータでは、バックアップ データの転送に割り当てるネットワーク接続の帯域幅を定義します。このパラメータを指定しない場合、バックアップ データの転送時に使用可能なすべてのネットワーク帯域幅が使用されます。他のネットワーク処理のためにネットワーク帯域幅の一部を予約できます。

<速度> は、正の数にする必要があります。測定単位が `kb` である場合、速度は KB/秒で測定されます。測定単位が `p` である場合、または指定されない場合、速度はネットワーク接続の推定最高速度を 100% とした場合の割合で測定されます。オンライン ストレージでは、`kb` の測定単位のみ有効です。

例:

```
--network_speed=500kb: データ転送速度は 1 秒あたり 500 キロバイトです。  
--network_speed=50p または --network_speed=50: データ転送速度は推定最大速度の 50 % です。
```

3.12.9 oss_numbers

```
--oss_numbers={true|false}
```

次の場合にこのパラメータが使用されます。

- `backup disk` 『20ページ』、`recover disk` 『22ページ』、`create asz` 『59ページ』、`resize asz` 『59ページ』、および `delete asz` 『61ページ』 コマンドを使用する場合。これらのコマンドでは、--volume 『89ページ』 パラメータ値で指定したボリュームにパラメータが適用されます。
- --content_type パラメータ値を volume に指定して `list content` 『48ページ』 コマンドを使用する場合、`list disks` 『20ページ』 コマンドを使用する場合。これらのコマンドでは、出力ボリュームの番号にパラメータが適用されます。

この値が `true` であるか、またはパラメータを指定しない場合、ボリューム番号は MBR パーティション テーブルに対して調整されます。つまり、プライマリ ボリュームの番号は 1-1、1-2、1-3、1-4 になっており、論理ボリューム番号は 1-5 から開始されます。

パラメータ値が `false` の場合、連続するボリューム番号を使用する必要があります。

例

ディスクに 1 つのプライマリ パーティションと 2 つの論理パーティションがある場合、番号は次のように表示される可能性があります。

```
--volume=1-1,1-5,1-6
```

または

```
--oss_numbers=false --volume=1-1,1-2,1-3
```

3.12.10 output

```
--output={formatted|raw}
```

出力モードです。次の値を指定できます。

- **formatted** (デフォルト)

人間が判読可能な形式のテーブルを出力します。テーブルの列の最大幅は 20 文字です。テキストは左揃えです。テーブルの見出しおよび見出しの区切り文字が表示されます。

- **raw**

このモードは、サードパーティのパarserの入力として使用します。見出しは表示されず、列見出しの区切り線も表示されません。列の区切り文字は「`¥t`」(タブ文字)です。また、このモードでは、20 文字を超える値(バックアップ計画の GUID など)の全体を表示できます。

3.12.11 password

```
--password=<パスワード>,encrypted
```

バックアップおよび復元操作、アーカイブおよびバックアップ管理操作のアーカイブのパスワードです。このパラメータは、`--arc` 『83ページ』 パラメータのすぐ後に指定する必要があります。

また、このパラメータは `create asz` 『59ページ』 コマンドで使用して、Acronis セキュア ゾーンのパスワードを指定します。

先に入力したパスワードが `acronis_encrypt` ユーティリティ 『151ページ』 で暗号化されていることを示すには、2 つめのパラメータ値(`encrypted`)を指定します。

3.12.12 process_priority

```
--process_priority={low|normal|high}
```

システムで実行されるバックアップまたはベリファイ処理の優先度。ベリファイ コマンドでは、バックアップ先が管理対象の格納域の場合、このパラメータは無視されます。

このパラメータによって、その処理に割り当てられる CPU やシステムのリソース量が決まります。優先度を下げると、他のアプリケーションのためのリソースを増やすことができます。優先度を上げると、バックアップ アプリケーションに割り当てる CPU などのリソースを増やすようにオペレーティ

ング システムに要求することで、バックアップまたはベリファイの処理速度が上がる場合があります。ただし、その効果は、全体的な CPU の使用率およびディスク入出力速度、ネットワーク トラフィックなどのその他の要素に依存します。

次の値を指定できます。

- `low` (デフォルト)
バックアップまたはベリファイ処理が占有するリソースを最小限にし、より多くのリソースをコンピュータ上で動作する他のプロセスのために残すには、この値を使用します。
- `normal`
通常で速度でバックアップまたはベリファイ処理を実行し、他のプロセスと同等のリソースを割り当てるには、この値を使用します。
- `high`
他のプロセスからリソースを取り上げることによって、バックアップまたはベリファイの処理速度を最大にするには、この値を使用します。

3.12.13 progress

```
--progress
```

画面に操作の進行状況 (完了した割合、経過時間、推定所要時間) を表示します。進行状況に関する情報は、`--progress` パラメータが存在するかどうかに関係なくログに記録されます。

3.12.14 reboot

`reboot` および `reboot later`

```
--reboot  
--reboot --later
```

操作の前にコンピュータを再起動します (必要な場合)。

再起動が必要な次の操作を実行する場合は、`--reboot` パラメータを使用します。具体的には、現在アクティブなオペレーティング システムを含むボリュームの復元、ロックされたファイルの復元、システム ディスク上での Acronis セキュア ゾーンの作成/削除、システム ディスクのクローン作成の実行です。コンピュータは、確認メッセージを表示することなく再起動されます。

`--reboot` パラメータも `--silent_mode=on` 『128ページ』 パラメータも指定しない場合、ユーザーによる操作が必要になります。`--reboot` パラメータを指定せず、`--silent_mode=on` パラメータを指定した場合、操作が失敗します。

ユーザーがシステムを手動で再起動するまで操作を延期するには、`--later` パラメータを追加します。このパラメータを使用すると、操作はユーザーが再起動を開始した後に実行されます。このパラメータは、`create asz` 『59ページ』 コマンドと `resize asz` 『59ページ』 コマンドでしか使用できません。

再起動を必要としない操作で `--reboot` パラメータを指定した場合、このパラメータは無視されます。

`reboot after`

```
--reboot_after
```

操作の完了後に、サーバーを再起動します。

3.12.15 silent_mode

```
--silent_mode={on|off}
```

パラメータ値が `on` である場合、サイレント モードが有効になります。つまり、ユーザーによる操作が必要な状況がソフトウェアによって自動的に処理されます。ユーザーによる操作なしに処理を続行できない場合、その処理は失敗します。処理の詳細(エラーがある場合は、それも含む)は、処理のログに記載されます。

値が `off` かパラメータが指定されていない場合、コマンドでユーザーによる操作が許可されます。リムーバブル メディア(CD、DVD、またはテープ)の挿入など、ユーザーによる操作が必要な操作の場合は、この値を設定します。

バックアップ中にソフトウェアによって不良セクタが検出されたときに操作を回避するには、`--ignore_bad_sectors` 『101ページ』 パラメータを使用します。`--silent_mode` パラメータはこの特定のケースでは機能しません。

`--silent_mode` パラメータと `--force_yes` 『124ページ』 パラメータを同時に選択することはできません。

3.12.16 use_registry_defaults

```
--use_registry_defaults
```

このパラメータは、`recover mbr` 『24ページ』 を除くバックアップ コマンドおよび復元コマンドでのみ使用します。コマンド文字列で明示的に指定されていないバックアップおよび復元オプションの値が決定されます。

パラメータが指定されている場合は、Acronis Backup & Recovery 11.5 のグラフィック ユーザー インターフェイスで設定されるバックアップ オプションおよび 復元オプションのデフォルト値が使用されます。これらの値は、コマンドを実行するエージェントがインストールされているコンピュータに保存されます。Windows を実行しているコンピュータでは、この値はレジストリに保存されています。Linux を実行しているコンピュータでは、この値は Acronis Backup & Recovery 11.5 構成ファイルに保存されています。

このパラメータを指定しない場合、このコマンド ライン リファレンスに記述されているデフォルト値が使用されます。これらの値は、コマンド ライン ユーティリティ コードに格納されます。

4 使用例

4.1 バックアップと復元

4.1.1 ディスクとボリューム

ディスクの一覧表示 『20ページ』

- ローカル コンピュータのすべてのディスクを一覧表示します。

```
acrocmd list disks
```


- リモート コンピュータのディスクを一覧表示します。

```
acrocmd list disks --host=192.168.1.2 --credentials=user1,pass1
```

- 仮想コンピュータのディスクを一覧表示します。

```
acrocmd list disks --host=srv1 --credentials="srv1¥AMS user",pass1 --service=ams
--vmid=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
```

ディスクおよびボリュームのバックアップ『20ページ』

- 2 番目のディスクの最初のボリュームと最初のディスクの 3 番目のボリュームをバックアップします。バックアップは、ローカル フォルダに保存され、後で DVD に書き込むために 4.5 GB ずつに分割されます。ボリューム番号を取得するには、`list disks`『20ページ』 コマンドを使用します。

```
acrocmd backup disk --volume=2-1,1-3 --split=4608 --loc="F:¥my backups" --arc="my archive"
```

- コンピュータ全体を簡易名のファイルにバックアップします。詳細については、`--plain_archive`『97ページ』 パラメータの説明を参照してください。操作ログがテキストファイルに保存されます。

```
acrocmd backup disk --loc=F:¥ --arc=my_machine --plain_archive
--log=D:¥logs¥log.txt
```

- .bak ファイルを除くディスク 1 と 2 をバックアップします。圧縮レベルは最大に設定されます。バックアップはネットワーク共有フォルダに保存されます。ディスク番号を取得するには、`list disks`『20ページ』 コマンドを使用します。

```
acrocmd backup disk --disk=1,2 --compression=max --exclude_mask=*.bak
--loc=¥¥bkpsrv¥backups --credentials=bkpuser,pass --arc=disk_archive
```

- ボリューム C: の増分バックアップを作成します。ボリューム シャドウ コピー サービス(VSS) が有効になり、ハードウェアベースのスナップショット プロバイダまたはソフトウェアベースのスナップショット プロバイダが自動的に選択されます。バックアップは管理対象の格納域に保存されます。

```
acrocmd backup disk --volume=C --backuptype=incremental --use_vss=auto
--loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials=bkpuser,pass --arc=c_archive
```

- `list disks`『20ページ』 コマンドの出力に従い、Windows では最初のダイナミック ボリュームがバックアップされ、Linux では論理ボリュームがバックアップされます。バックアップはネットワーク共有フォルダに保存されます。

```
acrocmd backup disk --volume=DYN1 --loc=¥¥srv1¥backups
--credentials=netuser1,pass1 --arc=dyn1_arc
```

Linux で論理ボリュームを選択する方法の詳細については、「バックアップ用の論理ボリュームと MD デバイスの選択『148ページ』」を参照してください。

- Windows ではすべてのダイナミック ボリュームをバックアップし、Linux ではすべての論理ボリュームをバックアップします。バックアップは FTP サーバーに保存されます。

```
acrocmd backup disk --volume=DYN --loc=ftp://srv1/backups
--credentials=ftpuser1,pass1 --arc=alldyn_arc
```

- コンピュータをネットワーク共有フォルダにバックアップします。バックアップに成功すると、VSS 対応アプリケーション(Microsoft SQL Server を除く)のログは、バックアップ後に切り捨てられます。

```
acrocmd backup disk --loc=¥¥srv1¥backups --credentials=netuser1,pass1
--arc=my_apps --vss_full_backup
```

シングル パスのディスクおよびアプリケーションのバックアップ

- ローカル コンピュータのシングル パス バックアップを作成します。バックアップはネットワーク共有フォルダに保存されます。`--vss_full_backup`『104ページ』パラメータまたは`--mssql_truncate_logs`『96ページ』パラメータのいずれも指定されないため、VSS 対応アプリケーションのログは切り捨てられません。アプリケーションのメタデータの収集に失敗した場合、バックアップは続行されます。

```
acrocnd backup disk --application_aware --loc=¥¥srv1¥backups
--credentials=netuser1,pass1 --arc=machine1_app --ignore_app_errors
```

コマンドを実行するユーザーは、コンピュータにインストールされている各インスタンスの **sysadmin** ロールのメンバである必要があります。

- リモート コンピュータのシングル パス バックアップを作成します。バックアップはストレージノード上の格納域に保存されます。Microsoft SQL Server のログは、各バックアップ後に切り捨てられます。他の VSS 対応アプリケーションのログは切り捨てられません。任意のアプリケーションのメタデータの収集に失敗した場合、`--ignore_app_errors`『96ページ』パラメータが指定されていないため、バックアップに失敗します。

```
acrocnd backup disk --host=192.168.1.2 --credentials=user1,pass1
--application_aware --loc=bsp://storage_node1/my_vault --arc=my_archive_app
--mssql_truncate_logs
```

資格情報が `--host` パラメータの後に指定されているユーザーは、コンピュータにインストールされている各インスタンスの **sysadmin** ロールのメンバである必要があります。そのようなユーザーが存在しない場合は、管理サーバーを経由してコンピュータにアクセスできます。

```
acrocnd backup disk --host=srv1 --credentials="srv1¥AMS user",pass --service=ams
--address=192.168.1.2 --application_aware --loc=bsp://storage_node1/my_vault
--arc=my_archive_app --mssql_truncate_logs
```

この場合、コマンドは、コンピュータ上で実行しているエージェント サービスのアカウントの下で実行されます。

ディスクおよびボリュームの復元『22ページ』

ディスクの復元

- ネットワーク共有に置かれているアーカイブの最新のバックアップからコンピュータを復元します。`--disk`『88ページ』パラメータまたは `--volume`『89ページ』パラメータのどちらも指定していないので、コマンドによってすべてのバックアップされたディスクが復元されます。`--target_disk`『113ページ』パラメータまたは `--target_volume`『113ページ』パラメータのどちらも指定していないので、ディスクが自動的にターゲット コンピュータのディスクにマップされます。オペレーティング システムでコマンドを実行した場合、再起動のプロンプトが表示されます。

```
acrocnd recover disk --loc=¥¥srv1¥folder1 --credentials=user1,pass1
--arc=my_machine
```

- アーカイブの最新のバックアップからハード ディスク 1 と 2 をハード ディスク 3 と 4 に復元します。

```
acrocnd recover disk --loc=F:¥backups --arc=my_archive --disk=1,2 --target_disk=3,4
```

- NFS 共有フォルダに置かれたバックアップからハード ディスク 2 をハード ディスク 1 に復元します。

```
acrocnd recover disk --loc=nfs://server/backups:/ --arc=my_archive
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX --disk=2 --target_disk=1
```

- テープに含まれているアーカイブの最新バックアップから 2 つのハード ディスクを復元します。
`--target_disk` 『113ページ』 パラメータを指定していないので、ディスクが自動的にターゲット コンピュータのディスクにマップされます。

```
acrocmd recover disk --loc=atis:///tape?XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX
--arc=disk_archive --disk=2,3
```

- アーカイブの最新のバックアップからハード ディスク 1 をハード ディスク 4 に復元します。
アーカイブは、アーカイブに所属するバックアップのファイル名(`my_machine2.tib`)によって指定されます。コマンドが適用されるのは、`--arc` パラメータで指定されたバックアップではなく、最新のバックアップです。アーカイブ メタデータが失われた場合、コマンドはバックアップチェーンの最新のバックアップに適用されます。(バックアップ チェーンとは、完全バックアップと、それに依存する増分バックアップおよび差分バックアップすべてをいいます)。

```
acrocmd recover disk --loc=F:\backups --arc=my_machine2.tib --disk=1
--target_disk=4
```

ボリュームの復元

- アーカイブの最新のバックアップから最初のディスクの 2 番目のボリュームを復元します。
`--target_disk` 『113ページ』 パラメータまたは `--target_volume` 『113ページ』 パラメータのどちらも指定していないので、ボリュームが自動的に元のボリュームにマップされます。元のボリュームが見つからない場合は、ソフトウェアによって適切なサイズの最初の未割り当て領域に復元されます。適切なサイズの未割り当て領域が見つからない場合は、コマンドが失敗します。

```
acrocmd recover disk --loc=/home/user1/my_backups --arc=my_machine1 --volume=1-2
```

- バックアップから 3 つのボリュームを指定したボリュームに復元します。

```
acrocmd recover disk --loc=F:\ --arc=my_machine
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX --volume=1-1,1-2,2-1
--target_volume=3-1,3-3,4-1
```

- 管理対象の格納域内に置かれているバックアップからボリュームをハード ディスク 2 に復元しています。新しいボリュームはメガバイト 8192 から作成が開始されます。ボリュームのサイズは 6400 メガバイトで、「アクティブ」フラグが付けられます。

```
acrocmd recover disk --loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials=admin,pass
--arc=my_archive --backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX --volume=1-1
--target_disk=2 --start=8192 --size=6400 --type=active
```

- ベーシック ボリュームをアーカイブの最新のバックアップから最初のダイナミック ボリューム (Windows) または論理ボリューム (Linux) に復元します。

```
acrocmd recover disk --loc=¥¥srv1¥backups --credentials=netuser1,pass1
--arc=machine1_dyn1 --volume=2-1 --target_volume=DYN1
```

- ベーシック ボリューム(2-2)とダイナミック(論理)ボリューム(DYN4)をベーシック ディスクに復元します。

`--target_disk` 『113ページ』 パラメータを指定していないので、ボリュームはそのディスクの未割り当ての領域に復元されます。ベーシック ボリュームが作成されます。適切なサイズの未割り当て領域が見つからない場合は、コマンドが失敗します。

```
acrocmd recover disk --loc=F:\ --arc=my_machine
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX --volume=2-2,DYN4 --target_disk=3
```

- ダイナミック(論理)ボリュームをバックアップからダイナミック(論理)ボリュームに復元します。

```
acrocmd recover disk --loc=ftp://srv1/backups --credentials=ftpuser1,pass1
--arc=all_dyn_arc --backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX --volume=DYN3
--target_volume=DYN4
```

- ボリュームをディスク グループの未割り当て領域に復元します。ダイナミック ボリュームが作成されます。

次の例では、ベーシック ボリュームがバックアップされたため、作成されるボリュームの種類はシンプル ボリュームになります。

```
acrocnd recover disk --loc=F:¥ --arc=my_machine --volume=2-3
--target_volume=UNALLOCATED-DYN
```

次の例では、ダイナミック ボリュームがバックアップされたため、作成されるボリュームの種類はバックアップされたボリュームから継承されます。

```
acrocnd recover disk --loc=ftp://srv1/backups --credentials=ftpuser1,pass1
--arc=alldyn_arc --volume=DYN3 --target_volume=UNALLOCATED-DYN
```

MBR の復元『24ページ』

- Acronis セキュア ゾーン に置かれているアーカイブの最新のバックアップからハード ディスク 1 の MBR を同じハード ディスク 1 に復元します。

```
acrocnd recover mbr --loc=atis:///asz --arc=my_archive --disk=1 --target_disk=1
```

論理ボリューム構成の復元『25ページ』

- アーカイブの最新バックアップとして、ローカル コンピュータに同じ論理ボリューム構成を作成する処理。コンピュータは、Linux ベースのブータブル メディアで起動する必要があります。

```
acrocnd recover lvm_structure --loc=¥¥bkpsrv¥backups --credentials=netuser1,pass1
--arc=my_archive
```

4.1.2 ファイル

ファイルおよびフォルダのバックアップ『26ページ』

- ファイルをバックアップします。バックアップはローカル フォルダに保存されます。

```
acrocnd backup file --include=C:¥documents¥my_thesis.doc
--loc=E:¥backups¥my_thesis --arc=my_thesis
```

- ネットワーク共有フォルダのバックアップを作成します。バックアップはローカル フォルダに保存されます。アーカイブはパスワードで保護され、暗号化されます。

```
acrocnd backup file --include=¥¥srv1¥folder1 ¥¥srv2¥folder2 --password=123
--encryption=aes256 --loc=D:¥backups --arc=my_archive
```

- ローカル フォルダのバックアップを作成します。バックアップはストレージ ノード上の格納域に保存されます。ディスクのスナップショットを作成する必要があります。スナップショットを作成できない場合、バックアップは失敗します。

```
acrocnd backup file --include=D:¥documents --snapshot=always
--loc=bsp://storage_node1/my_vault --arc=my_archive
```

- Linux でユーザーのホーム ディレクトリをバックアップします。バックアップは SAMBA による共有に保存されます。

```
acrocnd backup file --include=/home/anna --loc=¥¥bkpsrv¥backups¥anna
--credentials=netuser1,pass1 --arc=home_dir
```

- ローカル フォルダのバックアップを作成します。バックアップは、暗号化が有効になった状態でオンライン ストレージに置かれます。

```
acrocnd backup file --include=c:¥work --password=123 --encryption=aes256
--loc=online:// --credentials="user@mail.com",pass --arc=my_archive
```

ファイルとフォルダの復元『28ページ』

- ローカル フォルダに保存されたバックアップから元のフォルダにファイルを復元します。

`--overwrite` パラメータは指定されないので既存のファイルが上書きされます。

```
acrocnd recover file --loc=E:\backups\my_thesis --arc=my_thesis
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX --file=C:\documents\my_thesis.doc
```

- Acronis セキュア ゾーンに置かれているアーカイブの最新のバックアップからフォルダとその内容をローカル フォルダに復元します。

```
acrocnd recover file --loc=atis:///asz --arc=my_archive --file=C:\Documents
--target=D:\my_folder
```

- フォルダとその内容をバックアップから復元します。アーカイブは、アーカイブに所属するバックアップのファイル名(`my_machine3.tib`)によって指定されます。この構文は、`--plain_archive`『97ページ』 パラメータを使用して作成されたアーカイブで便利です。コマンドが適用されるのは、`--arc` パラメータで指定されたバックアップではなく、`--backup` パラメータで指定されたバックアップです。

```
acrocnd recover file --loc=E:\backups\my_machine --arc=my_machine3.tib
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX --file=C:\Documents
--target=D:\my_folder
```

- ネットワーク共有に置かれているアーカイブの最新のバックアップのすべての内容を元のフォルダに復元します。既存のファイルおよびフォルダは上書きされません。ファイルのセキュリティ設定および元の日付は保持されます。

```
acrocnd recover file --loc=nfs://server/backups:/ --arc=my_data --overwrite=never
--recover_security=true --original_date
```

- Linux でのユーザーのホーム ディレクトリを SAMBA による共有に保存されたバックアップから復元します。

```
acrocnd recover file --loc=\\bkpsrv\backups\anna --credentials=netuser1,pass1
--arc=home_dir --backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX --file=/home/anna
```

- ネットワーク共有に置かれているアーカイブの最新のバックアップの内容を復元します。ソフトウェアによって、*.tmp ファイルと *.bak ファイルを除くすべてのファイルとフォルダがバックアップされます。

```
acrocnd recover file --loc=\\srv1\folder1 --credentials=user1,pass1 --arc=my_docs
--exclude=*.tmp,*.bak
```

4.1.3 仮想コンピュータ

仮想サーバーの一覧表示『29ページ』

- 指定した管理サーバー上に存在する仮想サーバーおよびサーバー クラスタを一覧表示します。

```
acrocnd list vmserver --host=srv1 --credentials="srv1\AMS user",pass1
--service=ams
```

仮想コンピュータの一覧表示『30ページ』

- 管理サーバーによって管理される仮想コンピュータの一覧を表示します。

```
acrocnd list vms --host=srv1 --credentials="srv1\AMS user",pass1 --service=ams
```

- 管理サーバーによって管理され、「エラー」状態になっている仮想コンピュータを一覧表示します。

```
acrocmd list vms --host=srv1 --credentials="srv1¥AMS user",pass1 --service=ams
--filter_status=error
```

仮想コンピュータのバックアップ『30ページ』

- 仮想コンピュータをバックアップします。増分バックアップは管理対象の格納域に保存されます。進行状況が表示されます。Changed Block Tracking (CBT) が仮想コンピュータに対して有効になっている場合、Acronis Backup & Recovery 11.5 は、個々のディスクの CBT 設定に従って CBT を使用します。

```
acrocmd backup vm --vmid=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
--loc="bsp://storage_node1/my vm vault" --arc="my vm archive"
--backuptype=incremental --progress --cvt_mode=on_if_enabled --host=srv1
--credentials="srv1¥AMS user",pass1 --service=ams
```

- 4 つの仮想コンピュータをバックアップします。コンピュータごとに別個のアーカイブが作成されます。すべてのコンピュータが並行してバックアップされます。CBT が有効化され、各仮想コンピュータで使用されます。

```
acrocmd backup vm
--vmid=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX1,XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
2,XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX3,XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX4
--loc=¥¥srv1¥folder1 --credentials=netuser1,pass1 --arc="[Virtualization Server
Type]_[Virtual Machine Name]_archive1" --simultaneous_backup=4 --host=srv1
--credentials="srv1/AMS user",pass1 --service=ams
```

仮想コンピュータの復元『32ページ』

- 管理対象の格納域に存在するアーカイブの最新バックアップからすべてのディスクを既存の仮想コンピュータに復元します。

```
acrocmd recover vm --vmid=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
--loc="bsp://storage_node1/my vm vault" --arc="my vm archive" --host=srv1
--credentials="srv1¥AMS user",pass1 --service=ams
```

- ¥¥bkpsrv¥vms 共有フォルダに保存されているアーカイブの最新のバックアップから最初のディスクを新しい VMware Workstation 仮想コンピュータに復元します。仮想コンピュータのファイルは、¥¥srv1¥vms 共有フォルダに保存されます。

```
acrocmd recover vm --disk=1 --vmname=my_vm_1 --vmtype=vmware --vmstorage=¥¥srv1¥vms
--credentials=netuser1,pass1 --loc=¥¥bkpsrv¥vms --credentials=netuser2,pass2
--arc="my vm archive" --host=srv1 --credentials="srv1/AMS user",pass1 --service=ams
```

- 指定したバックアップからすべてのディスクを新しい ESX(i) 仮想コンピュータに復元します。仮想コンピュータは、指定した ESX(i) サーバー (Server1) の Storage1 に作成されます。

```
acrocmd recover vm --vmname=my_vm_1 --vmserver_name=Server1 --vmstorage=Storage1
--loc=¥¥bkpsrv¥vms --credentials=netuser1,pass1 --arc="my vm archive"
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX --host=srv1
--credentials="srv1/AMS user",pass1 --service=ams
```

- アーカイブの最新のバックアップからすべてのディスクを新しい Hyper-V 仮想コンピュータに復元します。仮想コンピュータは、指定した Hyper-V サーバー (Server1) のローカル フォルダに作成されます。

```
acrocmd recover vm --vmname=my_vm_1 --vmserver_name=Server1
--vmstorage="C:¥ProgramData¥Microsoft¥Windows¥Hyper-V¥Virtual Machines"
--loc=¥¥bkpsrv¥vms --credentials=netuser1,pass1 --arc="my vm archive" --host=srv1
--credentials="srv1/AMS user",pass1 --service=ams
```


4.1.4 Microsoft Exchange

Exchange ストレージ グループおよびデータベースの一覧表示『34ページ』

- ローカル Exchange Server 上の Exchange ストレージ グループおよびデータベースの一覧表示。

```
acrocmd list exchange_databases --exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345
```

- Exchange Server 上の Exchange ストレージ グループおよびデータベースの一覧表示。
Exchange Server は、管理サーバーを経由してアクセスされます。

```
acrocmd list exchange_databases --host=srv1 --credentials=user,pass1 --service=ams  
--address=exch_srv --exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345
```

メールボックスおよびパブリック フォルダの一覧表示『34ページ』

- ローカル Exchange Server 上のすべてのデータベースのメールボックスおよびパブリックフォルダの一覧表示。

```
acrocmd list exchange_mailboxes --exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345
```

- Exchange Server 上のデータベースのメールボックスおよびパブリック フォルダの一覧表示。

```
acrocmd list exchange_mailboxes --host=exch_srv --credentials=user,pass1  
--exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345 --mailbox_location=db1
```

Exchange ストレージ グループおよびデータベースのバックアップ『35ページ』

- ローカル Exchange Server 上の 2 つのストレージ グループのバックアップ。バックアップは管理対象の格納域に保存されます。`--metadata_level`『101ページ』パラメータが指定されていないため、このパラメータの他の値と比較して、このバックアップは最も速くなります。ただし、結果として作成されたバックアップに含まれている個々の電子メールに(グラフィカル ユーザー インターフェイスを使用して)アクセスする場合は、かなり時間がかかることがあります。

```
acrocmd backup exchange_database --exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345  
--items=storage_group_1,storage_group_2 --loc=bsp://storage_node1/my_vault  
--credentials=bkpuser,pass --arc=exchg_db_arc(1)
```

- Exchange 2010 Server での 3 つのデータベースの高速完全バックアップの作成。バックアップはネットワーク共有に保存されます。`--metadata_level`『101ページ』パラメータは `all` に設定されているため、このパラメータの他の値と比較して、このバックアップは最も遅くなります。ただし、結果として作成されたバックアップに含まれている個々の電子メールに(グラフィカル ユーザー インターフェイスを使用して)アクセスする場合は、最も速くなります。

```
acrocmd backup exchange_database --host=exch_srv --credentials=user,pass1  
--exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345 --items=db1,db2,db5  
--loc=¥¥bkpsrv¥exchg_backups --credentials=bkpuser,pass --arc=exchg_db_arc(2)  
--express --metadata_level=all
```

メールボックスおよびパブリック フォルダのバックアップ『36ページ』

- Exchange Server 上の 2 つのメールボックスのバックアップ。バックアップは管理対象の格納域に保存されます。

```
acrocmd backup exchange_mailbox --host=exch_srv --credentials=user,pass1  
--exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345 --items="storage group 1/mailbox  
database/John P. Smith","storage group 1/mailbox database/Mary Ann Johnson"  
--loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials=bkpuser,pass  
--arc=exchg_mb_arc(1)
```

- ローカル Exchange Server 上のデータベースのすべてのメールボックスおよびパブリックフォルダのバックアップ。バックアップはネットワーク共有に保存されます。「削除済みアイテム」フォルダおよび「迷惑メール」フォルダに加えて、1 MB を超える添付ファイルは除外されます。

```
acrocmbd backup exchange_mailbox --exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345
--items="mailbox database" --loc=¥¥bkpsrv¥exchg_backups
--credentials=bkpuser,pass --arc=exchg_mb_arc(2) --exclude_size=1mb
--exclude_types=deleted,junk
```

Exchange ストレージ グループおよびデータベースの復元『37ページ』

- アーカイブの最新バックアップからの、2 つのデータベースを含むストレージ グループの復元。ストレージ グループは、新しいストレージ グループに復元されます。

```
acrocmbd recover exchange_database --host=exchange_srv
--credentials=user123,pass123 --exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345
--loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials=bkpuser,pass
--arc=exchg_db_arc(1) --items=storage_group_1 --recovery_point=latest_backup
--target=another_database --destination_database=new_sg --database=db1
--database_location=d:¥ExchData¥db1 --database=db2
--database_location=d:¥ExchData¥db2 --log_location=e:¥new_sg_logs
```

- データベース(Exchange 2010 以降)の、障害発生時点への復元(--recovery_point『112ページ』パラメータが指定されていないため、デフォルト値の point_of_failure が使用されます)。データベースはサーバー上の元のロケーションへ復元されます。

```
acrocmbd recover exchange_database --host=exchange_srv
--credentials=user123,pass123 --exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345
--loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials=bkpuser,pass
--arc=exchg_db_arc(2) --items=db1 --target=original
```

- 2 つのデータベース(Exchange 2010 以降)の、特定の時点への復元。データベースとトランザクション ログ ファイルがネットワーク共有に保存されます。

```
acrocmbd recover exchange_database --host=exchange_srv
--credentials=user123,pass123 --exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345
--loc=¥¥bkpsrv¥exchg_backups --credentials=bkpuser,pass --arc=exchg_db_arc(2)
--items=db1,db2 --recovery_point=point_in_time --pit="06.09.2011 17:00"
--target=disk --disk_location=¥¥host¥share --credentials=netuser,pass
```

メールボックスおよびパブリック フォルダの復元『39ページ』

- アーカイブの最新バックアップからのメールボックスの復元(--recovery_point『112ページ』パラメータが指定されていないため、デフォルト値の latest_backup が使用されます)。指定された Exchange Server にメールボックスが復元されます。

```
acrocmbd recover exchange_mailbox --host=exchange_srv
--credentials=user123,pass123 --exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345
--loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials=bkpuser,pass
--arc=exchg_mb_arc(1) --items="storage group 1/mailbox database/John P. Smith"
--target=original
```

- メールボックスの特定の時点への復元。この復元方法は、データベースレベルのバックアップでのみ利用できます。指定された Exchange Server にメールボックスが復元されます。

```
acrocmbd recover exchange_mailbox --host=exchange_srv
--credentials=user123,pass123 --exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345
--loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials=bkpuser,pass
--arc=exchg_mb_arc(1) --items="storage group 1/mailbox database/Mary Ann Johnson"
--recovery_point=point_in_time --pit="06.09.2011 17:00" --target=original
```

- 指定されたバックアップからのメールボックスの復元。pst ファイルにメールボックスが復元されます。pst ファイルはローカル フォルダに保存されます。


```
acrocmd recover exchange_mailbox --exchange_credentials=domain1¥exch_user1,12345
--loc=¥¥bkpsrv¥exchg_backups --credentials=bkpuser,pass --arc=exchg_mb_arc(2)
--items="mailbox database/Peter D. Wayne" --recovery_point=selected_backup
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX --target=pst
--disk_location="e:¥pst files"
```

4.1.5 Microsoft SQL

Microsoft SQL Server インスタンスの一覧表示『40ページ』

- ローカル コンピュータ上にある Microsoft SQL Server インスタンスを一覧表示します。

```
acrocmd list mssql_instances
```

- 名前に「WEB」フラグメントが含まれているリモート コンピュータ上の Microsoft SQL Server 2005 のインスタンスを一覧表示します。

```
acrocmd list mssql_instances --host=192.168.1.2 --credentials=user1,pass1
--filter_edition=2005 --filter_name=WEB
```

Microsoft SQL データベースの一覧表示『40ページ』

- リモート コンピュータ上にある Microsoft SQL Server インスタンスのデータベースを一覧表示します。`--credentials` パラメータは `--instance` パラメータの後には指定できないため、指定されたインスタンスに接続するには Windows 認証(`--host` パラメータの後に指定される認証)が使用されます。

```
acrocmd list mssql_databases --host=192.168.1.2 --credentials=user1,pass1
--instance=WEBSERVER
```

- 「NEWSERVER」インスタンスのデータベースのうち、名前に「account」フラグメントが含まれるデータベースのみを一覧表示します。`--credentials` パラメータは `--instance` パラメータの後には指定できないため、インスタンスに接続するには SQL Server 認証が使用されます。

```
acrocmd list mssql_databases --instance=NEWSERVER --credentials="SQL user",pass
--filter_name=account
```

Microsoft SQL サーバーのバックアップ

この操作は `backup disk` 『20ページ』 コマンドを使用して実行されます。「シングルパスのディスクおよびアプリケーションのバックアップ」の「ディスクとボリューム 『128ページ』」セクション内の例を参照してください。

Microsoft SQL データベースの復元『41ページ』

- アーカイブの最新バックアップからデータベースを復元します。`--target` 『85ページ』 パラメータは指定されないため、元のインスタンスにデータベースが復元されます。コマンドを実行するユーザーは、このインスタンスで **sysadmin** ロールのメンバである必要があります。このインスタンス内に同じ名前のデータベースが存在する場合、そのデータベースは上書きされます。Microsoft SQL ネイティブのバックアップから追加のトランザクション ログを復元できるように、データベースが `norecovery` 状態から復元されます。

```
acrocmd recover mssql_database --loc=¥¥srv1¥backups --credentials=netuser1,pass1
--arc=machine1_app --items=WEBSERVER/Accountants --overwrite
--database_state=norecovery
```

- 指定したバックアップからインスタンスのすべてのデータベースを抽出します。トランザクション ログ ファイルとともにデータベース ファイルがネットワーク共有に保存されます。

```
acrocmd recover mssql_database --loc=%$srv1%backups --credentials=netuser1,pass1
--arc=machine1_app --backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX
--items=NEWSERVER --target=disk --disk_location=%$host%share
--credentials=netuser,pass
```

- 指定したバックアップから 2 つのデータベースを復元します。データベースは別のインスタンスに復元されます。そのインスタンス内に同じ名前のデータベースが存在する場合、復元されたデータベースの名前が変更されます。`--database_state` パラメータは指定されないので、データベースは `recovery` 状態で復元されて使用できるようになります。

```
acrocmd recover mssql_database --loc=bsp://storage_node1/my_vault
--arc=my_archive_app --backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX
--items=WEBSERVER/Accountants,NEWSERVER/Anna --target=another_instance
--destination_instance=SUPERVISION --credentials="SQL user",pass2
--database_location=D:%$databases --autorename
```

コマンドを実行するユーザーが復元先インスタンスで **sysadmin** ロールのメンバである場合、`--credentials` パラメータを `--destination_instance` パラメータの後に指定する必要はありません。メンバでない場合は、**sysadmin** の資格情報を指定する必要があります。

4.1.6 Microsoft Active Directory

ドメイン コントローラのバックアップ

この操作は `backup disk` 『20ページ』 コマンドを使用して実行されます。「シングル パスのディスクおよびアプリケーションのバックアップ」の「ディスクとボリューム 『128ページ』」セクション内の例を参照してください。

Microsoft Active Directory データの復元 『42ページ』

- ネットワーク共有に置かれているアーカイブの最新のバックアップから Microsoft Active Directory データをファイルとして抽出します。ファイルはローカル フォルダに保存されます。`--overwrite` 『110ページ』 パラメータが指定されていないので、既存のファイルが上書きされます。

```
acrocmd recover ad_database --loc=%$srv1%backups --credentials=netuser1,pass1
--arc=machine1_app --target=E:%$ad_db
```

- ストレージ ノードの格納域に格納されているバックアップから Microsoft Active Directory データをファイルとして抽出します。ファイルはネットワーク共有に保存されます。既存のファイルは上書きされません。ファイルの元の日付は保持されます。

```
acrocmd recover ad_database --loc=bsp://storage_node1/my_vault
--credentials=bkpuser,pass --arc=my_archive_app
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX --target=%$share%active_dir$new
--credentials=netuser2,pass2 --overwrite=never --original_date
```

4.2 アーカイブおよびバックアップの操作

4.2.1 アーカイブ

アーカイブの一覧表示 『43ページ』

- 管理対象の格納域内のアーカイブを一覧表示します。`--all` パラメータが指定されているため、それぞれのアーカイブにすべてのフィールドが出力されます。すべてのフィールドとは、名前、作成日付、アーカイブにデータが格納されているコンピュータ、所有者（アーカイブを保存先に保

存したユーザー)、使用領域(バイト)のプロパティ、およびアーカイブについてのコメントのことで

```
acrocnd list archives --all --loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials="ASN user",pass123
```

アーカイブのエクスポート『44ページ』

- 共有フォルダに保存されたパスワードで保護されたアーカイブをローカル フォルダにエクスポートします。

```
acrocnd export archive --loc=¥¥bkpsrv¥backups --credentials=netuser1,pass --arc=my_archive --password=123 --target=E:¥copies --target_arc=my_archive_copy
```

- すべてのアーカイブを、管理対象の格納域から共有フォルダにエクスポートします。

```
acrocnd export archive --loc=bsp://storage_node/my_vault --credentials="ASN user",pass --target=¥¥bkpsrv¥backups --credentials=netuser,pass2
```

指定された格納域の管理者のログイン情報を最初に指定して、そこに格納されているすべてのアーカイブにアクセスできるようにする必要があります。2 番目のログイン情報によって共有フォルダへの書き込みが有効になります。

管理対象の格納域からのアーカイブのエクスポートは、常に Storage Node Service によって実行されます。上の例では、ローカル コンピュータで実行している **mms** サービスによって、**asn** サービスにコマンドが転送されます。同じコマンドをストレージ ノード(**mms** が実行していない)で直接実行する場合は、次のように、ストレージ ノード ホストの後に "ASN user" というログイン情報を指定します。

```
acrocnd export archive --host=storage_node --credentials="ASN user",pass --service=asn --loc=bsp://storage_node/my_vault --target=¥¥bkpsrv¥backups --credentials=netuser,pass2
```

- アーカイブをストレージ ノードのローカル フォルダから管理対象の格納域にインポートします。
使用シナリオ: リムーバブル デバイスに最初の完全バックアップによってアーカイブを作成し、ストレージ ノードがインストールされているリモートのロケーションにこのデバイスを移動させてから、管理対象格納域にこのアーカイブをインポートします。以後は、続く増分バックアップをネットワーク経由で管理対象の格納域に転送またはレプリケートできます。

```
acrocnd export archive --host=storage_node --credentials="ASN user",pass --service=asn --loc=E:¥folder --arc=my_archive --target=bsp://storage_node/my_vault --progress
```

この例では、アーカイブがストレージ ノードのローカル フォルダからインポートされるため、パラメータ値 **--service=asn** が使用されています。ネットワーク共有からアーカイブをインポートする場合は、任意のサービス(**asn**、**mms**、または **ams**)によってコマンドが実行されます。ただし、運用サーバーにインストールされたエージェントからのインポートをオフロードする場合は、**asn** サービスからの実行が最適です。

アーカイブのベリファイ『45ページ』

- アーカイブのすべてのバックアップをベリファイします。

```
acrocnd validate archive --loc=E:¥backups¥ --arc=my_archive
```

アーカイブのカタログ化『46ページ』

- 共有フォルダに保存されているアーカイブのすべてのバックアップをカタログ化します。

```
acrocnd catalog archive --loc=¥¥bkpsrv¥backups --credentials=netuser,pass --arc=my_archive
```

アーカイブの削除『47ページ』

- アーカイブを削除します。

```
acrocmd delete archive --loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials="ASN user",pass123 --arc=my_archive
```

4.2.2 バックアップ

バックアップの一覧表示『47ページ』

- ローカル フォルダに保存されているアーカイブのバックアップを一覧表示します。出力は、RAW フォーマット『126ページ』で表示されます。そのため、バックアップの完全な GUID を表示および使用することができます。

```
acrocmd list backups --loc=E:¥backups¥ --arc=my_archive --output=raw
```

- 管理対象の格納域に保存されているアーカイブのバックアップを一覧表示し、すべての出力をテキスト ファイルに保存します。これにより、スクリプト内でバックアップの GUID を使用することができます。

次の例では、RAW フォーマット『126ページ』の出力が、テキスト ファイルにリダイレクトされます。

```
acrocmd list backups --loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials="ASN user",pass123 --arc=my_archive --output=raw > c:¥GUID.txt
```

次の例では、出力データが含まれる処理のログが構造化 XML フォーマットでテキスト ファイルに書き込まれます。

```
acrocmd list backups --loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials="ASN user",pass123 --arc=my_archive --log=c:¥log.txt
```

バックアップの内容の一覧表示『48ページ』

- Acronis セキュア ゾーンに置かれているアーカイブからバックアップの内容を一覧表示します。

```
acrocmd list content --loc=atis:///asz --credentials=aszpass --arc=my_archive --backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
```

バックアップのベリファイ『49ページ』

- バックアップをベリファイします。

```
acrocmd validate backup --loc=E:¥backups¥ --arc=my_archive --backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
```

バックアップのカタログ化『49ページ』

- ネットワーク フォルダに保存されているアーカイブの最新のバックアップをカタログ化します。

```
acrocmd catalog backup --loc=¥bkpsrv¥backups --credentials=netuser,pass2 --arc=my_archive
```

- 管理対象の格納域に保存されているバックアップをカタログ化します。このコマンドの実行元のコンピュータに関係なく、カタログ化は常にストレージ ノードによって実行されます。この例では、ストレージ ノード上でコマンドを実行すると仮定しています。

```
acrocmd catalog backup --loc=bsp://storage_node1/my_vault --arc=my_archive --backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX --service=asn
```

バックアップのエクスポート『50ページ』

- 管理対象の格納域に保存されているアーカイブの選択したバックアップをローカル フォルダにエクスポートします。

```
acrocmd export backup --loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials="ASN
user",pass --arc=my_archive --password=123
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX1,XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXX
XX2 --target=E:¥copies --target_arc=my_archive_copy
```

- アーカイブの最新のバックアップをネットワーク フォルダから管理対象の格納域にインポートします。

```
acrocmd export backup --host=storage_node --credentials=user1,pass1 --service=asn
--loc=¥¥bkpsrv¥backups --credentials=netuser,pass2 --arc=my_archive
--target=bsp://storage_node/my_vault --progress
```

--service=asn のパラメータ値が使用されているため、コマンドは Storage Node Service によって実行されます。指定された記憶域のユーザーのログイン情報を最初に指定する必要があります。2 番目のログイン情報によって共有フォルダからの読み取りが有効になります。

バックアップのコピー『51ページ』

- ローカル フォルダに保存されているアーカイブの最新のバックアップをコンピュータに直接接続されているテープ デバイスにコピーします。

```
acrocmd replicate backup --loc=C:¥Backups --arc=my_archive --password=123
--target=atis:///tape?XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX
```

- アーカイブの選択されたバックアップを、ネットワーク共有から Acronis Online Backup Storage にレプリケーションします。

```
acrocmd replicate backup --loc=¥¥bkpsrv¥backups --credentials=netuser,pass1
--arc=my_archive --backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX
--target=online:// --credentials=user@mail.com,pass2
--target_arc=my_archive_copy
```

完全バックアップへの変換『52ページ』

- アーカイブの最新バックアップを完全バックアップに変換します。処理の結果として、増分バックアップまたは差分バックアップが同じ時点の完全バックアップに置き換えられます。

```
acrocmd convert full --loc=C:¥Backups --arc=my_archive
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX
```

バックアップの統合『53ページ』

- 指定されたバックアップ以外のすべてのバックアップをアーカイブから削除します。

```
acrocmd consolidate backup --loc=C:¥Backups --arc=my_archive --password=123
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX1,XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXX
XX2
```

バックアップの削除『54ページ』

- 指定されたバックアップをアーカイブから削除します。

```
acrocmd delete backup --loc=C:¥Backups --arc=my_archive --password=123
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX1,XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXX
XX2
```

4.2.3 マウント

マウントの一覧表示『55ページ』

- バックアップからマウントされたボリュームを一覧表示します。

```
acrocmd list mounts
```

マウント『55ページ』(エージェント for Windows のみ)

- 最初のディスクの最初のボリュームをバックアップから読み取り専用モードでマウントします。マウントされたボリュームには、ドライブ文字「Z」が割り当てられます。

```
acrocmd mount --loc=E:\backups --arc=my_archive  
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX --volume=1-1 --letter=Z
```

マウント『55ページ』(エージェント for Linux のみ)

- アーカイブの最新のバックアップから 2 番目のディスクの最初のボリュームをマウントします。このアーカイブは `srv1` ノードにあり、このノードは NFS によってエクスポートされる `/backups` ディレクトリにあります。

```
acrocmd mount --mount_point=/mnt/md1 --loc=nfs://srv1/backups --arc=my_archive  
--volume=1-2
```

- 最初のディスクの最初のボリュームをバックアップから読み取り/書き込みモードでマウントします。

```
acrocmd mount --mount_point=/mnt/md2 --loc=/home/backups --arc=mybackup  
--backup=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX --volume=1-1 --rw
```

マウント解除『56ページ』(エージェント for Windows のみ)

- ボリュームをマウント解除します。

```
acrocmd umount --letter=Z
```

マウント解除『56ページ』(エージェント for Linux のみ)

- マウント ポイントでマウントされたデバイスをマウント解除します。

```
acrocmd umount --mount_point=/mnt/md1
```

4.2.4 SQL データベースのマウント

マウントの一覧表示『57ページ』

- バックアップからマウントされた Microsoft SQL データベースを一覧表示します。

```
acrocmd list mssql_mounts
```

SQL データベースのマウント『57ページ』

- アーカイブの最新バックアップから 2 つのデータベースをマウントします。

```
acrocmd mount mssql_database --loc=\\srv1\backups --credentials=netuser1,pass1  
--arc=machine1_app --items=WEBSERVER/Accountants,NEWSERVER/Anna  
--destination_instance=SUPERVISION --credentials="SQL user",pass2
```

SQL データベースのマウント解除『58ページ』

- 「`SUPERVISION`」インスタンスにマウントされているすべてのデータベースを、`mount mssql_database` コマンドを使用してマウント解除します。

```
acrocmd umount mssql_database --items=SUPERVISION
```


4.3 Acronis セキュア ゾーンの操作

Acronis セキュア ゾーンの作成『59ページ』

- Acronis セキュア ゾーンをローカル コンピュータのディスク 2 に作成します。`--asz_size` 『116ページ』 パラメータが指定されていないので、Acronis セキュア ゾーンはデフォルトのサイズで作成されます。デフォルトのサイズは、最大(すべての未割り当て領域)と最小(約 50 MB)の平均値です。

```
acrocmd create asz --disk=2
```

- サイズが 500 MB の Acronis セキュア ゾーンをローカル コンピュータのディスク 1 に作成します。未割り当て領域が不足している場合、そのディスクの 2 番目のボリュームから領域が取得されます。

```
acrocmd create asz --disk=1 --volume=1-2 --asz_size=500
```

- サイズが 20 GB の Acronis セキュア ゾーンをリモート コンピュータのディスク 1 に作成します。

```
acrocmd create asz --host=192.168.1.2 --credentials=john,pass1 --disk=1  
--asz_size=20gb
```

Acronis セキュア ゾーン のサイズ変更『59ページ』

- Acronis セキュア ゾーン のサイズおよび空き領域をギガバイト単位で表示します。

```
acrocmd resize asz --size_measure=gb
```

- ローカル コンピュータ上で Acronis セキュア ゾーン を拡大します(現在のサイズが 10 GB より小さいと仮定します)。Acronis セキュア ゾーン はディスク 1 上にあります。そのディスクの未割り当て領域が十分でない場合、領域はそのディスクの 2 番目のボリュームから取得されます。コマンド出力には、結果的なサイズと空き領域がギガバイト単位で含まれます。

```
acrocmd resize asz --asz_size=10gb --volume=1-2 --size_measure=gb
```

- リモート コンピュータ上で Acronis セキュア ゾーン を縮小します(現在のサイズが 10 GB より大きいと仮定します)。`--volume` パラメータが指定されないで、空き領域は未割り当てになります。また、`--size_measure` パラメータが指定されないで、コマンド出力には結果的なサイズと空き領域がメガバイト単位で含まれます。

```
acrocmd resize asz --host=192.168.1.2 --credentials=john,pass1 --asz_size=10gb
```

Acronis セキュア ゾーンのクリーンアップ『60ページ』

- ローカル コンピュータ上の Acronis セキュア ゾーンをクリーンアップします。クリーンアップ操作により、停電などが原因で破損したバックアップが削除されます。

```
acrocmd cleanup asz
```

- リモート コンピュータ上の Acronis セキュア ゾーンをクリーンアップします。

```
acrocmd cleanup asz --host=srv1 --credentials="srv1¥AMS user",pass1 --service=ams  
--address=192.168.1.2
```

Acronis セキュア ゾーンの削除『61ページ』

- ローカル コンピュータの Acronis セキュア ゾーンに保存されたアーカイブの最新のバックアップを削除します。

```
acrocmd delete asz_files --credentials=asz_pass --arc=my_archive --password=123
```

Acronis セキュア ゾーンの削除『61ページ』

- ローカル コンピュータから Acronis セキュア ゾーンを削除します。解放される領域は、ディスク 1 (Acronis セキュア ゾーンが置かれるディスク) の最初のボリュームに追加されます。

```
acrocmd delete asz --volume=1-1
```

- リモート コンピュータから Acronis セキュア ゾーンを削除します。解放される領域は未割り当てになります。

```
acrocmd delete asz --host=srv1 --credentials="srv1\AMS user",pass1 --service=ams --address=192.168.1.2
```

4.4 Acronis Startup Recovery Manager の操作

Acronis Startup Recovery Manager のアクティブ化『62ページ』

- ローカル コンピュータ上で Acronis Startup Recovery Manager をアクティブ化します。

```
acrocmd activate asrm
```

- リモート コンピュータ上で Acronis Startup Recovery Manager をアクティブ化します。

```
acrocmd activate asrm --host=srv1 --credentials="srv1/AMS user",pass1 --service=ams --address=192.168.1.2
```

Acronis Startup Recovery Manager の非アクティブ化『62ページ』

- ローカル コンピュータ上で Acronis Startup Recovery Manager を非アクティブ化します。

```
acrocmd deactivate asrm
```

- リモート コンピュータ上で Acronis Startup Recovery Manager を非アクティブ化します。

```
acrocmd deactivate asrm --host=srv1 --credentials="srv1/AMS user",pass1 --service=ams --address=192.168.1.2
```

4.5 テープの操作

テープ ライブラリの一覧表示『63ページ』

- ローカル コンピュータに接続されているすべてのテープ ライブラリ、およびスタンドアロン テープ ドライブに関する情報を表示します。出力は、RAW フォーマット『126ページ』で表示されます。そのため、テープ ライブラリの完全な GUID を表示および使用することができます。

```
acrocmd list tape_libraries --output=raw
```

- ローカル コンピュータに接続されているテープ デバイスに関する情報を表示します。

```
acrocmd list tape_libraries --filter_name="hp MSL6060"
```

- Acronis Backup & Recovery 11.5 Storage Node に接続されているすべてのテープ デバイスに関する情報を表示します。

```
acrocmd list tape_libraries --host=storage_node --credentials="ASN user",pass --service=asn
```

テープ スロットの一覧表示『63ページ』

- ローカル コンピュータに接続されているテープ ライブラリすべてのスロットに関する情報を表示します。

```
acrocmd list tape_slots
```


- ローカル コンピュータに接続されているテープ ライブラリのスロットに関する情報を表示します。出力は、RAW フォーマット『126ページ』で表示されます。そのため、テープ ライブラリ スロットの完全な GUID を表示および使用することができます。

```
acrocmd list tape_slots --filter_library=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX
--output=raw
```

テープのインベントリ『64ページ』

- 2 つのテープ デバイスにロードされているテープのインベントリを行います。`--mode`『122ページ』パラメータが指定されていないので、高速インベントリが行われます。

```
acrocmd inventory tape
--libraries=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX1,XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXX
XXXXX2
```

- テープ デバイスにロードされているテープの完全インベントリ。検出されたテープは認識されないテープまたはインポートされたテープ プールから空きテープ プールに移動されます。

```
acrocmd inventory tape --libraries=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX
--mode=full --assign2free
```

- テープ ライブラリの 3 つのスロットにロードされているテープの完全インベントリ。

```
acrocmd inventory tape --mode=full
--libraries=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX
--slots=YYYYYYYY-YYYY-YYYY-YYYY-YYYYYYYYYYYY1,YYYYYYYY-YYYY-YYYY-YYYY-YYYYYYYY
Y2,YYYYYYYY-YYYY-YYYY-YYYY-YYYYYYYYYYYY3
```

- 高速インベントリと完全インベントリの組み合わせ。

テープ デバイス全体の完全インベントリには、時間がかかることがあります。インベントリの対象となるテープが数本である場合は、高速インベントリと完全インベントリを組み合わせます。

1. テープ デバイスで高速インベントリを実行します。

```
acrocmd inventory tape --libraries=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX
```

2. テープ デバイスのテープ スロットを一覧表示します。テープ スロットの GUID をすべて表示するには、`--output=raw` パラメータを指定します。

```
acrocmd list tape_slots --filter_library=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX
--output=raw
```

3. コマンドの出力から、インベントリの対象となるテープを検索し、それが占有しているスロットを確認します。

4. それらのスロットの完全インベントリを実行します。

```
acrocmd inventory tape --mode=full
--libraries=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXXX
--slots=YYYYYYYY-YYYY-YYYY-YYYY-YYYYYYYYYYYY1,YYYYYYYY-YYYY-YYYY-YYYY-YYYYY
YYYYY2
```

4.6 格納域の操作

格納域のベリファイ『65ページ』

- パスワードで保護されたアーカイブを除いた管理対象の格納域内のすべてのアーカイブをベリファイします。パスワードで保護されたアーカイブをベリファイするには、`validate archive`『45ページ』コマンドを使用します。

```
acrocmd validate vault --loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials="ASN
user",pass123
```

- パスワードで保護されたアーカイブを除いたネットワーク共有フォルダ内のすべてのアーカイブをベリファイします。

```
acrocmd validate vault --loc=¥srv1¥backups --credentials=netuser1,pass1
```

格納域のカタログ化『65ページ』

- ローカル フォルダに保存されているすべてのバックアップをカタログ化します(データ カタログによってサポートされていないバックアップを除きます。コマンドの説明を参照してください)。

```
acrocmd catalog vault --loc=E:¥backups¥
```

- 管理対象の格納域に保存されているすべてのバックアップをカタログ化します(データ カタログによってサポートされていないバックアップを除きます。コマンドの説明を参照してください)。この操作は常に Storage Node Service によって実行されます。

```
acrocmd catalog vault --loc=bsp://storage_node1/my_vault --credentials="ASN user",pass123 --progress
```

格納域のエクスポートと格納域へのアーカイブのインポート

これらの操作は、`export archive` 『44ページ』 コマンドによって実行されます(「例 『138ページ』」を参照してください)。

4.7 ディスクの操作

ディスクのクローン作成『66ページ』

- ローカル コンピュータのディスク 2 のクローンを同じコンピュータのディスク 3 上に作成します。

```
acrocmd clone disk --source=2 --target=3
```

4.8 管理の操作

4.8.1 情報の収集

ログの取得『67ページ』

- 指定した GUID のアクティビティのログをファイルにエクスポートします。

```
acrocmd get log --id=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX --loc=c:¥logs¥task.log
```

アクティビティの一覧表示『68ページ』

- ローカル コンピュータ上で実行されている Acronis 管理対象のコンピュータ サービスの現在のすべてのアクティビティを表示します。出力は、RAW フォーマット 『126ページ』で表示されます。そのため、アーカイブの完全な GUID を表示および使用することができます。

```
acrocmd list activities --output=raw
```

- Acronis Backup & Recovery 11.5 管理サーバーの実行中のアクティビティを表示します。

```
acrocmd list activities --host=srv1 --credentials="srv1¥AMS user",pass1 --service=ams --filter_state=running
```

- リモート コンピュータ上で実行されている Acronis 管理対象のコンピュータ サービスのアクティビティを表示します。表示されるのは、完了したアクティビティだけです。

```
acrocmd list activities --host=srv1 --credentials="srv1¥AMS user",pass1 --service=ams --address=192.168.1.2 --filter_state=completed
```

- Acronis Backup & Recovery 11.5 ストレージ ノードの実行中のアクティビティを表示します。アクティビティの開始から経過した時間を表示するコマンド出力を確認することで、ストレージ ノードで停止したプロセスを検出できます。

```
acrocmd list activities --host=srv1 --credentials="srv1¥ASN user",pass1
--service=asn --filter_state=running
```

システム情報の取得『69ページ』

- ローカル コンピュータのシステム情報をファイルに保存します。

```
acrocmd sysinfo --loc=c:¥logs¥sysinfo.zip
```

4.8.2 計画

計画の一覧表示『69ページ』

- ローカル コンピュータ上のバックアップ計画をすべて表示します。出力は、RAW フォーマット『126ページ』で表示されます。そのため、計画の完全な GUID を表示および使用することができます。

```
acrocmd list plans --output=raw
```

- Acronis Backup & Recovery 11.5 管理サーバーに存在する集中管理されたバックアップ計画をすべて表示します。

```
acrocmd list plans --host=srv1 --credentials="srv1¥AMS user",pass1 --service=ams
```

- ローカル コンピュータ上の **warning** ステータスのバックアップをすべて表示します。

```
acrocmd list plans --filter_status=warning
```

計画の削除『70ページ』

- ローカル コンピュータ上のバックアップ計画を削除します。

```
acrocmd delete plan --id=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
```

計画のエクスポート『70ページ』

- バックアップ計画をローカル コンピュータからファイルにエクスポートします。

```
acrocmd export plan --id=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
--loc=c:¥temp¥plan.xml
```

計画のインポート『71ページ』

- バックアップ計画をローカル コンピュータにインポートします。

```
acrocmd import plan --loc=c:¥temp¥plan.xml
```

計画の無効化『72ページ』

- ローカル コンピュータ上のバックアップ計画を無効化します。

```
acrocmd disable plan --id=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
```

計画の有効化『72ページ』

- ローカル コンピュータの無効化されたバックアップ計画を有効化します。

```
acrocmd enable plan --id=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
```

4.8.3 タスク

タスクの一覧表示『73ページ』

- ローカル コンピュータ上のすべてのタスクを表示します。出力は、RAW フォーマット『126ページ』で表示されます。そのため、タスクの完全な GUID を表示および使用することができます。

```
acrocnd list tasks --output=raw
```

- リモート コンピュータ上のすべての実行中のタスクを表示します。

```
acrocnd list tasks --host=192.168.1.2 --credentials=user1,pass1  
--filter_state=running
```

タスクの実行『73ページ』

- ローカル コンピュータ上でタスクの実行を開始します。

```
acrocnd run task --id=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
```

タスクの停止『74ページ』

- リモート コンピュータ上でタスクの実行を停止します。

```
acrocnd stop task --host=srv1 --credentials="srv1¥AMS user",pass1 --service=ams  
--address=192.168.1.2 --id=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
```

タスクの削除『74ページ』

- ローカル コンピュータ上のタスクを削除します。

```
acrocnd delete task --id=XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX
```

4.8.4 ライセンス

ライセンスの一覧表示『75ページ』

- リモート コンピュータに割り当てられた Acronis Backup & Recovery 11.5 ライセンスを一覧表示します。

```
acrocnd list licenses --host=192.168.1.2 --credentials=user1,pass1
```

4.9 バックアップする論理ボリュームおよび MD デバイスの選択

システムに、Disk 1、Disk 2、Disk 3、および Disk 4 という 4 つの物理ディスクが存在すると仮定します。

- RAID-1 ボリュームは、2 つのベーシック ボリューム sdc1 および sdd1 上に構成されています。
- 論理ボリュームは、2 つのベーシック ボリューム sdc2 および sdd2 上に構成されています。
- Disk 3 は空です。

ボリュームの一覧は、次のコマンドを実行して取得できます。

```
acrocnd list disks
```

Num	Partition	Flags	Start	Size	Type	GUID

Disk 1						
1-1	sda1	Pri,Act	0.031 MB	203.9 MB	Ext 2	
1-2	sda2	Pri	204 MB	12,002 MB	Reiser	

1-3	sda3	Pri	12,206 MB	1,028 MB	Linux swap
Unallocated-1-1	Unallocated		13,233 MB	3,151 MB	
Disk 2				8,192 MB	PS_MBR
Unallocated-2-1	Unallocated		4,110 MB	4,082 MB	
Disk 3				1,024 MB	PS_NONE
Unallocated-3-1	Unallocated		0 MB	1,024 MB	
Disk 4				8,192 MB	PS_MBR
Unallocated-4-1	Unallocated		4,110 MB	4,082 MB	
Dynamic volumes:					
1 Dyn1	MyVG-MyLV		0 MB	4,096 MB	Ext 3 A5C349F8...
1 Dyn2	md0		0 MB	2,055 MB	Ext 2 FFF5E076...

論理ボリューム DYN1 は ベーシック ボリューム 2-2 および 4-2 を占有します(上記コマンドでは表示されません)。RAID-1 ボリュームの DYN2 は、ベーシック ボリューム 2-1 および 4-1 を占有します(これも、上記コマンドでは表示されません)。

論理ボリューム DYN1 をバックアップするには、次のコマンドを実行します(ここでは、バックアップの名前を `my_archive`、その場所を `/home/user` とします)。

```
acrocnd backup disk --volume=DYN1 --loc=/home/user --arc=my_archive
```

RAID-1 ボリューム DYN2 をバックアップするには、次のコマンドを実行します。

```
acrocnd backup disk --volume=DYN2 --loc=/home/user --arc=my_archive
```

3 つのハード ディスクとボリュームをすべてバックアップするには、ボリューム 1-1、1-2、1-3、DYN1、および DYN2 を選択します。

```
acrocnd backup disk --volume=1-1,1-2,1-3,DYN1,DYN2 --loc=/home/user --arc=my_archive
```

Disk 3、ボリューム 2-1、2-2、4-1、または 4-2 を選択すると、セクタ単位の raw バックアップが作成されます。

4.10 Linux での cron サービスを使用したバックアップのスケジュール

バックアップを自動化するには、多くの UNIX ユーザーが使い慣れている `cron` サービスを使用できます。

例

ボリュームを定期的にバックアップする必要があるとします。増分バックアップを毎日作成しながら、完全バックアップを毎週作成する必要があるとします。

`list disks` 『20ページ』 コマンドを使用して、必要なボリューム番号を取得します。たとえば、ボリューム番号が 2-1 であるとします。

日単位および週単位のバックアップ用に 2 つの実行可能ファイル(たとえば `abr.cron`)を作成し、それぞれ `/etc/cron.daily` ディレクトリと `/etc/cron.weekly` ディレクトリに置きます。

ボリューム 2-1 の完全バックアップを毎週開始するには、次の行を `/etc/cron.weekly/abr.cron` ファイルに追加します。

```
#!/bin/bash
acrocnd backup disk --volume=2-1 --loc=/mnt/my_archives/my_host --arc=my_archive
```

ここで `/mnt/my_archives/my_host` は、バックアップ保存先のパスです。

増分バックアップを毎日開始するには、2 つ目の **abr.cron** ファイルが必要です。

```
#!/bin/bash
acrocmd backup disk --volume=2-1 --backuptype=incremental
--loc=/mnt/my_archives/my_host --arc=my_archive
```

詳細については、[cron](#) サービスのヘルプを参照してください。

5 古いコマンドライン構文と新しいコマンドライン構文の比較

次の表に、Acronis Backup & Recovery 10 コマンドライン ユーティリティで使用されていたコマンドおよびそれに対応する Acronis Backup & Recovery 11.5 コマンドライン ユーティリティのコマンドを示します。この比較表は、新しいコマンドをすばやく簡単に知るのに役立ちます。

古い構文	新しい構文
asrm_activate	activate asrm
asrm_deactivate	deactivate asrm
asz_content	list archives
asz_create	create asz
asz_delete	delete asz
asz_delete_files	delete asz_files
asz_files	—
clone	clone disk
consolidate	export backup
convert	recover vm
create	backup disk
deploy	recover disk
deploy_mbr	recover mbr
explore	mount
export	export archive
export /include_pits:[pits numbers]	export backup
filebackup	backup file
filerestore	recover file
list	list disks
list /arc:[archive name] または、 list /arc_id:[archive id]	list backups
list /filename:[file name]	list content
list /vault:[path]	list archives
ls_check	list licenses
pit_info	list backups
unplug	umount

<code>verify</code>	<code>validate archive</code>
---------------------	-------------------------------

6 `acronis_encrypt` ユーティリティ

`acronis_encrypt` を使用すれば、パスワードなどの文字列を暗号化することができます。このユーティリティは、`acrocmd` ユーティリティまたは Acronis Backup & Recovery 11.5 管理コンソールがインストールされているすべてのコンピュータで使用できます。ユーティリティへのパスは次のとおりです。

- 32 ビット版 Windows: `%CommonProgramFiles%\Acronis\Utils`
- 64 ビット版 Windows: `%CommonProgramFiles(x86)%\Acronis\Utils`
- Linux: `/usr/sbin`

ユーティリティを使用するには、次の手順を実行します。

1. `acronis_encrypt` **<暗号化する文字列>** と入力します。
2. ユーティリティによって文字列が出力されます。たとえば、「XXXXYYZZ888」などです。
3. この文字列をコピーして、コマンド文字列またはスクリプトに貼り付けます。